

戀こそ 儘れ、  
葉卷きの くゆり香や。

有明は、四十年の短篇には、『絶望』『痴夢』『水のおもひ』『茉莉花』『秋のこゝろ』『晝のおもひ』等があつた。その作の實際に於てまだ、自然主義者の申しむ理想派的傾向がある。して、『やまうど』は渠の喜ぶ技巧を凝らしたものの一つだ。

やまうどは 微かに 呻く、わなわなと  
胸には ひすぶ 雙の手や、  
をみなよ、その手を……  
やまうどは 寝がへる けはひ。

やまうどの 枕を 暗く 寂しげに  
燈火 くもる 夜の室、  
をみなよ、照らしぬ……  
やまうどは 汗す、額に。

やまうどは 何をか もとむ、いさづかひ  
いと苦しげに つぶやける、  
をみなよ、聞け、問へ……  
やまうどの くちびる 褪せぬ。

やまうどの 眼は まろび 沈み入り、  
さしめぐらしさ 惱ましき。

やまうどは 落居ぬ 眠り、こめかみの  
脈 びよめきて また 弛ぶ、  
をみなよ、あな、あな……  
やまうどの おもて ほほえむ。

やまうどを この 東の間に、(その人の  
妻たる 三年)いかに 見る、  
をみなよ、おそれな……  
やまうどの 夢は 鈍きぬ。

やまうどの 枕をかへよ、舊りぬるも  
なほ 新たなる 布 ありや、  
をみなよ、いづくに……  
やまうどに ともしび 滅せぬ。

泣菫はまた、『海賊』『機關車の歌』『うちやり拾ひ』『停車場』『蛭輪』等があつた。全く古典派の舊思想に固つてゐるか

ら、頭腦は改まらないながら、歌ひ方に於ては渠も最近の潮流に觸れるものを見つけようとしてゐる。其『爐中の人』――

更くる 夜の 厨のさむさ  
冷えとほる 灰に もたれて  
火吹だるま、  
翁びし まみの 煤ばみ、  
かりそめの 火を はぐくみぬ。

ほのかなる ぬる火の ぬくみ、  
胸の脈 ゆたに ひくみて、  
火吹だるま、  
初立ちし 生命の 日かな、  
面はゆに 火屑を 吹きぬ。

はしり火の つぶやく 心地、  
ひしひしと 夢は こぼれぬ。  
火吹だるま、  
すずるなる 心の 踴躍、  
つぼ口の ふと ほくそ笑み。――

火移りの 火は 轟ひ合ひ、

だはれては また 火を 孕む。  
火吹だるま、  
面ほてり 汗ばむ けはひ、  
喘ぎつゝ かつ 息づきぬ。

われと わが火は 火を 燒きて、  
火を燃ゆる一生の あくがれ、  
火吹だるま、  
酔ひ伏しぬ、酔の たのしび、  
さあれ、また 刹那の 痛び

なべて みな 死にゆく 夜半を、  
責がねなす ほのほの空に、  
火吹だるま、  
どこわかの わが世を 夢み、  
やがて また 氣長に 倦みぬ。

夜は ふけつ、しじまの 間に  
凍みわるる 柵の 疼き。――  
火吹だるま、  
火は 消えつ、灰に うもれて

ひくろののみ かぐろく 冷えぬ。  
 與謝野鐵幹はさきにも云つた通り其時々の新流行を追ふに妙を得得るが、これは餘り讚めたてない。ここに引用するのも、直接に云へば、泣菫のと同様、近頃なくなつた架空虚偽な宗教論者、網島梁川のよるびた思想を受けて居るのが分る。到底、自然主義の深所に達することの出来ない、行き方である。然し、用語の自在は流石に上手なところがある。

其「詩星」

彼の 虚空、すぐるは 誰れぞ。  
 しろがねの 空條の 音、うかへ、  
 疾風、よき、雲、こそ 明れ。  
 蓬として、見よ、九万尺の  
 青き髪、せまに なびけり。  
 ああ、はうき星、未曾有と  
 なんぢを 讚す。命運の  
 外なる 道を 徂徠する  
 上天の 才、不退の子、  
 千万年に ひとたびの  
 秘密 もたらす 大使者よ。  
 常珍なる 戀の樹

黄がねの 長柄 高麗らし。  
 古し 世よりの 敷き ゆえ、  
 泣き爛れたる 雙の眸、  
 日月輪 も 金牛 も  
 大熊星 も 見かへらず、  
 たゞ あはれなる 地球星  
 半死 の さまを 一へらす。  
 ゆくへ は いづこ。まじぐらに  
 かなたへ、かなたへ、高光る  
 安樂の 土の 「永劫」に。

以上の引用を見ても分る通り、わが國現代詩界の狀態に於ては、最も新しい心理的詩歌は泡鳴の上にあらはれて居ると同時に、他の人々になるに従つて、古典的、傳習的、無獨創的、模倣的に傾いて行つて、その末流又は普通の讀詩家連には、單純なクラシク趣味が多い。之をよしとする一般の愛詩家、作詩家、時代から云へば一時代後れて居るもの——泡鳴は之を詩界に於けるデモクラト黨と冷笑した——の反動が詩界の新傾向に對して起るに相違ない。三十九年に出た角田浩々の「あやめ草評」や、帝國文學の四十年二月號に出た、藤岡東圃の「新體詩論」の如きは、乃ち、その先驅であつた。泡鳴は前者に對して攻撃の筆を下だしたと同様、逸早くもさ

た後者に對して「藤岡博士の新體詩論を評す」を讀賣新聞に載し、新體詩人のさきものものは既に昔日の乳臭兒でなく、いづれも一家の風を備へて居ること、哲學や宗教の保證が附かなければ、その詩歌は不健全なものと「思ふのは間違ひで」「詩人は標準その物を與へてかゝること、純情を目的とする詩歌は既に時代後れて、現代は「たゞに情意ばかりではない、智力までも燒燃流和せやうと努めて居る」こと、時々刻々の進歩的活動を詩歌に體現して行く」のが「叙情詩の眞價」であること、等を説いた。渠は之に飽き足らないで、更に、帝國文學會大會の席上に於て、來賓として、「自然主義的表象詩論」(帝國文學掲載)を演説し、今の新體詩の冷遇、反對等は「第一に、實利主義」「第二に、文學玩弄主義」「第三に、時代の相違」から來ることを論じ、エルレイン、マラルメ等の詩風を紹介し、うはすべりの七五調を以つて純感情を歌つた藤村や、新體詩に修辭學を教へた晩翠の時代は、もう過ぎ去つたこと、醉茗、泣菫兩家の様な自然派は……特にいつて行き易い詩風であるから、技巧さへよければ、愛讀者、寧ろ模倣者の多いこと、これから益々發展すべき詩風を個條書きにして、「(一)宗教的形式の脱却」、「(二)懷疑と煩悶」の必然、「(三)神經と自然との燃焼流化」、「(四)利那的生慾の發現」、「(五)情熱ばかりではなく、「心熱」的自覺、「(六)新語法と

新用語」、「(七)思想と技巧との純化」、「(八)新リズム」等のことと總合し、從來の美學の取るに足らないことを唱破して、「興發、熱烈、利那的表象の幻滅、これがリリク、乃ち、叙情詩の本領である」とし、この種の新詩歌は心理的詩歌であることを唱道した。  
 さきに擧げた鐵幹の「詩話」は、演壇の上では、この泡鳴の詩論に當つたところもあるさうだが、藝苑に出て居るのを見ると、直接にはそんな點は見えないが、根がクラシク趣味の話者である上に、若年作詩家を長らく取り扱ふ氣合ひを知つて居る人だけ、實に婉曲に自派の辯護が出來て居る、渠は象徴主義とか、自然主義とか云ふやうなことばかりを氣にすることなく、若い詩人は若い感情を生命として自家獨得の詩を作るが宜からう。  
 近頃また主義や黨派で色別して、一切の詩をその内に收めやうとする物好きな人々もあるが、その人々は、詩が個性の發揮を土臺として、一人一人特異の新體を創作するものであることに氣が附かぬか。  
 と云つた。この様な言は明星が自派の辯護にばかり急がしく、これまで自覺した主義はなかつたにしろ「黨派で色別し

て、「自派以外の詩人の「個性の發揮」を認めなかつた數々の惡手段の懺悔と見れば、正直で、痛切で、面白いはかりでなく、以後はますますこの自覺した意識を以つて、詩界に公明正大の詩評を試みて貰ひたい。然し、自己を責むべきことを以つて却つて泡鳴等の主義唱道に當るつもりなら、耳を押へて鈴を盗まうとすると同じな行き方だ。泡鳴の所謂主義は手段ではない。「百人百色萬人萬別」を許す、而も新詩の生命となつて居る主義である。

時事新報文藝記者も亦、五月「岩野泡鳴の自然主義的表象詩論を讀む」を掲げ、全體泡鳴の云ふ様な「新主義を、今の長詩で歌ふ事が出来るものと思つて居るのであらうか」と尋ねたが、これは、また、早稻田文學六月號の詩論「詩歌の根本疑」と同様、韻文よりは散文が自由だ、或はまたさうではあるまいかといふ問題であつた。泡鳴は「早稻田文學並に時事新報の記者に答ふ」を草し、讀賣新聞に於て、兩者に當り自己本位の白熱的刹那の存在と痛苦とは、之を表現するに、どうしても現今の（また將來の）不完全な言語を使用しなければならぬのだから、詩人が之を散文で表すにしろ、また韻文で現はすにしろ、その表現が不完全——諸君の所謂「漠然」または「朦朧」であるのは當然である。……且、散文家に一定または

窮屈と見える詩形は、詩人に千萬自由な天地であつて、これはその修養ある精神と生命とがものづから流れ出る形だ。散文を書く批評家や、興ざめた詩人には、この詩形は「つまづく石」であらうが、苟も精神の振つて居る詩人は之を何の苦もなく踏み越えて行くのである。

と辯じたと同時に、鐵幹の言と同様な、讀賣のにぎりめしい物さへ作ればいいとか、森鷗外が演藝書報で「主義は作家に取りては無用なり……自己の本領を發揮し得れば十分なり」とか云つた主義の手段所説を擧げて、渠泡鳴は、苟も「その人は定りさつたクラシク思想で固つた頭を持つて居る」のでない限りは、「いい物を作つたり、自己の本領を發揮するのに、無方針で行けるわけではない」所以を附言した。その他に、泡鳴は之と附隨した詩論で、「歌謡のリズムに就て佐々醒雪君に問ふ」を四十年三月の日本新聞に、「日本古代思想より近代の表象主義を論ず」を同年四、五、六月の早稻田文學に出した。前者は五、七、八等は詩句の一高脚ではなく、更らに之を刻んで、二、三、四に分けて考へなければ、緻密な近代詩想と合して行けないこと——これは、渠が既に、六年前、第一回韻文明朗讀會の席上で演説した——を説き、後者は渠の主義をわが國古代の神々の思想と生活とに探り、更らに又之を佛蘭西近代の表象詩派、エルレン、マラルメ等

の作に照らして論じた物だ。その餘論は新小説に出た「佛蘭西の表象詩派」だ。

そして、また、「百合合」から出た相馬御風、「白鳩」から出た人見東明、並に野口雨情、三木露風等は、別に主義もない様だが、年少氣銳の意氣込みを以つて集り、四十年になつてから、早稻田詩社を起し、また文庫派が解散して河井醉茗は十餘年來新詩の撰者であつた同派の機關「文庫」を退いて、夜雨と共に詩草社を設けて、雜誌詩人を出すことになつた。然しこれは四十一年になつてつゞけてしまつた。詩集には、溝口白羊の「さよふえ」、横瀬夜雨の「二十八宿」、一色醒川の「頌榮」、澤村胡夷の「湖畔の悲歌」、小林愛雄の「管絃」、野口雨情の小集「朝花夜花」の第一、第二等が出た。いづれも餘り注意を引かなかつたが、そのうち、雨情のは平淡な俗語體の詩であることを云つて置きたい。然し、それもまだ垢ぬけがして居ないので、端歌の意氣なところなどを出すには、まだ幾皮もひけた後でなければならぬ。また、醒川のは身づから宗教詩集と名のつて出た物だ。この種の集には、さきに「涙痕集」「迷の跡」があつたが、寺社宮殿の建築に附隨する繪畫や彫刻と同様、詩その物がいづれも宗教的形式の裝飾に過ぎない有様であつたのみならず、作者が宗教的經驗が淺かつたのかして、ウエヌレイ、その他の有名な讚美歌作者に見える苦

悶、痛恨、懺悔、悟入等の影はなかつたから、その名に對して「涙の痕がない」とか、「迷の跡が見えない」とか評された。寧ろ宗教から脱して、宗教上の經驗と事實とを材料にした泡鳴の「三界獨白」の方が、「宗教的鬱陶氣の濃厚なるを看取すべし」とまで云はれた。これは、宗教的作家は詩その物を手段視する惡弊が最も多くあるからであらう。醒川のもこれに近いものであつた。

怖るゝ勿れ 何處にも  
道は 眞すぐに 開けたり。  
\* \* \* \* \*  
光 やさしき タづゝを  
宿すに 馴れし 瞳 には、  
うらみの 色も 消え果て、  
終焉の 床の 安けさよ。

の如き、かの「は、エヌ愛す。は、エヌ愛す」とか「エヌにゐて、エヌにゐて」とかいふ貧拙な物から出て來た讚美歌よりは、遙かに進んで居るやうが、「ありていに言ふ」と、河井醉茗が文庫で云つた様に、「もつと虚心平氣に、宗教家と云ふ事を忘れ、只の詩人として其人格を詩化したならば、一層動かされたかと思ふ」。然し、その人格といふ物も、詩人には、時に詩その物に集中されて居て、社會上の人物として

は、泥濘や詐偽はしないまでも、泥濘漢、浮浪人、乞食、囚徒、同前ものがなきにしもあらずといふことを忘れてはならない。宗教臭いものは、必ず之に反対するだらうが、さういふ人々は詩その物の内容が既に最良最上の宗教だけの價格があるのを知らないのだ。夜雨が文庫に於ける評中に云つた言に據れば、醒川は「あれは詩人などとは、アヤメ會の總理ヨネノグチでも云ひさうに思はれて、何だか虫が好かない」と云つたとか。野口は同會總理ではない、たゞ同會より出る詩集の編輯者である、且、その著はした英詩集を見ると、泡鳴が會て白百合で評した通り、「いまだ左程に深きものにあらず」だが、「輕妙のうちには暗憐たる神祕の面影をほのめかせず」特色のある詩人だ。世間の事情に通ぜず、何の理由もなく、徒らに他人を自己の氣焰の材料に供するのは、詩人または宗教家として慎むべきことではなからうか？

和讀や讀美歌の外に、明治詩壇にも、宗教詩を作るもの、一人や二人あるのは、悪からう筈はないが、それにはその人々が宗教的經驗がもつと深く、同時に、詩的素養がもつと備つて來なければならぬ。宗教詩に論及した序に、今一つ少年詩の存在を云つて置かう、この種のもつては、巖谷小波が早く之を試みて居り、また泣菫の「子守唄」が詩集として出たが、泡鳴は、明治三十六年から、——その時代に於て云つ

て置いた通り雑誌「少年」に於て、毎月この種の短篇を出して來た。無邪氣な間に、詩的空想を浮ばせたり、趣味ある教訓を與へたりするのが、少年詩の特色であらう。こゝに、泡鳴の子守唄「笛の音」(入五調)を引いて置く。

向ふに きこえる 笛の音は、  
かあさま、どうして 鳴りますか——  
あアれば 遠くの 風の子 が、  
お家へ 歸りたい と 泣く聲ぞ。  
お母さん は 亡くなつて、おとうさんは  
その子 と お山へ 追ひ出だし、  
寒中 はだかの さび風 に  
お笛 の 音と なつて 泣く聲ぞ。  
寐やれ、お寐やれ、坊やは、ねえ、  
あつたかく お母かんの ふところ、  
ねんね の お夢に 笛の音の  
きこえる お山を ゆめみやれ。

これで新體詩の歴史は大體述べ盡してしまつたつもりだ。わが國に於ても、既に諸種の詩もあるし、種々な流派もあり、いろんな格調も出來て居るのが分つたであらう。日々新聞の春風道人は「新體詩は今尙未成品なり」と云つたが、それがたゞ概括的、理想的に云つたものなら、完成に完成を望むの

であるから、異論のないことだ。然し、若しそれが藤岡東圃の「新體詩論」と同様、古典的思想と判断とから來て居るものとすれば、折角これまで進歩して來た新體詩の、最新詩派をもとの淺薄な感情派に歸し、表象的自然主義的作物をもとの平凡な花鳥風月詩に拘束し、種々異様な獨創調をもつた、平且な七五調にしてしまはうとする偏見であるから、現今數名の新派詩人には、何等の痛痒をも感ぜしめないのである。

この詩史稿を書いた年、乃ち、四十年の詩界は實に議論の多かつた年であつた。同年の一般の文界は、創作に於ても、評論に於ても、新自然主義の立脚地を確めたのであつた。詩界に於ては泡鳴從來の苦悶詩、小説界に於ては花袋の勢力があつてその以前から新自然主義の傾向を導いて來たのだが、前年の「半獸主義」となり、「破戒」となり、同年に導入つてから、獨歩氏に對する批判となり、天溪、抱月、泡鳴等の評論となり、花袋、白鳥、紅緑の小説となり、今やこの新主義は立派な土臺が据わり、着々發展の見込みが附いて來た。新體詩界の舊新無素養者連は、自然主義の運動と泡鳴の新著「新體詩の作法」とに依つて、内外からかきさぜられてしまつたかの様な状態を呈した。然しそれも、無素養者等が覺醒し、有素養者等が實際に認められる機になつた所以であつた。

四十一年になつてから、泡鳴の長篇叙事詩「墮落日晴」が一

月の太陽に出て、太い大膽な線を以つて強姦後の苦悶を畫いた。また吉野臥城編纂の「明治詩集」は諸家の奮功を並べ擧げたもので、ちのづから一種の結末をつけた意味がある。右明の「有明集」は過ぎ行く光榮であるに反して、泡鳴の「關の盃盤」は來らうとする新發展の道途を示めたのだ。外にまた相馬御風の「御風詩集」、清水橋村の「築波紫」などが出たが、前者が多少注意すべきほか、別に云ふまでもなからう。して、數年前から實際の勢力を失ひつつあつた雜誌明星が、十一月になつて廢した。

この間に於て、小山内薫の古「夢見草」を最初とすべし散文詩——正當な意味に於ての——が、而も口語體を以つて、御風、泡鳴などの作に出るやうになつた。第七期の發展はこの散文詩並に、有形律でも、泡鳴の所謂自覺詩に於て見えて來るだらう。



# 第五編 短詩界の大勢

## 第一章 國粹保存的思想と

### 短詩界の奮起

茲に短詩界と稱するのは、和歌及び俳句のことである。元來我が國にては、詩とて言へば漢詩のことで、其の詩に對して和歌、俳句等の名稱が用ゐられ、更に其れ等に對して、新體詩なる名稱が作られた。何れも皆な詩の一體であるにも拘らず、各が特別の名稱を有してゐるのは、甚だ紛はしいとして、其れ等は、短に長詩及び短詩の名目を設け、其の短詩の中に和歌及び俳句の區別を立つるが至當であると思ふ。而して漢詩の如きは、一種の外國文學と見れば宜しく、また漢詩人の如きは、外國文學模倣者と見るが正當である。

倅て吾人は既に前編に於いて、新體詩界即ち長詩の變遷を略述したから、茲には短歌及び俳句の方面を記述しやう。本來ならば詩歌の變遷と題して、總括的に論述すべきであるが、習慣上の區別あるから、已むを得ず、編を改むることにしたのである。亦た歴史的に此の方が便利である。

何故に歴史的に便利であるかと言ふに、明治初年に於ける一般人士の詩に對する考が、截然として二様に派れて居たからである。其の一は詩の本體を會得したもの、即ち感想の發現其の物が詩であると言ふ解釋で、一方は之れを解して、一種の遊藝と見做してゐたのである。即ち一種の閑事業と解釋してゐた。而して前者の如く、感想の發露を詩の本體とし、之れと人生とが密接なる關係を有すと思惟したる人は、從來の詩形に満足せず、別に一新形式、乃ち新體詩たるものを創めたのである。固より其の生起した一面の理由は、歐化主義の全盛にあるが、其れのみとは言ふとは出來ぬ。從來の窮屈狹隘なる詩形にては、如何にしても新思想、新感情を表現する事が出來ぬから、長大自由の形式を選定したのである。

新體詩の方面は、國民が明治といふ新时期に入りて後、幾許もなく發達の緒に就いたが、和歌俳句の方面に至りては、國粹保存的思想の勃興した時代まで、全く惰眠を貪りつゝあつた。時勢が如何様に轉變しやうとも、或は新詩形が試みられやうとも、安閑として爲す所なかつたのは、何故であらうか。今日より觀れば、明治二十年頃に至る間の短詩界は時勢

と何等の交渉なきもの、所謂つても宜しい位である。

先づ和歌壇を回顧して看やう。明治當初に於いて、勢力があつたものは、所謂桂園派である。香川景樹其の人は、冷泉二條の歌風に反對して、一新機杼を創めた歌人に相違ないが、其の末派は、やはり形式に拘泥して、詩其の物の意義を解して居らぬものであつた。八田知紀(明治六年死)の如き、或は熊谷直好の如き、桂園派の泰斗であつて、殊に八田の門下には、高橋正風、黒田清綱、税所篤子、下田歌子などの歌人があつた。また明治三年には、御歌會始といふ古例が再興せられた。而して御歌所には、大口鯛二、小出燦、千葉常胤、などの人々も加はつて、茲に宮内省派なる歌道一派が組織されたのである。

更に其の他の歌人を見るに、中島歌子、木村正辭、小松楳郎、鈴木重嶺、鶴久子、松波遊山、海上胤平等の舊派が、依然として勢力を占めてゐた。彼れ等宮内省派も或は在野派も、當時に於いてこそ新舊を争ふてゐたが、今日より見れば、皆な頑迷なる舊思想の人々であつた。

彼れ等は、和歌は一の閑事業と心得てゐたのである。固より和歌は、専門に研究すべきもの、而して研究した人は、其の先生となる、同時に誰れ人も其の道に進み得るものであると解釋してゐたに相違ないが、詩想なくしては詩なるもの生

せず、單に技巧のみでは、和歌のみならず、苟しくも詩の範圍に屬すべきものは製作されぬと言ふ一大真理を闕却して居たのである。彼れ等の所謂詩歌とは、茶の湯か生花同様に、現實的人生とは何等の交際なきものであつた。

新體詩を作つた人々の詩想も貧弱なるものであつたが、而も新形式を編まむ、新思想を發揮せむとする精神は、炎々として燃えてゐた。然るに歌道の方面に立てる人々は、只管舊思想、舊形式の亡びひとを勉めて居たのみで、敢て新機軸を出さむとするが如き志望を起さなかつた。これ詩歌を解して現實的人生に縁なきものとする舊思想に囚はれてゐたからである。當に歌壇のみならず、俳句の方面も亦同様であつた。

老鼠堂永機は其角の系統を引くと稱し、春秋庵幹雄は白雄の衣鉢を傳ふと稱し、此の他其角堂機一(永機門)江南居松江(幹雄門)雪中庵雀志、花の本聽秋、夜雪庵金羅等の俳人は、各門戸を張つて居たのであるが、要するに舊時代の殘黨で、明治的生命の無い者である。彼れ等は、歌人と均しく、俳句を一の閑事業、道樂、遊藝と思考してゐたのであるから、時勢と共に發展しやうなど言ふ野心は、毫も起さず、たゞ宗匠様として、安樂平和の生活を送らむと欲して居た。實に舊時代の遺物ほど、衰れて亦た氣の毒のものは無い。

明治二十三年頃に至る間の短詩界は、暗黒時代と言ふも

不可ない位である。其の時代を作つたのは、彼れ等歌人俳人等が、詩を一の閑事業と見、遊藝、技巧の妙にのみ走らむと欲したからであるが、更に別方面より觀すれば、斟酌すべき點もある。彼れ等は時勢以外に悠長なる生活を送りつゝ、あつたが、維新の改革と共に、生活状態は急變する、歐化主義は大洪水の如き勢を以つて社會全般に流れ來り、苟くも舊時代に屬する者は、悉く破壊せむとしたのであるから、彼れ等は斯道の改良刷新に考慮するよりも、先づ己が從來の領域を失はざらむとにのみ苦心したのである。乃ち其の態度は、積極的たるだけの餘裕なきため、只それ消極的となつた。これが不振の一原因を成して居る。

時勢は一變して國粹保存主義の時代となつた。此の時に當つて和歌、俳句等固有の詩形が、回顧されたのは、自然の勢であるが、既に新空氣を呼吸した社會は、逆も舊來の形式を以つて満足するが出來ぬ。そこで先づ其の刷新改良の要務が生じ、茲に短詩界は、漸く活動して、明治の新時勢と態度を一にするに至つたのである。

### 第二章 歌壇の進歩

國粹保存的思想の勃興するまで、歌壇を支配したものは、徳川時代の遺物たる舊派であつた。「國光」「明治會叢誌」など

は其の機關であつて、孰れも時勢以外に立つて、花鳥風月を傳習的に眺めて居たのである。

國粹主義の隆興すると共に、國學の研究が始まつた。實に二十年以後同五六十年頃に至る間は、一たび棄てられた國文學が、隆に研究された時代である。落合直文、小中村義象、萩野由之等は「日本文學全書」を編纂する、佐々木信綱は「日本歌學全書」を刊行する、此の他「日本文庫」「溫知叢書」「諸曲通解」「大和田建樹」「帝國文庫」などの古文學ものが再興されたのは皆な此の時代である。井上文相は存りに國文學を獎勵する、大槻文彦の「言の海」(二十二年)は出る、三上參次高津鐵三郎の「日本文學史」が出版される、關根正直の「小説史綱」が出る、早稻田の文科にては盛に固有の戯曲小説を研究させる、國學院が盛になる。實に當時の國文學なるものは大旱の後に、天の甘露を受けた草木の如く、生々活々の氣を以つて生長したのである。

氣運は國文學の復興を呼び起したと同時に、歌壇も亦大に活動し初めた、されど一たび泰西の文物に接した者は、如何に固有の文學たりとて、舊式の和歌の典型に満足するとは出來なかつた。たとひ國粹保存の思想を懐くにもせよ、其の一部には既に業に新來の思想が植え付けられて居るから、其の感想を現はすには、逆も舊來の形式では満足出來ぬ。萩野由

之の「和歌改良論」、森田思軒の「和歌論」「詩歌文章の神韻」「和歌と漢詩との比較評論」などの評論は、皆な此の氣運に乗じて、和歌の革新を主張したものである。此の他森三溪、池袋清風なども、同様の意見を發表して居る。

然るに此の氣運に乗じて、創作上に新紀元を開かむと試み且つ一團體を組織して、大に歌壇を風靡した者は、落合直文である。彼れは淺香社なるものを組織して、當時歌壇に清新の空氣を起さむとする青年歌人を集めた。與謝野鐵幹、金子薫園、尾上柴丹、服部躬治、大町桂月、鹽井雨江、金千元臣久保猪之吉、國分操子等は皆な此の社中に加はつた歌人である。實に明治の歌壇は、此れ等新進の青年歌人に由りて活動し初めたのである。なほ第十九世紀の初に當つて、歐洲の詩人が、擬古派に反對して、ロマンチック風潮を起した如く、刷新的思想感情を和歌の上に現はした。それは形式と内容との兩方面に、瞭然として看取することが出来る。

落合直文は新體詩人として「白菊の歌」「笛の音」「寄春雨戀」「騎馬旅行」「楠公の歌」「陸奥の吹雪」「四條暖曲」などの長篇を作つてゐる。また和文章家として流麗の筆を有つてゐた。次に其の編纂の事業も多い。殊に「言の泉」なる辭典を編纂したのは忘るべからざる功績である。彼れは天才肌の人と言はひよりも、寧ろ才人肌の人であつた。其の才氣に任せて、八

方に活動したから、國文學の隆運も彼れに負ふ所、實に多大であつたのである。兎に角明治時代に於いて、古典文學を再興せしむるに當つて、老朽學者の企て及ぶべからざる功績あるは此の文士である。殊に歌道の方面に於いて、幾多の新派歌人を養成したのは特に記憶せねばならぬ。彼れ自身の感想は舊派を脱して居らぬ。其の根柢の思想には敢て新時代を表現してゐるものは無いが、形式上に舊格を破り、且つ詩材を八方より取つたとは、舊派の見るとの出來ぬものである。舊派は形式上及び感想發表上に、窮屈千萬なる規則を設けてゐたのであるが、彼れは感想の湧くまゝ、何物をも歌題とした。「荻の家日課歌題」中に、左の如く論じてゐるのは、其の歌に對する考と後進誘導の方法とを明白に述べたものだ。

「初學の者に對しては、題を設けて、あらかじめ、その範圍を定むるも、また、必要ならむ。……余は、題を出せども、新しき題のみにて、古き題をいたさず。その新しき題も、たゞ、その大體の目的を、示すのみにて、その精しき方面のことをば、勝手氣儘にやらはしむなり。これまでの經驗によれば、そのかた、進歩のはやきのみならず、何れも、其の肺肝より、かんかへよこして、よむが故に、歌のつづから、活氣をよびて、優れたる調も

出てくるなり。」

此の如き方針によつた歌題の例を挙げやう。

羽子板抱きて少女ねぶれり

車の上に羽子飛ぶ

残れる雪に雉子の足あとあり

春たちて雪佛かたくづれせり

俎の上なる薺雪を帯ぶ

焼跡の柳の枝もえいてぬ

接ぎし桃はじめて花さく

梅散る乳母車に小兒ねぶれり

鬼瓦に燕とまれり

蟻櫻の花をひきてゆく

若鮎流にさからひて水の上に飛ぶ

丹脚躑のかけに白き蛇ねぶれり

橋落ちて小僧かへらず

壁にたてる琴の緒ちのづからされたり

地圖を手にして雁を聞く

鼠枕頭の薬瓶をたふす

此れ等は僅かに一例にしか過ぎぬ。彼れは其の後進に向つて新しき題を興ふると共に、自身も常に清新の詩題を捕へ、之れを新しく表現せむと試みた。左に彼れが作の二三を紹介しやう。

しやう。

緋緞の鏡をつけて大刀はきて見ばやとぞやもふ山櫻花

原町にめしひ二人が杖とめて秋のゆふべをなに語るらむ

わが歌をあはれとちもふ人ひとり見出て、後に死なむと

ぞ思ふ

やよ子ども東鑑にのせてある道はこのみち春の若草

海とほく月はのぼりて岩の上に君とわれの影はうつりぬ

小瓶をば机の上にのせたれどまだく長し白藤の花

夢に見し女神の跡を慕ひ来てけさ我見たり白白合の花

牡蠣殻をのせたる蟹が屋根の上に鶴鶴なきて日は暮れむとす

碁をくづす音ばかりして旅やかたしづかに春の夜は更け

にけり

旅行くと麻の小袋とり見れば去年の儘なり筆墨硯

父はうせて子の代となりし春よりは小さくさけり牡丹の花

此の他面白き作も多く、詩想の優れたる者も多いが、今は際立ちて舊派に對立するものを選んで見たのである。

落合萩の家門下より出て、更に清新の和歌を作り、嶮

然頭角を露はしたのは、與謝野鐵幹である。

日清戦争時代に於ける鐵幹の歌は、男性的豪壯の氣象を發

のが和歌の方面である。

當時は實に戀愛熱の旺盛であつた時代である。所謂星董時

代で、舊思想派の戀愛でなく、極めて西洋式、ハイカラ式の

戀愛觀が、詩壇の中心點となつてゐた。青年は胸中に燃えて

ゐる愛情を忌憚なく發表し、愛情、戀慕の外に、人生は無し

と言ふ程の意氣込であつたのだ。丁度水の出鼻の若い同志

が、只情熱のまゝに亂痴氣騒ぎをやるといふ風で、其の戀愛

を表象するためには、星、董、百合などの語が、屢ば繰り返

へされた。實に三十四年前後は、戀愛中心の詩歌が、全盛を

極めた時代で、與謝野晶子の『みだれ髪』『毒草』『戀衣』等は

其の代表的和歌集である。

晶子は明治歌壇に於ける一天才である。和歌、殊に戀愛中

心の和歌を、詩として活かした者は此の女性である。元より

其の詩想は戀愛を中心として人生を觀じたものであるから、

一方面に偏してはゐるが、其の方面を深刻に且つ熱情的に發

表した點、別言すれば積極的に其の愛情を吐露した點は、從

來の消極的、内訌的戀歌に對して異彩を放つものである。鐵

幹自身も、晶子といふ妻を娶ると共に、街氣的男性の分子は

漸く減退して、戀愛本位の人となつた。吾人は左に鐵幹及び

晶子の和歌二三を例として掲げて置かう。但し此の他に傑作

のあるは言ふ迄もないとである。

揮せむとするに在つた。彼れは舊派の和歌が、如何にも女性的で、優柔であるのに満足するものが出來ず、また當時の戰爭的空氣を呼吸して、勇壯の氣、破壊的精神、悲憤慷慨的思想を抱いてゐた。

韓にして争てか死なむ我れ死なば男の歌ぞ復すたれむ

とは實に當時の彼れが大決心であつた。彼れは其の意氣を示

さむが爲に、勉めて剛壯の文字、例へば太刀とか、虎とか、

鷲とかいふ様の語を使用して、調子も詩想も共に雄大ならむ

とを工夫した。例へば

いてまのれ向はと向へ逆刺きてわが佩く太刀の尻鞘にせ

む

徒に何をか言はむ事はたゞ此太刀にあり只此太刀に

などは其の好例である。かく勇壯剛毅ならむとを勉めた爲に、

聊か壯士芝居じみ、誇張に過ぎた嫌もあつたが、從來の形式

を破壊して、自由なるものを作り、且つ詩想の上に、男性的

奮闘的空氣を呼び入れた功は没すべからざる點である。

彼れの作は『東西南北』『天地玄黄』等に集められた。彼れは

復た卅二年に東京新詩社を興して、雑誌『明星』を發刊した。

此の頃彼れの歌風は一變し、且つ彼れの妻晶子が共に活動す

るに至つて、青年歌人の多くは皆な此の社中に加はつた。所

謂明星派なるものは之れて、其の特色の最も好く表れてゐる

乞兒等が着すてし野邊の朽ちむしる朽ち目よりさへ咲く  
すみれかな  
いたづらに我は死なじと誰もいへど名もなき墓の多くこ  
そあれ

野に生ふる草にも物を言はせばや涙もあらん歌もあらむ  
我男の子意氣の子名の子詩の子戀の子もだまの子  
そや理想こや運命の別れ途に白き童をあらはれと泣く身  
森の秋に沈の木朽ちて香を見たりあゝたゞ人は聞にたふ  
る、

詩集手に豆の葉ならす人二人紀伊の霞は和泉よりこそ  
わかさ子の王となつて國一つひらく夢見ぬ黄河の南  
創を負いて擔架の上に子は笑みぬあゝわさはいや人をこ  
ろす道(以上鐵幹)

青原の野風の中に深山より來し香まじりぬ白百合の花  
赤城山百合白かりしよもと野の夜明を思ふ杜鵑かな  
いつの日か若さたよわさふさはしき君とつみける白百合  
の花

鎌倉やみ佛なれど大佛は美男にまはす夏木立かな  
廻廊を西へ列びぬ騎者たちの三十人は赤丹の頬して(以  
上品子)

明星派の外に、萩の家門下より出て、一派を開いた人は、

思なる而して、主角のない改良を爲さむとするに對して、明星  
派は非凡なる、異常なる、極端なる、情熱的なる革命を起さ  
んと欲したのである。前者は温和黨で、後者は急進黨であ  
る。信綱が竹柏園を開いたのは明治二十二年頃で、當時の國  
粹保存的思想の勃興したに乗じて、著作編纂種々の方面より  
其の勢力を擴張した。落合直文が急性なる才子であるとすれ  
ば佐々木信綱は温和なる才物である。彼れの作で、新空氣を  
現はしたものの二三を掲げて見やう。

星一つみ空に高くきらめきて空しき谷に木枯の吹く  
幾ばくの罪も涙もあやしくもはふむられたる海の底かな  
藥賣る家の門を叩く子が髪ふきみだす夜嵐かな  
手のひらに煙草はたきて老人が道を教ふる菜の花の道  
黙しつゝ一人飲むあり笑ふあり燈火あかし居酒屋の店  
此磯の此岩の上に誰か亦今日の我がこと泣く人やあらむ  
川沿の土あたゝかに桑肥えて屋根新しき葉ぶきの家  
竹柏園の歌は、奇警を衒はず、用語もなるべく雅語を採り、  
詩想も穩健を主とするが故に、上流社會や、或は一般の人士  
に入り易い。げに其の一派の數を比較したならば、明星派は  
遠く及ばぬであらう。

明星派と竹柏園派とが相對してゐる傍に、更に新天地を開  
かむと試みたのは正岡子規である。彼れは俳諧の趣味を和歌

蕪園、柴舟、躬治などである。諸氏には多くの作があれど、  
茲には其れ等を一々紹介するの餘地がない。讀者諸君は此れ  
等の人々は新派を代表する人と思つて研究せられむことを希望  
する。

新派歌壇に於ける明星派は、一時大勢力を占めた、其の戀  
愛中心主義も、決して偶然に起つたものでない。從來の男女  
兩性間に於ける舊思想、舊道德に反抗して、情熱の満足を求  
めんとしたものだ。即ち戀愛の満足を以つて人生を解釋せむ  
と欲したもので、幼稚と言へば其れ迄であるが、而も性慾  
愛に關する舊思想に反對した點は稱すべきである。然れども  
今日に於ける状態は、甚だ振はないのは遺憾である。恐らく  
其の戀愛觀なるものは、確固たる基礎なく、只一時の性慾に  
驅られたものに外ならなかつた故に、一轉化して異彩を放つ  
とが出来なかつたのではあるまいか。殊に日露戰役と言ふ一  
大刺戟は、人心を現實に向けしめたが故に、戀愛本位の世界  
觀は、漸く衰微したのであらう。

明星派に相對して、新派歌壇の一勢力たりしは、佐々木信  
綱を中心とせる竹柏園である。此の兩派の對照は、實に趣味  
あるものだ。竹柏園派が漸進的、折衷的(新舊思想の)種和  
的、貴族的、通俗的であるとすれば、明星派は急進的、高襟  
的、激情的、書生的、朦朧的である。竹柏園派は平凡なる姑

の上に發揮せむと試みた。竹の里人とは彼れの別號であつて  
卅一年頃の「日本」には其の創作が掲げられてある。

立並ぶ様も概も若葉して日の照る朝を四十雀鳴く  
敦盛の墓帯へは花もなし春風春雨播州に入る  
武藏野の冬枯芒婆々に化けず鳥に化けて人に賣られたり  
縁先に玉巻く芭蕉玉解けて五尺の縁手水鉢を掩ふ  
とばり垂れて君未だ醒めず紅の牡丹の花に朝日さすなり  
此れ等は子規が俳諧の趣を加味した例であらう。殊に彼れは  
調の冗漫弛廢を矯正せむと工夫したのである。

此れ等の外に、歌壇に於いては、前記せる舊派をはじめ、  
大和田建樹、井上通泰などが、各門戸を張つてゐる。去れど  
明治時代の歌壇は、明星派及び竹柏園の兩大關を以つて組織  
せらるゝとは、誰人も首肯せねばならぬ所であらう。然るに  
此の兩系統共に、日露戰役後は、勢力頓に振はず、「明星」の  
如きは四十一年遂に廢刊するに至つた。今後和歌の方面に於  
いて一新生面を開く者は那邊に起るであらうか。なほ茲に注  
意すべきは、新體詩の方面が、星董時代を去つて、表象(或  
は象徴)時代に轉じたるも拘らず、短歌の方面は、其處に轉  
じなかつたのである。固より此の方面にも同様の徵あるを認  
め得ぬでもないが、特に象徴主義と稱すべき程の作は試られ  
て居らぬ。思ふに將來の道は此の方向ではあるまいか。



### 第三章 俳壇の刷新

俳壇の刷新は、正岡子規と尾崎紅葉との二人の功に歸せねばならぬ。而も共に明治十八年頃より此の方面に着手したのである。兩者共に國粹保存的思想の餘波に浴して古文學を研究し、そこに改革の好例を求め得たのである。また一方面より觀察すれば、俳句なるものは、泰西諸國に例の無い文學であるから、其の改良を圖らむとするには、自國內に模範を探る外に途はない。而して其の模範とすべきものは、徳川末世のものではないとは明白である。否、其れ等遺物を改良せむとするのである。然らば更に古く溯りて、談林或は蕉風に到らねばならぬは、自然の勢であらう。

子規が俳句に志したのは、蕉村の句集を讀んでからだ。芭蕉以後に於いて、俳句壇に新生面を開いた者は、蕉村であつて、子規は彼れに私淑したのである。彼れの著には『俳諧大要』『癡祭書屋俳話』『子規隨筆』『續子規隨筆』『芭蕉雜談』等がある。彼れ一たび蕉村を紹介し、且つ宗匠的思想以外に立つて芭蕉を論評するや、革進的氣運に養成された一々は、多く其の下に集つた。客將としては、内藤鳴雪あり、後進としては、何東碧梧桐、高濱虛子、夏目漱石、阪本四方太、大谷鏡石、佐藤紅緑の諸氏、皆な新俳壇を起さむが爲に苦心した。二十

七年には、其の機關雜誌「小日本」が發刊されたが、後幾許もなく「日本」新聞に合併するに至つた。是に於いてか彼れ等革進黨は日本派なる名稱を得たのである。

日本派の諸氏が作には、各特長を有してゐるが、其の扮本が蕉村に在つて、而も芭蕉の自然觀、靜寂見を加味せむと欲するのと、形式上に五七五の格を破り、且つ、漢語も漢熟字も之れを採用し、或は十九、二十一の句を作り、或は句切れの上にも新工夫を凝らす點に在る。固より其の思想には、明治時代の特色あるは、言ふ迄も無く明白のよだ。左に二三の例を擧げやう。

- 夏野盡きて道山に入る人力車 子規
- 水仙の苔に星の露をはらむ 同
- 口紅や四十の顔も松の内 同
- 馬車の上に垂る、ホテルの櫻かな 同
- 雪残る項一つ國境 同
- 春雨や傘高低に渡し舟 同
- 花一山紫衣の僧あり若衆あり 鳴雪
- 律院や山茶花咲いて人も無し 同
- 菜の花の瞳一里や嵯峨の寺 同
- 切れ風や落ちて久しき草の露 同
- 草の露墜土門を出づる高さ下駄 碧梧桐

會心の宴滿園の牡丹かな

同

寺に寄る村の會議や五月雨

同

葱の坊主芥子の坊主と他宗かな

虚子

種蒔や閑却したる畦の鎌

同

蚊帳の中に内心夜叉の笑ひ聲

同

澁さうな柿賣る店を見て過ぎぬ

同

日本派は、文學者の眞面目なる態度を以つて活動したが爲に其の勢力は諸方に及び、松山に『ほどとさす』なる俳誌が發刊され、それが明治三十一年、東京にて發刊せられ、虚子が主として經營するに至つてから、一派の勢力は牢として抜くべからざるに至つた。而して之れと同時に其の創作も靜肅の態度となつた。また同派の一事業としては、最近文壇に現れた寫生文がある。こは主觀を混入せず、客觀の事物を描寫、むしろ直寫せむとするに在る。何故なれば客觀其の物が既に諸種の趣を備へてゐるから、殊更に主觀を以つて説明せずとも宜しいと言ふとだ。其の寫生文の更に一變化したものが、所謂余裕派の小説である。

日本派が新派の俳壇を開いたと同時に、同じく新様式を始めたのは、尾崎紅葉である。彼れまた國粹保存的思想に刺戟されて、俳句の改良を思ひ立つたのであるが、其の模範とする所は、談林であつた。蓋し彼れは其の大目的たる西鶴の研

究から、此の方面に進んだのであるから、先づ俳句の古典例として梅翁に接し、之れに清新の趣あるを發見したのであらう。

紅葉は、硯友社一派と共に、紫吟社なる俳句の一團隊を組織した。小波、水蔭、思案、眉山等皆な談林風又は蘆粟風集の句を吐き、其の小説壇に於ける余勢を以つて、舊派の俳壇に迫つたのである。舊派は之れを指して書生俳諧といふ冷笑を下したが、而も其の強烈なる勢力に避易し、日一日と其の領土を侵略された。

然るに紅葉の俳句は、其の凝り性あるが爲に、漸次に特殊の趣味を帯ぶるに至つたから、同人間には愛玩されても、一般人士の嗜好には適さなくなつた。彼れは其の始めは、一の余技として俳句を始め、中頃は眞に文學者の態度を取つて其の革新を謀らむと欲したのであるが、再び技巧・妙を街はむとするやうに成つた。此の故に紫吟社は、日本派の如く勢力を擴張する事が出来なかつた。而して遂には角田竹冷を中心とせる秋聲會と合併するに至つた。

秋聲會は角田竹冷、戸川殘花等が、明治二十八年に組織した俳句の團體で、之れに紫吟社一派と雪人派とが加はり、後には、帝國大學派とも稱すべき筑波會員（大野酒竹、笹川臨風、佐々醒雪等）も加盟するに至つた。故に今日の秋聲會な

るものは、諸派の一大聯合會のやうである。而して其の内、特に思彩を放つ者は、硯友社員たる巖谷小波である。彼れの輕妙洒脱なる俳句は、紅葉よりも一頭地を抜いてゐる。秋聲會員の本系に至りては、舊派にて屬せず、さりとて新派にも左袒せず、恰も歌題に於ける竹柏園一派の如く、折衷主義を守つて居る。一言に評すれば、常識的、明治式月並的であるから、特に稱すべき程の異彩を放つて居らぬ。

左に此れ等諸家の作を擧げて置かう。  
 蛙根を呑んで草むらに蛇の衣を裂く  
 初虹や岳陽樓に上る人  
 秋風の杖をさぐる酒錢かな  
 藝ありて翰卒召されぬ月の陣  
 遊子一夜砧に韻をちぐりけり  
 大和路や雲雀落込む塔の蔭  
 茶の花の垣根をのぞく雀かな  
 三月月に沈むや空の水淺黄  
 明けかゝる蓮に人あり鶺鴒の中  
 竹の落葉風もあらなく婆娑と散る  
 夏の月槐の上を徘徊す  
 動員令氷る扇を叩きけり  
 明月や健好が圃の白牡丹  
 白河やあけて夜汽車の家根の霜  
 浪涼し松一様に風の磯  
 曉や女松に消ゆる春の雪  
 春の月秣ふ軍馬照らしけり

紅葉 同 同 小波 同 同 知十 同 同 松宇 同 同 無黄 同 同 愚佛 同 同

櫻田やち城の崖に残る雪  
 雪の村十町ゆけばとなりかな  
 大野酒竹は蕪村風の俳句に長じ、傍ら俳史の研究に功がある。此の他、俳句を讀む人は、實に多数である。否、文壇に名を連ねてゐる人で、俳句の二つや三つ讀まぬ人はない位であるが、其れを一々紹介するとは出来ぬ。否、本編には、去様の余白がないから、總て省略するにした。

和歌も俳句も決して遊藝ではないが、徳川時代の下劣なる宗匠等が、何時の間にか之れを演樂藝の一種とした、實に不埒千萬と言はねばならぬが、而も其の爲めに、和歌、俳句の趣味が、一般社會に普及されたのは喜ぶべきである。かゝる詩的形式は、外國文學に例を見ぬ所であると同時に、之れを益す發達せしむる必要は、文教の上から見ても承認するに出来る。然るに明治二十年頃に至るまでは、有識者は徒らに西洋崇拜熱にかぶれ、短詩は頑迷なる守舊黨の手に左右せられつゝあつた。此の時に當つて、正岡子規、尾崎紅葉、落合直文等が奮起して、支配權を新時代の人物の掌中に歸したのは、大に痛快である。

今日の短詩界は、二十七年前後、或は三十四五年前に於ける程の盛況を呈して居らぬ。當時其の情緒の發現に苦慮した人々も、今は靜穩なる態度を取つてゐる。こは何故であらうか、未だ短詩界は、余地なき迄に開發されたのではあるまい。諸氏恐らく今や新方面に新旗幟を樹てむとする計畫中にあるのであらうと信ずる。

# 第六編 演劇 界

## 第一章 緒論

日本の演劇が如何にして、發達し來つたかは、こゝに論ずべき限りではない。併し、明治時代に流れ入つた演劇の系統は、大略述べて置く必要がある。坪内博士の言によると、維新前に發達して、維新後に流れ入つた演劇は、(一)武家劇としての能(二)偶人劇としての淨瑠璃(三)平民劇としての歌舞伎の三種類であるが、此の中立として明治時代の演劇に影響したものは淨瑠璃と、歌舞伎との二つで、能は殆んど獨立してゐる。

(一)能は初め神社佛寺の御樂として、祭式法會の餘興に演奏せられ、多少の宗教的調子を帯んだものであつたが、足利時代に武家式樂となり、武家と關係の深いものとなつてから、次第に美化せられ、閑雅化せられて、支那劇乃至希臘劇に似通つた形式を帯び來つた。併しその精神は一種の佛教的因果律に聯結せられてゐたので、精靈だの、幽霊だの、現實界を離れた、空想界乃至理想界の主題が多く、普通の人情を謳つた現實的のものが少なかつた。桃山時代を経て徳川時代に入

つた能は、その末系に於いて甚だしく發展し、今は殆んど一歩一寸も進めるとの出來ぬ程完全な境涯に入つた。今現に行はるゝものは二百餘番あるが、何れも簡樸な、創始的なもので、主なる人物は二人に止まり、筋と處とは一致し、場は二つに限られてゐる。その特色は嚴肅莊重で、所謂 Tragic な内容を持つてゐるから、涙のみでは浮ばれない人間の弱點を見破つて、能師は能の間々に狂言を挿んだ。

狂言は一種の滑稽劇で、その特色は輕快突梯なところに在る。筋も人物も白も、みな簡樸、質素で、茶番めいた創始的の香氣のないものであるが、而かも少しも卑しく感ぜられない。それは古代的なるが故に卑猥の感を殺ぐのでもあらうが、實は無邪氣な、小見／＼した主題が多いからであらう。能の悲劇的なのに反して、これは Comical な内容が多い。即ち武家劇としての能は、狂言と相俟つて、悲歡兩様の趣味を發揮したといふことが出来る。

(二)淨瑠璃はもと三絃樂に合はせて誦し、一面人形を操つて表情的發動をなさしめた爲めに作られた物語歌である。今てこそ淨瑠璃は單に語り物として存在するやうに思はれて居

るけれども、操人形と離れては、その發展の意義が解せられない。それは畢竟、一種の叙事詩で、劇詩の如く白のみを主眼とすることなく、景を叙し、情を叙し、事を叙してゐる。人物も事件も可成に複雑で、一曲は確かに一の獨立した、系統の立つた劇たる價値のあるものである。かの一中と云ひ、常盤津といひ、清元といひ、新内といふ類は、皆なこの分派であるけれども、今は義太夫節をのみ淨瑠璃と心得るやうに成つた。かくして唱と白とは科から別れたけれども、大阪の文樂座では、今も矢張り操人形を使つて、偶人劇たる眞價を存じてゐる。唱と白とは人間の聴覺に訴ふるのみで、少しも視覺を煩はさないから、操人形によつて視覺的美を尙へ、複合藝術たる劇の眞價を發揮しやうとしたものである。

(三)歌舞伎は、その創始の時に於ける意義と、發展の後に於ける意義と、殆んど全く別種の觀がある。お國、女かぶさ、若衆かぶさの者はさて措き、それが淨瑠璃の操りと交渉して發達した曉には、坪内博士の所謂『准樂劇』と成つた。それは勿論、平民的の演劇であるだけに、能のやうに莊重な分子は少く、従つて卑近通俗な趣味に適した人物を主人公に選び、筋も言葉も分りやすく、面白く、厭氣のさぬやうに送られたものが多し。若し能を理想的とすれば、歌舞伎は現實的とすべく、彼を貴族的とすれど、それは平民的となるべきであらう。

以上の三者、即ち、能と、淨瑠璃も、歌舞伎とが、三角同盟を作つた明治時代に流れ入り、明治時代の演劇といふものを作つたのである。吾々の中には明治の特色を演劇の中に認めぬやうに思つて居るものが多いけれども、それは自卑であり、自悔である。昔から今を見ても、後世から今を見ても、明治時代といふ『今』の香氣、『今』の響、『今』の色、『今』の味、『今』の形は、明らかに見出されるに相違ない。明治に入つてから企てられた改革、發見、創造、或はさして大きくはなからう、完くはあるまい、けれども一種の特色といふもの——明治の特質——が劇の上に現はされてゐるとは事實である。若し、天保時代の劇を見慣れた老人を拉し來つて、今日の劇を見せしめたならば、脚本、俳優、演技、劇場、背景、衣裳、すべての物が昔と甚だしく違つてゐることを發見するであらう。此の昔と違つた點こそは、即ち『明治ッ子』の作つたもの、若しくは『明治ッ子』を自身で、吾々が後代の人々によつて、萬代から區別せられる材料に成るのである。

## 第二章 維新の過渡期

明治維新は社會制度の一大變革期で、政治、實業、教育、宗教、文學、藝術、みな影響を被らぬものはない。けれども文學、藝術の如きものは、法律規則の改正によつて、政治や

る。

歌舞伎劇は、その本來が韻文的、即ち音楽的なりし爲め、白も科を首腦とするに至つた後にも、唱と踊とが附き纏つて、半樂劇式の響が強し、早い話が散文とも韻文とも區別のつかぬ様なものに成つた。始めは勿論荒唐無稽な、目先をかへて見物をチャームしやうと云ふ夢幻的のもので、歴史的主題が多かつたけれども、後には社會的主題も取り扱はれ、従つて理想的より寫實的に、韻文的より散文的に、舞踊的より科介的に、一步一步、實際的調子に近づいて來た。その弊として題材は次第に卑しくなり、遊女、盜賊、迷信、怨讐など、低い、卑しい側の人物や事件やを種に、筋の通らぬ、たい無闇に目先のみの變る、所謂 Seasonal color を帯ぶやうに成つたこれが俗に『生世話物』と呼ばれてゐるものだ。

この外に一種『所作事』と呼ばれてゐるのがある。所作事は、歌舞伎本來の、音楽的香氣の強い諸要素から成り立つてゐる中幕物で、西洋の樂劇に似通つたものであるが、それはみな違つて科白劇式の響が強し、むしろ Operetta と類似點を持つてゐる。

かく歌舞伎は、樂劇とも科白劇とも、區別のつかぬ橋的のものであるが、其處が西洋には類のない點で、日本の特色と云つても可い程である。

法律が激變する如くに變化し得るものではない。文藝の根柢は深く人心の内容に在つて、容易に變化することなく、少くとも十年廿年の歳月を費さねば、それに改良變革を加へることの出来ないものだ。故に文藝の革命は、政治運動に後れて始まり、政治運動に後れて遂げられることが多い。維新の元勳が維新の大業をなし終つた時にも、文藝は前代より遺されたまゝでゐた。維新のついで前後には演劇は、殆んど全く現狀維持の姿でゐた。

音楽の天才と、俳優の天才とが、數代かゝつて築き上げた元祿以後の演劇は、實に盛大なもので、俳優をして『河原者の大名』と囃される迄奢侈の生活を送らしめた結果、天保年中に水野越前守の打撃を受け、俳優は獨立した一種の卑しい階級の下に置かれて、諸人と交際するやうな出来なくなり、江戸中の劇場は悉くそれを淺草の猿若町に移轉せしめられた。當時注戸の大劇場は守田勘彌の守田座、市村羽左衛門の市村座、中村勘三郎の中村座で、これを『三芝居』若しくは『三座』と稱してゐた。

この三座に在つて人氣を博したの、京大阪に在つて評判の高かつた俳優は、中村歌右衛門、七代目團十郎、松本幸四郎、市川團藏、市川小團次、三代目尾上菊五郎、片岡仁左衛門、岩井半四郎、嵐璃寛、澤村勘升、市村羽左衛門など、何れ

も一代の人心を一身に牽き附けて、殆んど人情の支配者たるが如き観があつた。

徳川の遺物として明治時代に残された名優は、阪東彦三郎、九代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎、澤村田之助、助高屋高助、先代中村芝翫、岩井半四郎、中村仲藏、中村宗十郎、市川左團次、市川九藏(後に團藏)阪東秀調などで、彼等は皆徳川の空気を吸うて成長し、社会の變革と共に明治時代に入つた、歐化熱の熾んな時代の香気を嗅いだ人才である。けれども文藝の事は、前にも云つた通り、一朝一夕で改良の出来るのでない。維新當時は、政治制度の大變革に膽玉を潰され、燦爛として目を眩するが如き西洋の文明に酔はされて、國民は一般に政治狂となり、歐化病にかかり、また外の事を考へる餘裕がなかつた。此の有耶無耶時代は、殆んど十年餘もついでたが、革命の卵子は此の時既に産みつけられてゐた、これを維新の過渡期と看做して可。

### 第三章 新富座全盛時代

明治の初期に、前代より相續した演劇の遺産は「時代物」即ち「史劇」と、「世話物」則ち「社会劇」とあつた。史劇は歴史上の人物事件を主題としたもので、淨瑠璃とは姉妹の如き観を呈してゐた、社会劇は徳川末期の人物、事件を材料とし

一つに成つて、演劇に對する一般人民の觀念が一變し、俳優側もまた自己を以て社会を教訓する一員であるといふ觀念を抱いて來た。

此う云ふ所から時代物、即ち史劇の改良は芽を吹き始めた。改良の與力者は、當時の東京 知事松田道之丞を筆頭として、座主の守田勘彌、俳優市川團十郎、尾上菊五郎、市川左團次、作者の古河黙阿彌等、何れも熱心に劇の地位を高めると云ふことに腐心した。かくして今まで貴顕紳士の願みもつてないと思はれてゐた劇は、やんごとなき人々の目に入るやうになり、米國大統領グラントは新富座に招待せられ、主上すらも井上伯郎へ臨幸せられた節、團十郎、菊五郎等の技藝を覽そなはせられた。茲に於いて歌舞伎は空前の面目を施し、賤しむべきものよりは、寧ろ尊むべく、崇むべきものと信ぜらるゝに至つた。

明治十年までは殆んど有耶無耶の中に、その歴史的進程を履んだ演劇は、西南の役後、かくして勃興の機運に向ひ、遂に所謂新富座全盛時代、或は守田勘彌時代なるものを形成するに到つた。此の時に於ける恩人の記憶すべきものは、作者では古河黙阿彌、座主では守田勘彌の二人である。

九代目守田勘彌(二五〇七—二五五八)は中村伊四松の次男で、初めの名を治三郎と云ひ、後に勘彌と改めた。頗ぶる才

た劇曲であるが、主として下流社会の材料を求めた卑近通俗なものが多く、史劇に比べると甚だしく寫實的の響きの強いものであつた。故に世話物の江戸ッ子の俤が現はれ、水道の産湯を使つたものでなければ、その眞趣味を解する事が出来なかつた。

然るに江戸が東京と改められた時には、田舎者が勝つて、江戸ッ子が負けた時で、朝廷の要路に當るもの、商業の覇權を握るもの、總て維新の勝利者は、田舎武士若しくは田舎出の人々であつたから、概して江戸の町家を寫した世話物を喜ばず、一般に時代物を好む傾向があつた。

とは云へ、この時代に於ける俳優は、天保改革の後を受けて、甚だしく卑しめられ、殆んど人間並に取扱はれてゐなかつた。「河原者」、「河原乞食」の仇名は、實に彼等のことを言ひ現はす代名詞であつた。ところが、維新と同時に、あらゆる人民の階級が滅ぼされて、四民平等となり、俳優もまた「平民」の一員たるのが出來たにも拘はらず、尙ほ侮蔑と輕卑とは彼等の頭上に注がれ、彼等は心に少なからざる不平を持つてゐたので、何うかして頭を上げやう、名譽を恢復しやうと云ふ觀念が、常にその脳髓を支配してゐたらしい。その時、成り上りの者の元勳等が、歡樂を要求したと云ふ、俳優は美術家であつても卑しめるには當らないと云ふ西洋思想とが

智のはぢけた人、辛辣なる快腕を有してゐた。始め自己の持つてゐる守田座の格式が、中村、市川兩座の下にあるを慨き、何うかして格式を昇さうと、當時の名優者と結托して一生懸命に働いた結果、遂に守田座をして第一のものとならした。明治五年、猿蓑町から新富町に移轉し、八年に新富座と改稱した。劇壇の改革に一身を抛つて從事した結果、負債山の如く積んで、一生を窘苦の中に送つたけれども、彼によつて明治初代の劇壇が、地位と價値とを進められたとは非常である。新富座は今てこそ、餘り立派な劇場ではないが、あれが初めて洋風を模して造られた時には、東京市民に舌を捲かせたものだ。明治三十年八月、年五十二を以て死んだが、立派な後継者がゐて、踊にかけては天下無雙と謳はれてゐた。古河黙阿彌(二四七七—五五四)は初名を勝蔵、通稱を吉村新七、幼名を芳三郎と云つて、鶴屋南北の門人である。天保の年中二世河竹新七となり、後斯波晋輔と改名し、芳々或は其水と呼んでゐた。維新前には市川小團次と結合して、盛んに新作の脚本を上場せしめたが、何れも大當りて見物の喝采を博したものだ。彼の新作は少くとも三百以上ある。皆材徳川末期に於ける江戸の町家生活を料とした世話物で、時代物に比すれば甚だしく寫實的で、當時に在つては觸感の強い作品になつたに相違ない。今からかく見れば筋も人物も馬

鹿々々しく思はれたが、脚本としての長所は、舞臺面に對する注意力の旺盛なことで、所謂 Stage-effect の多い作品だ。『三人吉三巴白浪』、『柳巷着菊色縫』、『鼠小僧東君新形』、『籠釣瓶花街醉醒』など有名なものが少くない。默阿彌と云ふのは晩年の號で、明治二十六年一月、年七十八で歿した。

此の期に於ける改革運動は、劇本來の價值を高めやうとする目的ではなく、主として劇をよび劇に携はる人々の社會的地位を高めやうと試みたものである。『予は教導職である』と云ふことを、俳優が口癖のやうに見物に公言したのも此時代である。劇が藝術中の最も複雑なるものであるなどは、勿論當時の人には意識せられてゐなかつた。

### 第四章 史劇の改革

ところが、潮の如くに注入し來つた西洋思想は、わが國民の思想と好尚とを一變せしめて、從來の演劇では満足しなく成らしめた。こんな演劇で吾々は満足出來ぬ、何うしても劇曲と、演技とを改良して、劇の眞性質を發揮せしめねばならぬと論ずるものが多く、明治十九年に至つて演劇改良會といふ團體が形造られた。この會は上流の觀劇家を代表せるもので、主唱者は末松謙澄子、發起人の中には井上馨侯、穂積陳重、和田垣謙三、菊地大麓男、澁澤榮一男、福地源一郎等の

知名の士があり、賛成者には華族顯官數十名の名前がづらつらと並べてあつた。

此の會の起された前後に、知名の官邊の學者や、洋行歸りの新學者中に、演劇改良の意見を發表したものが少くなかつた。末松謙澄、藤田茂吉、外山正一等の諸氏は、文章や、演説で、劇の改良すべきことを論じ、依田學海氏は單に議論した許りではなく、見本として新作をすら公にした。けれど俳優その折合悪しく、その作は全く舞臺に上されなかつた。此際に於ける改良意見は(一)道德的標準と(二)藝術的標準との二つに分けることが出来るが、共に今から見れば幼稚なものに相違ない。

(一)道德的標準によれる改良意見は、何う云ふものかと云ふに、今の演劇は頗る調子の低いもので、その主題には猥褻なもの、殘忍なもの、野卑なもの、主義のないものが多い、こんな非道德的のものは、眞の劇と云ふことが出來ぬ、吾々は今少し Moral tone の高いものを主題とした劇を要求する。若し忠孝、節義といふやうな倫理的香氣の強いものを脚色して、これを高尚雅美な方式で演じたならば、劇はどんなに高められるであらうかと云ふので有つて、此の説は勿論、教訓的に傾き過ぎたもので、藝術の眞性質を知らぬものだと云へるが、少くとも卑猥猥雑なる當時の歌舞伎劇に向つて

は、項門の一針であつたに相違ない。

(二)藝術的標準によれる改良意見は、今の演劇に餘りに不自然で、脚色も、科も、白も凡て事實から距つてゐる。吾々は劇と事實とを少し接近せしめねばならぬ。それには從來の空想的、理想的分子を削除し去つて、現實的、寫生的なるを殖さねばならぬ。脚色から云へば、從來の荒唐無稽なものを避けて、事實有り得可き人生の出來事を材料とするがよ、扮装も科白も、すべて標準を實際社會に置くが可い。若しそれ非現實的なる影分子と、器樂分子とは、悉くこれを取り去るべきものである。吾々の希望は日本の演劇をして、西洋劇の如くならしめる點に在る。吾々の理想を云へば、一切有りの儘、事實の通りに演技せられ、觀取上、聽取上、眞しやかに思はれるやうにし、史劇を演ずるに當つては、古い人物が目の前で動いて、昔の言葉を操つてゐるやうにせねばならぬと云ふのである。これもまた非寫實主義たる當時の演劇に取つては、一種の價值ある苦言に相違なかつたけれども、吾國本來の劇がメロドラマだといふことを忘れた説で、全部これに賛成することは出來ない。

これより前、明治十六年に坪内博士はシニクスビーヤの『シーザー』を譯し、二十二年に森鷗外氏はカルデラの『ザラメヤ村長』とレンツシグの『エミリヤ、ガロチ』を譯したが、

何れも實行の遠いもので、唯だ理想的作品とのみ思はれてゐる。

けれども、彼や此の議論や批評の爲めに、演劇はいつしか、感化を受けて、少なからぬ改良が施された。新富座が瓦解して、新たに歌舞伎座が起され、市川團十郎と、福地櫻痴とが経緯をなして、一種の『活劇』と稱する藝風を馴致した。この二人は、此の期に於ける恩人の記憶すべきものであらう。

九代目市川團十郎(二四九三—二五四六)は七代目團十郎の五男で、幼名を長十郎と呼び、後に堀越秀と改名した。始め河原崎權之助の養子と成つて、その薫陶を受け、藤間花柳兩派の踊を習得して舞臺に現はれ、權十郎、三升など、名乗つてゐたが、不器用な役者として人の物笑に成つてゐた。明治二年養父の名跡を嗣いで河原崎權之助と名乗り、七年七月に宗家を嗣いで九代目團十郎となつたが、次第に名が現はれて梨園の隨一と呼ばるゝに至つた。かくして今まで河原乞食と賤しめられてゐた俳優の地位を進め、廿年四月にはその伎を天覽にさへ供した。廿二年一月俳優組合創立となり、歌舞伎座が起されてからは、常にそこに出演して東京市民百萬の耳目を聳動したものだ。團十郎の伎倆は實に、その歌舞伎座時代に於いて秀絶の域に達し、日本のアーシャイングとして世界

さて響き渡つたが、實地にアライイングを見た人は、否彼以上であるとする賞めた。

團十郎の梨園に於ける功勞は大したもので、今更喋々と述べ立てる必要はない。彼の特色は一種茫漠の裡に在る——無器用な、ぞんざいな、こせくしない處に、天資の才を發揮して、その白と科とを真に迫らしめ、観客をして團十郎を見ずして、舞臺の人を見せしめた、即ち彼は劇中の人物の性格を活躍せしめる怪腕を持つてゐたのである。團十郎は大きい」とは、團十郎を見たもの、一齊に評する言葉である。科語的に云へば、團十郎は表情に巧みて、劇人物と同化したと云ひ得可きである。そして最一つ、在來の藝風を一變して寫實的、自然的とならしめた事も、忘るべからざる一事實である。彼の技巧は、所謂『無技之技』(Athless art)で、古撲、簡素の間に、深い意味と、強い感じとを現はしたもので、或る意味に於いては象徴的、神秘的とも云ふとが出来る。動かさず、語らざる彼の清正と『桃山譚』に於いて見たる人は、恐らく此の言を否定する代りに、不語と、不動とが落涙を誘ふ力のあつたとを説くであらう。——しかも此の天才は、明治卅六年九月を以て、遂に病の爲めに僂れた、年六十六、人は宰相の死よりも之を惜むた。

團十郎と三角同盟を作つて、明治の劇壇に雄飛し、團十郎

歿し、天下の人をして哀悼措く能はざらしめた。

四代目市川左團次(二五〇五—二五六五)は三代目の弟子で、初名を小米と云つたが、三代目の養子となつて左團次と改名し、大阪から江戸に移住した。その後平生は明治座に於いて費され、所謂『荒事』の名人として高名噴々たるものであつた。即ち基盤忠信と云へば、直ぐ左團次を聯想する程、輕捷、敏活の動作をやつて、勝氣で、負けず嫌ひで、意氣と張の強い江戸ツ子を喜ばし、團十郎以外、菊五郎以外に、その技倆を認めしめたのは、悔るべからざる手腕である。明治三十六年團菊が死んで、三角同盟の礎搖ぎ、次いで左團次も身曲つて、天下の好劇家に『もう芝居見に行く氣がなくなつた』と言はしめた程であつた。

如上の三人は、無論前代の遺物で、その藝風、その思想の中には舊套的要素が少なからず交つてゐたが、しかも徳川期以外に、明治の特質を演劇の上に現はし得たことも確實である。歌舞伎劇が荒唐無稽なる空想式から、次第に自然合理なる寫實式に轉じて、活歴風の藝風を産み出したのは一に團十郎等の力である。しかも團十郎をして、よく其名を擅まにせしめたものは、蔭に控えてゐた福地櫻痴氏である。

福地源一郎(二五〇一—二五六六)は舊幕臣である、號を櫻痴と云ひ、明治初年から政論家として有名な人である、明治

と前後して身曲つて天下の劇通を淋しがらせたものは、尾上菊五郎と市川左團次の二人である。この二人の功績も決して没すべからざるものだ。

五代目尾上菊五郎(二五〇四—二五六三)は本名を寺島清と云ひ、音羽屋と稱してゐた、十二代目市村羽左衛門の次男で、嘉永四年に十三代目市村羽左衛門となり、後市村家橘と改名した。尾上家について五代目菊五郎となつたのが慶應四年で、維新變革の真最中であつた。手踊は巧いもので、妖怪をやらすと無類飛切で、凄慘奇怪の致々極め、見物をして震慄せしめた。菊五郎が團十郎と兄弟の如く並べ稱せられ、維新後の劇界に重をなしたとは誰しも人の知る所であるが、何故かくの如く重んぜられたかと云ふに、團十郎の濶達豪放なるに反し、これは機警輕捷にして、尻の輕い、精緻いところ、その天與の才能を發揮した、舊式の史劇も無論巧かつたが、新式の史劇も可成に巧く、よく團十郎に配して登場する力を持つてゐた。技巧の點から見れば、菊五郎は技巧を技巧として用ゐ、團十郎の如く無技巧の中に、その表情をなすことが出来なかつたけれども、熟練と精緻と云ふ點に於いては、或は團十郎を壓してゐたであらう。『手習鑑』の松王に扮した菊五郎は、尤もよく彼の特色を發揮して、帝都百萬の觀客をチャームしたものだ。この老優も明治三十六年、六十一歳を以

十年、西南の役には、日報社長として戰地に従事し、戰況の通信をしたので、威名一時天下に鳴り渡つた。一時は豪奢な生活を送つて、吉原では『池之端の御前』と云ふ仇名を取つてゐた。明治十九年に設立された演劇改良會には、發起人として名を列したのみならず、演劇改良には腐心した中の一人であつた。歌舞伎座の起るや、市川團十郎を助けて脚本を書き、それを舞臺に上さしめたが、その脚本は多くは舊時の脚本を改削したもので、俳優に制せらるゝ傾向があつた。その癖、彼の作は數回を除いては俗受がよくなく、たゞ『高時』及び『俠客春雨傘』に於いて、その才の一面を窺ふに足る許りである。併し、彼の作數十篇、ともに史劇をして一轉開して、所謂『夢幻劇』の境涯から、寫實的乃至自然的とならしめたことは事實で、文學的評價の有無、多少は論外として、劇壇に於ける貢獻は認めなければなるまい。かくの如くして彼と團十郎とは、兎も角も活歴の命脈を繋いでゐるが、日清戰後に至つて、活歴は勿論、新作は總て下火となつて、陳腐極まる夢幻劇が復活し、團十郎すらその主義たる活歴物を棄て、これは一世一代だなど、云つて、續々と夢幻劇を演ずるに至り、舊劇はまた全盛時代に入るの感があつた。その理由には様々あるだらうが、坪内博士は(一)當時勃興し始めた壯士劇抑壓と(二)舊劇に成功せし菊五郎と團十郎が競争したとの

二原因を計つてゐられる。こんな次第で、福地氏は殆んど歌舞伎座から捨てられ、その晩年は惨憺たるものであつた。明治三十年、氏は遂に不遇の中に憚れた、人は皆なその盛時を偲んで、天才の末路を憐じた。

これを要するに、此の期に於いては、寫實式、自然式の藝風が盛んになり、在來の空想的乃至神秘的の形式を喜ばなかつた傾向がある。精しく云へば、脚本は筋の通つた、合理的の、自然らしいもの、實際らしいものを選ぶこととなり、俳優は舊來の型を捨て、偏に寫實的表情を試み、見物に、あれは芝居だと思はしめないやうに努めた。——即ち、少くとも此期に於いて、劇は眞性質に近づき、その價值を高めたと云つても可い。予は『高時』一曲を此期に於いて得ることを喜ぶ。櫻痴が作つて、團十郎が演じたもの、その數必ずしも少くはなく、優秀なものには『俠客春雨傘』の如きものもあるけれど、これも所詮は舊劇の燒き直して、あらゆる型を一種の大きな家の中に收めて、統一したと云ふ丈であるが『高時』に至つては、舊劇以外に十歩も二十歩も踏み出して居る、新時代の新人間が見ても、『爾らよ』と頷かれる節が多少はある。世評は兎もあれ、予の觀る所を以てすると、『高時』と云ふ短劇の中には、新らしい意義が発見せられる。その感し處は、第一に寫實的の藝の強いつちに、よく神

### 第五章 劇壇の重鎮

この間に在つて劇壇の重鎮として、世の景仰を博してゐた人がある。それは坪内逍遙氏である、氏は劇壇の別働隊で、常に他處から光りを投げ放つ遊星のやうに、俳優と作家とに教を垂れてゐる。明治二十六年の末に、『早稻田文學』に書いた史劇論は、西洋の劇論を根據にして吾國の特性を斟酌し、『吾邦在來の歌舞伎劇は夢幻劇である、演劇改良會の如きは形式に止まつた拙らぬ團體で、それに信賴するとは出来ぬ、吾々は劇の改善を圖る爲めに、性格を本とした劇曲を作らねば成らぬ』と云つて、盛んに性格本位の劇を要求した。森鷗

外氏もまた同様の議論を吐き、當時、史劇論には火花が散つたものである。併しこれは單に議論のみでなく、事實上少なからざる感化を興へて、知らず識らずの間に劇界を誘導してゐたのである。

かくて坪内博士は、自己の議論を證明する爲め、乃至は見本を示す積りて、明治二十八年に『桐一葉』を書き、二十九年に『牧の方』を書き、三十年に『杏手鳥孤城落月』を書いた。第一の作は太閤記後に於ける片桐且元の苦忠を描き、第二の作は、北條時政の妻牧の方を女主人公として、頼朝歿後に於ける鎌倉幕府を寫し、第三の作は第一の作の續篇として出版せられた、何れも女性を描くことに勝れてゐるとの評判であつた。芳賀博士はこれ等の諸作を評して、『形式は略ぼ在來の劇によつたもので有つたが、その精神はシエークスピア劇の型に倣つたものであつた』と云つて居る。この三作共に、當時の梨園の狀態と扞格し、直ぐに舞臺には上らなかつたけれども、それが刺戟となつて史劇に筆を染めるものゝ多くなつたと、戯曲といふものゝ眞性質の了解されたこと、今一つ、劇界に對して一種醒覺の曉鐘であつたことは事實である。要するに、氏の學說、氏の議論、氏の脚本は、一步を社會より進めてゐるので、その儘に信ぜられ、行はれ、上場せられるには到らなかつたのである。

### 第六章 壯士劇の勃興

けれども『桐一葉』も、『牧の方』も、『杏手鳥孤城落月』も、次の期に入つてから、東京座其の他に於いて上場せられ、有識者の間には少なからず歡迎せられた。典雅な趣味と、高尚な調子とは、此の三作を貫通してゐる特色で、性格の現はれてゐるとが、自然的乃至は現實的の感起さしめる楔子である。——惣う一部の人々には思はれたが、一般の見物には何となく物寂しい、舞臺が賑やかでないといふ感起さした。こてくと白壁のやうに塗つた白粉でなければ、化粧と思はぬ世の中の人には、芝居らしい芝居でなければ喜ばれない、實際の人間生活を描いたものは、何だか面白くなく思はれるに相違ない。明治以後、一般に國民思想は進歩したとは云へ、尙ほ好尚は低く、趣味は淺く、少しく高い、新らしい者に成ると、それを鑑識し理解する力がなかつたからである。

以上説き來つた如く、俳優の修養は概して舊式的で、新知識に缺乏してゐるから、明治の社會相を寫すことが出来なかつた。舊俳優の所謂『世話物』は前代の世話物であつて、現代から觀れば一種の時代物である、チョン髷を結つたり、一本を挟いてゐたりしては、明治ッ子には逆も現社會のやうには思はれない。——即ち觸れない、活々とした感しが起らない。

深く、強く、見物を動かす爲めには、何うしても Touch するやうな、rough するやうな科白を用ひねばならぬ。この缺陷を充たし、この要求を満たす爲めに、所謂「壯士芝居」といふものが出来た。

壯士劇の起つたのは、明治二十二年であるが、これより前壯士劇發生の遠因といふものがある。坪内博士はこの種の劇の發生は、民権論勃興當時の政令だと云つて居る。蓋し、自由黨などの青年が、過激な政論を唱へた頃には、言論取締の法律が嚴重で、政府は極力迫害を加へたから、此の不自由を補ふ爲めに、或る者は落語家と爲り、或る者は講談師となつて、政府の攻撃を試みたり、政治の悪罵を企てたりした。かの壯士劇の鼻祖なる角藤定憲や、川上晋次郎やは、もともと客氣の壯士であつて、政治的目的を主とし、劇は單に手段たるに止まつてゐる。

始めて壯士劇の起つたのは、大阪である。大阪は我國の商業地で、金にかけては抜目のない處であるけれども、根が商業地だけに、趣味の程度も低く、鑑識の力量も少なく、殊には團十郎とか、菊五郎とか云ふ勢力のある俳優のなかつた爲めに、ひたすら新しいものを迎へる氣味があつたので、拙いながらも、細いながらも、壯士劇といふものが發達し、壯士以外に學生よりの異原素をも加へて、此處彼處に書生芝居

が續發し、遂に隠然、劇界に一勢力を強るに至つた。

かくて新俳優には角藤派、川上派など云ふ團體が出来たが、何れも政治的臭味の多いと粗末千萬な現代の寫實といふことを特色として、古臭い、微の生えたるやうな舊劇界に打つて出た。彼等とはもと／＼素人である、劇的素養は少しもない、田舎の青年の素人芝居に眼を註かしてゐる者の方が、遙かに劇の眞生命を解してゐた。彼等の武器は、(一)よく云へば我流、悪く云へば無茶苦茶な演説口調と、(二)生兵法、大疵の元と云つたやうな、うる覚えの柔術の型と(三)大阪、仁和加などのやうに、卑しい、俗氣紛々たる道化の摸倣とである。その外には何も知らぬ、踊や、音楽やは無論知らぬ、況して在來の脚本などは少しも知つてゐない、それが爲め、却つて新らしい、在來になかつた或物が現はれたのである。

けれども、その脚本は拙悪なもので、蕪雜、粗笨、到極文學的批判に堪へるやうな價値はなく、従つて白も、科も幼稚拙劣、生硬、粗雑で、美術的原則に適つてゐるやうなものもなかつた。ところが、彼等の選ぶ題目が、現代に觸れ、現人を寫し、現處を採つたものであつたので、少なからず俗衆の興味を惹き起して、遂に一種の新劇を形造るに到つたのである。當時の主題は、政黨事情とか、探險實話とか、裁判狀況とか、總て時代をさながらに現はしたものの、例へば「雪中

梅「とか」「花間鶯」とか云ふやうなもので、十分、俗人に對しては牽引力を持つて居た。併し多少とも、劇を見慣れて、趣味尙の高かつたものには「書生芝居は本統の事をするので面白いが、味も香も何もないもので。」と云ふ評判が高く、一時は殆んど殄滅の悲境に陥らうとしてゐたのである。

ところへ、恰度日露戦争が起つて、國民の感情が興奮し、殺氣武斷の氣風が全國に滿ち渡つた。て、如何な芝居好も、ずべら／＼した歌舞伎劇や、涙が種の義太夫劇で満足するものが出来ず、一種の強いてはさした、一見腕の鳴るやうなものが欲しくなつて來た。この機會を利用して、新派俳優は、盛んに戦争劇を試みた。——戦争劇とは云ふものゝ、殆んど劇曲としての價値はなく、たゞ鐵砲を擡いだり、大砲を曳いたり、軍服を着たり、サーベルを提げたりした人が出て來て、斬つたり、殺つたりする丈だが、筋はないながらも、人は生きた人であるし、處は現在ある處だし、見物は知らず／＼牽きつけられて、壯士劇といふものの基礎が確立し、遂に新派俳優は舊派俳優と對抗して立ち得るに到つた。つまり壯士劇の今日あるは、安城渡に僞れた白神喇叭卒や、平壤の城門を破つた原田重吉の如く、新俳優の技藝でもなく、新脚本の脚色でもない、所詮は偶然の結果と云つてよいのである。

然るに此の偶然の結果に、一種の喜ぶべき自然の結果を生

み出した。即ち、戦争で命拾ひをした新派劇は、命拾ひをしたのみでなく、その機會を利用して熟練と發展となし、戦争が濟んでも一種の新社會劇——在來の世話物と異つて、明治の社會を活寫した興味中心、乃至は家庭中心の新劇曲を演じ得る力を養つた。かくして歌舞伎劇の根據地たる東京、大阪の如き都會にすら、壯士劇はその族を樹つるに到つた。

### 第七章 新機運の發生

櫻庭薫村氏曰はく、「川上や高田は日清戦争にも禮を云はねばならぬ、兵隊さんが滿洲の雪を血染にしてゐる間に、新派俳優は旨い御馳走と、温かい着物と、美くしい座敷とを得た。併し、これが爲めに幾分か劇界が新らしくせられたのは喜ぶべきことで、新機運の物興は、この時に芽を萌したのである」と、然り、川上の洋行は實に日清戦争に胚胎したものである。

明治三十三年、川上はその妻貞奴と共に、世界大博覽會を利用して佛京巴里に行き、世界の都と云はるゝ處で日本劇を演じ、その翌年もまた渡歐して吾が邦固有の歌舞伎劇に類したものを演じた。その演劇は素より拙らぬもので、見て來た人の話によると、筋も人も處々減茶／＼で、兒島高德の前へ後醍醐天皇が出て來られて、高德が腹を斬つたり、安珍、清姫が、清玄、櫻姫と混合がつたをとしてゐた相だが、歐米人の



迷惑は兎も角、川上等はこれによつて非常なる修行をして来た。即ち彼等は此の旅興行を利用して、歐米に於ける劇場の構造や、道具立や、名優の白や科を見聞して發明するところが甚だ多かつたのである。

歸朝すると直ぐ、川上は『正劇』といふ名の下に、多少の新味ある齣案物と興行した。正劇と云ふ意義は不明で、英語の所謂 Regular drama と云ふ意味か、日本の准樂劇から音楽と踊と唱とを抜きにした科白劇の意味か、はた亦た單に正しいと云ふ意味か分らぬが、要するに一種の科白劇であつた。出し物はシエクスピヤーの『オセロ』と、『ハムレット』との齣案物で、切符を賣つたり、時間を短縮したり、劇場の風まで西洋のそれを模して、大に評判を取つた事があつた。

ところが、三十六年から三十七年に亘つて、舊俳優の方では三人の名優を失つた。即ち團十郎、菊五郎、左衛門次が死んで了つた。後にはこれと云ふ名人もなく、唯だ、今の芝翫、羽左衛門、高麗藏、梅幸などが五六人ゐて、團栗の背翫を以て居た許りであるから、人氣はすっかり新俳優の方へ取られて了つたやうな觀があつた。それに最一つ注意すべきことは、見物の變化した事である。明治も最早三十九年と經つて元年におきやあと云つて生れた子が、今では二人も三人も子供を持つてゐるといふ始末。明治に生れて、明治の教育を受

一、浪子、武雄など劇中の主人公乃至女主角の名は、兒童走卒にまで響き渡つてゐる。

新派が急ぐして成功してゐるので、舊派の方でも黙つては居られなくなり、時々新作小説を劇化して上場するやうになり、舊派の俳優でも「散髪物」はやれると云ふことを知らしめたが、併し見物の方で、新作は新派が適してゐると多寡を括るので、近頃はまた大分様子が變つて、新作は新派に任じて、舊派は重に舊劇式の物の上場するにしている。しかし此の新機運に乗じて、坪内博士の『牧の方』、『桐一葉』を始めとして、森鷗外氏の『玉簫雨浦島』や『辻説法』などが上場せらるゝに至つたのは喜ぶべき事である。

如上の結果として、若手の中には舊俳優の名は知らずとも、川上音次郎、高田實、藤澤淺次郎、河合武雄、喜多村綠郎、秋月桂太郎、小織桂一郎など、新派俳優の名を知らぬものは少なく、常に新派俳優の立て籠つてゐた本郷座では、盛んに美しく大道具を使つて、ハイカラな新作物を演ずるので、『本郷座式』といふ、一種の新形容語を得た程である。

### 第八章 新樂劇論

明治三十七年に日露戦争が起つて、國民は一時戦争熱に淫かされたが、二十七八年戦役の時のやうに、一にも二にも、

けたものには、『一谷凱歌小謡曲』だとか、『戀女房染分手續』だとか、『鎌倉三代記』乃至は『太閤記』といふやうな通俗なものすらも分らないのがゐる。その癖、此う云ふ連中は、シエクスピヤーが何うの、ノイプセンが何うの、ハウプトマンが何うのと云つて、その作は皆な讀まずとも、讀む方がないにしても、沙翁のものならラムの『沙翁物語』を覗いたり、イブセンのものなら、高安月郊氏の『社會劇』を讀むと云ふ風にして、一寸としたもの、梗概位は知つてゐるから、古い人、教育の餘りない人には分らない『オセロ』や『ハムレット』が、却つて面白く見られる。可成、新しい見物が多いと云ふので、どしどしと齣案物が興行せられ、沙翁の『ローマ王』、『エニス』の商人、シルレルの『ウキルヘルムタル』、クライストの『暴縁』、ユーゴーの『エルナニ』、『ドローライの』、『サツンオー』、ペー

コの『フランチェスカ』だとか東京は勿論、田舎の劇場にまで興行されるやうに成り、また新作小説をドラマタイズして上場することも流行つた。中村春雨氏の『無花果』や、菊池幽芳氏の『己が罪』や、『乳兄弟』や、田口柳汀氏の『女夫波』や、『伯爵夫人』を始めとして、大抵の作家の小説が書き直して上場せられ、大評判を取るとが多くなつた。徳富蘆花氏の『不如歸』と、故尾崎紅葉の『金色夜叉』の如きは、小説の劇化されたもの、中で、最も有名で、最も人氣のある作で、宮、貴

皆戦争と云ふやうなことはなく、自信力強き吾が國民は、勇敢なる軍人に信頼して毫も疑ふところなく、各自の職業をいそしんで殆んど平時の時く、來遊の外人をして、『日本人は大膽な國民である、未曾有の大戦争をやつてゐながら、一般國民は平氣で仕事をしてゐる。』と賛歎せしめた程である。

併し、これが爲めに吾邦は、單に東洋のみならず、世界の一等國となり、政治、經濟、文藝、はたまた世界的とならんとし、あらゆる方面に於いて進歩發展の緒を開いてゐる。これより先き、吾が國固有の能劇が復興し、同時に西洋音楽が輸入せられて、國民の一部には踊、唱など音楽的、乃至は韻文的の表情を喜ぶ傾向が出て來て、三十六年頃には盛んにワグネルが紹介せられ、多少はオペラ問題なども持ち上つてゐる。

常に文藝の先驅をして、率先者となり、醒覺者となる坪内博士は、以前から秘かに樂劇について研究をしてゐたが、日露戦争の起つた翌年、軍人は戰場に闘へばし、美術家は藝苑に闘へばし、共にひとしく國民の任務である、大國民は大文藝を持たねばならぬ、戦争の眞最中にも、樂劇を研究するの襟度を要すると云ふやうな心持で、三十八年の春『新樂劇論』の一部を發表し、その見本として『新曲浦島』と『新曲かぐや姫』とを出版した。ついで四十二年まで『金毛狐』、『鮮か

づき姫』、『俄仙人』、『夏狂亂』、『一休禪師』、『初雪』、『小  
 種物狂』など、長短合せて七曲の新作を公刊したが、その中  
 『鉢かづき姫』と『初雪』とは節附せられ、振附せられて公に上  
 場せられ、他もまた或は節附せられ、或は振附せられて、可  
 成の好成绩を収めてゐる。

坪内博士は、此の新樂劇に對して『振事劇』といふ名を與  
 へた。振事は昔からないではない。我邦の歌舞伎は、その始  
 めが一種の歌舞であつたから、それが發達して劇と成つた後  
 にも、その香、その響きは全く取れ去らず、樂劇式のものとな  
 り、或は『所作事』または『景事』など云ふ名の下に、振事を  
 主とした中幕物風の樂劇と成つた。それにも色々あつて、短  
 いものは一幕一場であるけれど、長いものは一幕數場に亘つ  
 てゐるのがある。併し、その筋は概して通らず、支離滅裂、  
 猥りに縫合し、妄りに補綴し、意義もなければ理想もないも  
 のが多い。戀愛を主題にしたものが多いけれども、筋は殆ん  
 どなきが如く、只だ、目と耳とに美しく感ぜしめやうと云  
 ふだけで、夢幻的、感語的である。

かゝる振事劇は能と違つて、俳優自らは舞つたり踊つたり  
 するを主として、歌ふことは全くなく、白すらも滅多に口し  
 ない。表情的舉動は、常に踊によつて現はされたけれども、別  
 に伶人がゐて、その人物の情懷を言ひ現はし、三枝若しくは

附、節附して、これを上場するやうに成るには、尙ほ何年か  
 の歲月を要せねばなるまい。第一、金もなければならぬ、時  
 も費さねばならぬ、貧乏な曲人や、貧乏な俳優では、どうも  
 巧くやることが出来ぬ、況して現今のやうに優人が不眞面目で  
 は駄目だ。手は熱心な、嚴肅な、眞摯な俳優の天才が、曲人  
 と共に生れんことを希望して已まぬものである。機運は既に  
 熟してゐる、手に唾して起つ秋は今である。

### 第九章 結 論

最後に予は現今の劇壇を瞥見するに、俳優、作家、評家、  
 曲人、大方は萎靡して振はぬけれども、遠い、彼方の、  
 何處かに、一道の新機運が動いてゐるやうに思はれる。雲行  
 は唯でなく、雨になるか、風になるか、雪に成るか、それは  
 今の處では分らぬ、天才ひとりよく之を知るのみ。

先づ俳優の側から見ると、團十郎の後継者として八百藏、  
 芝翫、高麗藏、猿之助等があるし、菊五郎の藝風を紹襲して  
 ゐる者には羽左衛門、梅幸等があるし、左團次の後継者とし  
 ては何處かに大きい處のある、また雨とも風とも分らぬ左團  
 次があるし、老優には團藏、松助、大阪には仁左衛門、雁次  
 郎あり。新派俳優には茫漠たる高田、機捷なる伊井あり、そ  
 の他藤澤、秋月、小織は拙いとしても、河合の女形は決して  
 侮るべからざるものである。又女優の側では三崎座は絶望と  
 しても、堀越姉妹、紫扇、松島あり、貞奴の女優養成所は今  
 の處絶望的としても、將來どんな名人を出すかも知れない。  
 それに喜劇派などもあつて、盛んに活動しやうとしてゐる。

その他の樂器を吟唱に合はすとに成つてゐる。これが日本器  
 劇の特色で、今尙ほ長唄振事と、常盤津振事とは、盛んに行  
 はれてゐるが、作意も、曲調も、大方はセンセンショナルで、  
 狹斜の臭味多く、高尚な趣味と、典雅な好尚とを缺いてゐる。  
 無論、現代の人間には不適當である、不明瞭である、一寸と  
 見た位では何の事だか分らぬ。

坪内博士は、此れを刷新して根本から築き代へ、作意  
 にも、曲調にも、新しい香と、現代の響とを利かせて、有  
 意味、有興味、有價値のものとしなければならぬと主張し、  
 遂に『新樂劇論』をつくり、『新曲浦島』以下の諸曲を公にし  
 たのである。——この先、日本のオペラが何うなつて行くか  
 は疑問である、無論オペラは、どこまでも音樂を中心にな  
 ければならぬ。その中心となるべき音樂が、現在のやうでは  
 誠に心細い、日本音樂が勝つてゆくか、西洋音樂が勝つてゆ  
 つかない。長唄には岸屋六左衛門、常盤津には岸澤仲助など  
 新試験を識みるものがないではないが、どうも新時代の音樂  
 として、立派に成立するまでには、まだ幾多の経験と、失敗  
 と、年月とを要するであらう。要するに今は音樂の天才を  
 要する時である、舞踊の天才を要する時である。見本作品  
 は別として、少くとも坪内氏の『新曲浦島』を、遺憾なく振

市村座に據つてゐる吉右衛門、菊五郎等も萬更有望でないとい  
 は云へぬ。  
 また作家の側から見ると、樂劇に滿身の熱誠を注いでゐる  
 坪内博士は別看板として、山崎紫紅氏、佐野天聲氏など云ふ顔  
 振があるし、拙いながらも櫻痴氏の門弟の榎本破笠氏は、歌舞  
 伎座によつて折々『歌舞伎物語』のやうな佳作を出す。精餘  
 の座附作者、竹柴、瀬川の聲は語るにも足らぬものである。  
 評家の側には、老練なる櫻庭篁村氏、博通なる伊原青之園氏、  
 新機なる小山内薫氏などがある、また名の知られぬ若手の中  
 にも、赤崎鈴氏のやうな見巧者がゐる。

曲人は皆振はぬ、眞に音樂を解してゐるものは殆んどある  
 まい、又西洋音樂は、あまりに劇と離れてゐて、全く無交渉  
 と云つても可い程である。  
 併し、前にも言つた通り、新機運は確かに動いてゐる。現  
 に柳澤伯の如きは四十一年に有樂座を建て、其處に新らし  
 い企圖を試み、又別に東京と大阪とに於いて、大劇場設立に  
 取り懸つてゐる。川上はマネーシヤアとして新派と糾合して  
 何事をか爲さうとし、一旦挫折した文藝協會も、機を見て再  
 び起つる期がないとも限られない。作家は勿論、俳優の中に  
 も、常に新らしいもの、珍らしいもの、現代の好尚に適する  
 もの、少くとも評家に悪く云はれぬ程の劇を演じて、新領土  
 を開拓し、新名聲を博し、新覇權を握り度いと心懸けてゐる  
 者もあるらしい。これを要するに現代は過渡期である。舊か  
 ら新に移らうとしてゐる時代である。一劃期はこれを天才の  
 手に持たねばならぬ。(前書き)

# 第七編 新聞及び雑誌

## 第一章 緒論

吾が日本は世界の中でも、古い文明史を有してゐる國である。その文明を盛るメトリックとも云ふべき出版事業は、徳川時代に於いて既にその發達を遂げた。所謂「官版」の如きは、製本、印刷、紙質の精美なる點に於いて、世界に誇るに足るものである。又た水戸、金澤、徳島、安濃津などの「藩版」は、官版以外に非常な聲價があつたが、中でも水戸藩の出版事業は後世に傳ふるに足る價値がある。一意専心文運の開拓を計り、自から儒生を監督して『大日本史』(二四三卷)を始め國書漢書を編修發刊した徳川光圀の功績は、吾が國出版界の第一で、正に金鷄動章に値してゐる。

京都の寺院もまた出版史に大書さるべき功績を挙げた。かの「黄檗版」若しくは「叡山版」と稱するものは、皆々是等寺院の刊行で、黄檗版の「一切藏經」(六九三〇卷)は世界に於ける大出版である。これと同時に、民間に於ても文學的出版物可成に多く、繪入小説本の如きは印刷、紙質、製本共に美しくして美術的であつた。

今一つ世界に誇るべきことは、我國が四百年前に於いて、所謂「活字版」を有してゐた事だ。徳川家康が遺書刊行の爲めに、

に、足利學校に與へた木版活字はその數三十萬であつたが、慶長十九年に京都の金地院に下附せられた銅字鑄版、その數實に二十萬であつた。爾後、元和、元祿、享保等に亘つて「四書集詩」周易本義「六諭衍義」東醫寶鑑」等を出版したが、それは何れも木字若しくは銅字の活版を以て印刷したものである。ところが幕末に至りて、長崎の本木昌藏といふ人が、歐洲式の活版術を和蘭人から習ひ、明治二年長崎に活版傳習所を設けて、自ら鉛版活字を製造し、それを出版界に供給したので、世人はその功用の偉大なるに驚き、政府は印刷局を作る、築地には活版製造所が出来ると云ふ風に、活字使用が盛んに成つて、もとより盛んであつて吾邦の出版事業は、次第に盛大に向ひ、遂に今日の隆運を致した、これが維新前に於ける出版界の大勢である。

次いで予は、明治時代に於ける出版物の首位である新聞紙が、徳川時代に於いては、何んぞ景況であつたかを略述せねばならぬ。無論徳川時代には完全な新聞紙といふものはなかつた、けれども種々の手段によつて、不完全ながらも、政府の法令などを比較的迅速に知り得るとが出来た。その方法は(一)殿中御沙汰書(二)封廻狀(三)秘密公文書(四)外國事情(五)讀賣の五種で、それ等が集まつて遲延ながらも時世の出來事を知らしめたのである。

(一)殿中御沙汰書と云ふのは、御目附方から幕府内外の諸局に頒布した諸令規則の謄寫で、頼みによつては大小名や、諸寺院、諸官商にも公然の秘密で頒布せられた。此書の記載事項は、幕府の發令、布告、諸大名への告示、官吏の任免黜陟を始めとして拜謁、參詣等の典禮、その他一切の行事など、一寸と今の官報に似たものである。

(二)封廻狀とは、政事上の犯罪の處分を、封書を以て要務の重役並びに關係のある長官等へ報告するもので、御目附方から發送せられた。當時、政事上の犯罪に對する責罰處分は一切秘密で、その事故は公示するとなかなかつたが、前記の人々へは封廻狀で移牒せられたのである。

(三)秘密公文書と云ふのは、建議書、建白書、評議書、布達案、諸々の報告書、並びに外國との復往文書類で、事件の重大なもの、これを秘密に附して決して洩らさなかつたけれども、往々にして閣老參政の公用人、御右筆などから、諸大名達へ洩れたことがあつた。

(四)外國事情もまた秘密の中の一つであつたが、幕府は常にこれを和蘭の商船が齎らして來る新聞紙によつて知ることが出來た。併しそれは安政元年に起て、其後外交が頻繁に成つてからは、蕃書取調所といふものを設けて、其處で外字新聞や、外字雜誌の抄譯をなさしめ、差支のない事項だけは出版したともある。

以上の四項は、専ら政府部内、若しくは上流社會の一部に行はれたもので、世上一般には殆んど何等の交渉もなかつた。併し何時までも豈首は愚とせられるものでない。人一倍

Curiosity と Inquisition とに富める江戸の市民は、十日前の出來事を今日聞いては満足が出来ない、世間の新しい出來事珍らしい出來事を、早く知り度いと云ふ念慮が積り積りして讀賣といふものが行はれた、これが平民間に於ける唯一の新聞であつた。

(五)讀賣といふのは、香具師や、際物師によつて出版せられた一種の新聞で、大抵は粗末な木版もて印刷し、極めて急を要するもの——今ならば號外を出すべき場合——は瓦版に刻んで出版し、大聲に要領を叫びながら市中を賣り歩いた。無論官吏の認可も經ねば、事實の眞偽も確めはしなかつた。

これは殆んど今の新聞の起因とも見る可く、その内容は色々であつた、先づ今の二面種とも見るべきものには、閣老、參政、三奉行、その他重職高官の任免、朝廷、幕府の重典舉行、外船渡來、海岸防戰、高官暗殺、政治暴動の事變、並びに大火、地震、海嘯、暴風などの天災を記したものがあつた、今の三面種とも見るべきものには、市中の出來事、例へば喧嘩心中、閨門の私醜、畸形兒の出生に關する記事があつた。また、鞠唄、盲女節の如き流行形の替歌を作つたり、雜俳、連歌、狂歌、川柳を作つたりして、事局を諷刺し、高官を罵詈した諷刺的なものも出版せられ、往々にして警吏の捕ふるところと成つた事もある。

その後、歐米の文明は次第に東漸し來つて、知らず識らずの間に吾邦を襲ひ、新聞紙發行の機運を見るに到らしめた。文久元年(二五二二)幕府より米國に派遣せられた小栗上野介は、歸朝後新聞發行の建議をして、容れられなかつた。

れども、民間では『バタビヤ新聞』と云ふものを起した、これは半紙一枚の木版印刷で、蘭人が爪哇のバタビヤから齎して来た新聞を譯したものであつたが、只だ一號を發行したのみで廢刊した。

處が元治元年(二五二五)三月一日に『新聞紙』と云ふ新聞が横濱から發行せられた、毎月二回の發行で、編輯主任は故岸田吟香氏、本間潜藏と米國に歸化したジョン彦造とがその助手であつたが、九號まで續いて廢刊した。その時岸田は支那へ旅行したのであつたが、歸つて見ると東北に亂があつて天下騷然人心恟々云ふ有様だから、早速軍事通信を主として『漢國』といふのを發行した、始めは月二回、後には週刊となり、紙面の體裁も、記事の内容も大分整つて来て、購讀者も可成あつたにも拘はらず、主筆が汽船運送業に従事した爲めに廢刊となつた。

これと前後してまた新紙には、柳川春三の『中外新聞』宣教師ペリーの『萬國新聞』福地源一郎、條野傳平の『江湖新聞』辻新次、鈴木唯一の『遠近新聞』を始めとして、『内外新聞』新聞略『江城日誌』など十數種あつたが、何れも月刊若しくは週刊で、印刷は木版、編輯は杜撰で、専門的なものとはなかつた。これ等の新聞の中、最も有名なものは『江湖新聞』で、盛んに薩長攻撃をやつたり、政治上の批難をしたりしたので政府の忌諱に觸れて、新聞は發行を禁止せられ、主筆は監禁をせられた。此の時始めて新聞紙取締法が設けられて、頗る他日に残したのである。

雜誌は勿論明治時代の産物であるけれども、幕府の末期に

出版せられた新聞は、名こそ新聞なれ實は雜誌と同一であつた。併しそれより前に『鸚鵡石』と云つて、芝居に關する記事を載せたり、心中や、喧嘩や、火事を報導した小冊子もあつた。要するに、當時に在つては雜誌と、新聞との區別は殆んどなく、これを今日から見ると幼稚極まるものであつたのである。

併しかくの如くにして動き始めた出版熱は、それを治する藥がないから、次第に度を高めて、明治時代の最高度に達したのである。惟ふに維新後へ遺つた徳川時代の出版上の遺産と云ふものは、豊富ではあるが劣等で、到底新時代の人心を満足せしめるところが出来なかつた。併し東北の戦争の起つた時分には、既に歐洲文明が流れ入つて、有識者の間には新出版の計畫をしたものが多く、著書に、新聞に、新しい香氣と新しい音響とが充ちてゐた。その代表者は福澤諭吉氏で、氏の著した小冊子の中には、『西米の新聞』を呼吸せしむる目的を持つたものが多く、一巻の『世界國づくし』を見ても、大方氏の志は知れる。とは云へ氏は徳川期から明治期へ入る過渡時代のレブンセンテイズ、マンテ、新出版の機運は先づ醫學界から起つた。寺島良安の『和漢三才圖會』にすら、西洋の事は記され、頼山陽の『山陽道稿』にすら、ナポレオンの記事は發見せられる。吾等明治ッ兒は、決して杉田玄白先生の偉功を忘れてはならぬ。これを要するに、三百年來、強いて閉鎖されてゐた邦家が、急に開放されて手と脚ばし、足を伸ばす氣運に應じて、出版界もまた蔚然として勃興し、明治に到つて前古未曾有の盛況を呈するに至つたのである。

## 第二章 新聞紙の勃興

官報の前身たる『太政官日誌』と『鎮將府日誌』この外は、一種の新聞取締法によつて悉く發行を禁止せられ『江湖新聞』を始めとして雨後の筍の如く發生した新聞紙は、相前後して廢滅に歸したけれども、新聞を要求する聲は到る處に聞かれた、政府の當局者すら、その發行を必要と認められたものもあつた。明治四年(二五三二)に創刊された『新聞雜誌』は、實に參議木戸孝允の保護の下に發行されたものであつた。

尋いで發行せられた『横濱毎日新聞』後に『東京横濱毎日新聞』と改題した新聞は、日刊新聞の元祖であつて、本社が東京に移され、沼間守一、島田三郎、塚肥龍等によつて經營されるに到つた頃には、模範新聞として自らも居り、人もまた許して爲た。その翌五年二月に『江湖』の後身たる『東京日々新聞』が起され、六年には『郵便報知』が日刊となり、七年には『朝野新聞』八年には『隱新聞』が創刊せられた。これ等所謂『五大新聞紙』は政府より憚られるまでに、大反響を有する言論を載せ、隱然政府の敵國たる觀を呈すると同時に、他面に於いては國民の忠實なる味方と成つた。

これより先に發行せられた『日新眞事誌』は、大井憲太郎氏等の論説を載せて時人の注意を惹き、明治六年に井上大藏大輔等の財政意見書を素破抜いた爲めに、國論を沸騰せしめたことがあり、その翌年には征韓論の破裂、民選議院の建白な

どがあり、五六新聞社は毎日その紙上に、時事問題を捉へて危激な論評を試みるので、政府は少しびく／＼者となり、遂に八年六月を以て讒謗律を制定し、新聞検閲を嚴重にすると同時に、記者の罰金及び體刑を規定した。當時新聞界に噴々の聲名を馳せた末廣重恭(曙)甫喜山景雄(東京日々)成島抑北(朝野)岡敬孝(郵便報知)等二十三名は、皆この新法律の爲めに奇禍を買つた。けれど此の抑壓、此の迫害は、却つて新聞紙の信用を高めて、その勢力を發展せし動機となり此の際に於いて讀者は著るしく増加した。

何しろ、讒謗律が出る位だから、當時の新聞の氣焔は當るべからざるもので、何れも此れも論説を主とし、雑報さへ論文體で書いてあると云ふ始末なので、一般の人民には何が何だか確り分らなく、購讀者は重もに上流社會の人に限られてゐる傾向があつた。それでは甘く成いと云ふので、鈴木田正雄、本野威亨等は七年十一月に『讀賣新聞』を創刊し、全紙に振假名をつけて文章を平易にし、記事も亦た家庭向きのものを多くしたので、中流以下の社會には酷く歡迎せられた。續いて八年四月に『東京繪入新聞』が發行せられ、繪を挿んだり小説の續き物を載せたりして、在來の政治新聞とは餘程面目を改めたが、惜いかな戯作者肌の記者が多かつた爲めに、五大新聞紙の如く、一世の景慕と尊敬とを博することが出来なかつた。併し所謂『三而記事』即ち社會種を新聞に入れたことは、此の二新聞の功とせねばならぬ。

### 第三章 政論全盛時代の新聞

明治八年頃から十五年頃までの新聞紙は、まるで政論を陳列したやうなもので有つて。その頃は國民の政治熱が最高潮に達した時で、猫も杓子も寄ると觸ると政治上の議論をしていや民権が何うだの、やれ自由が此うだの、どっこい立憲政治はそんな物でないだのと、全く氣狂のやうであつたから、勢、新聞紙も「Politomania」に罹らざるを謂なかつたのである。

それもその筈、當時は吾が政體が非常な勢力を以て變革せられてゐる時であつた。明治八年四月には、立憲政體漸進の勅語出て、十二年には府縣會設立せられ、十五年には國會開設の聖勅出て、政黨は雨後の筍の如くに起つて、政治論沸騰し新聞紙簇生した。

これ等の新聞は大方政黨の機關で、その記者たる人々も、また殆んど政治に關係して爲ないものはない、と云ふ有様であるから、是までは社會趣味に充たされて爲た所謂「小新聞」さへも、どしどしと政論を掲載し始めた。一例すれば市井の小事故狭斜の巷に於ける出來事を報導するが目的で起された『有意世新聞』(寺家村逸雅創刊)さへも改進黨の機關となつて『改進黨新聞』と改名し、『讀賣新聞』また改進黨の高田早苗氏を迎へ入れて政論を書かしめ、『繪入自由新聞』は自由黨の機關となり、大阪の『大阪日報』は立憲政黨の機關となつてその

題名を改めた。この時國民は一部の學者によつて、モンテスキューの學說を聞かされた、自由民権の四字は口喧ましく叫ばれた、立憲政治の一句は至て天のマナの如くに喝仰せられた。國を擧つて政治狂となり、口に政治を談ぜぬものは、人間でないやうに思はれて爲る。それが爲めに戯作者肌の人々によつて作られた新聞小説は、些しも讀者の注意を惹かなくなり、政治を主題とした小説が歡迎せられるやうに成つた。文名一世を籠單し、政論天下を風靡する新聞記者も、茲に於いて乎躍り出て、政治小説を書き始めた、矢野龍溪、末廣鐵腸などはその人で、『經國美談』『雪中梅』などはその作である。

かくして大小新聞の區別は殆んどなくなり、何れも此れも政治的のものとなり了つてが、それと同時に新聞紙の政治上に於ける勢力は非常なる發展をなして、政府をして畏怖せしめた。天下の新聞、悉く政府の反對黨と聞いては、政府も手を袖にして傍觀してゐる譯には行かず、囊に買収して半官報の名ありし『東京日々』の外に『明治日報』(丸山作樂)『東洋新報』(水野寅次郎)を起さしめ、大學の書生に譯させた獨逸の帝國主義論を掲載して、佛國流の自由民権説と對抗せしめた。茲に於いてか『御用新聞』の名稱が起つた。

併しその頃よりして、御用新聞の勢力は弱く、到底反對黨の諸新聞紙に頹頹するやが出來なかつた。のみならず、政府も其後、機關新聞に冷淡に成つたので、『明治日報』『東洋新報』遂に倒れ『東京日々』は福地源一郎に去られて昔の盛觀なく、天下は自由民権説の跋扈に一任した。

故鳥谷部春汀氏曰はく、「此の當時の新聞紙は、その性質狭小にして紙面の内容甚だ單調に失せざるを得なかつた、それには二つの理由がある。(一)は政論が編輯局を支配してゐた爲めに政治以外の國民生活が忽諸に附せられた事(二)は政黨の機關となつてゐたから獨立公平の意見を發表するやが出來なかつた事である。」この結果として讀者は一部人士の間に限られ、その販賣高が減少した爲めに、收支償はずして續々廢刊した。かくして新聞紙は一轉變をなさざるべからざる運命に遭遇した。

### 第四章 新聞記事の變革

新聞記事變革の旗は、先づ『時事新報』(十五年創刊)によつて翻へされた、同新聞の社主は中川上彦次郎、編輯長は伊東義右衛門であつたけれども、實は維新の學將福澤諭吉先生の主宰に係り、不偏不黨、獨立自尊を標榜し、昂然として天下の諸新聞に對抗した。『時事新報』の趣旨によると『時事新報』は、政治を本位とせずして、一般文明の指導者にせんとしたものである、故にその紙面は甚だしく豊富で、政治以外に經濟及び社會の記事多く、文章また論文口調を避けて、三田式の通俗平易を旨をしたから忽ちにして讀者の數を増し、一躍して大新聞の伍班に入つた。

此ら成ると外の新聞も黙つては居られない。明治十八年、矢野龍溪氏が歐洲より歸朝すると直ぐ、自己が社長たる『郵便報知』の改革に従ひ、先づその紙面を縮少して定價を引き

下げ、記事には傍訓をつけ、續き物として小説を掲載し、下流社會にも消化せられるやうな編輯方法を取つたので、讀者は自然多くなつた。

これに由つて見ると、新聞が政治を本位として維持せられることは頗ぶる困難である、多數の讀者を得る爲めには、政論以外、すべての社會の出來事——國民生活の各方面に亘る記事を掲げねばならぬと云ふと明白に成り、新らしく生れた『都新聞』『東京中央新聞』や『新新聞』の如きは、何れもその方針を取つてゐる。

ところが二十三年一月に到つて、その方針に適へる理想的新聞紙が創刊せられた、それは即ち『國民新聞』で、非儿な編輯技術が天下の眼を驚かしたのみならず、主筆徳富蘇峰氏の奇警なる時代批評は、日本隨一として文壇に轟立立てられ、記事の多方面と、趣味の豊富と、文章の通信とは、相俟つて磁石の鐵を吸収する如くに讀者を吸収した、しかも決して卑野に陥ることなく、何處かに高尚な風味があり、清新の香氣が溢れてゐることは、當時の『國民新聞』の特色と云はねばならぬ。

これを要するに、此の期に於ける新聞紙は、次第に「Dry style」から「Florid style」に「Simple」が「Labores style」に轉じ來り、政治經濟のごつ／＼したものを許してはよくない何ても軟かい、優し市井坊間の記事も加へねばならぬと云ふ事に成り、始めて『硬派』『軟派』と云ふやうな區別もつき文章を平易しくて繪畫まで交へ、髯りしやの主人ばかりでなく家庭の、主婦や子供達にも讀まれ得るやうな程度のもの

### 第五章 新聞の資本的競争

ところが商賈地たる大阪に於いて、資本的企業の性質を帯んだ新聞改革が始められた。是より前「時事新報」でも「郵便報知」でも「國民新聞」でも、みな資本的企業の性質を帯んで居ず、唯だ自から筆を執るの新聞記者が士人の副業として經營してゐる許りであつた。然るに「大阪朝日」(十二年創刊)が村山龍平氏の手に移るに及び經營の方法は從來とは全く一變して、一種生産的の事業と目されるやうに成つた。村山氏は先づ何んな新聞が最も氣受よきか、最もよく賣れるかと云ふことを考へて、新聞紙の特性を領悟した。その特性といふのは第一に報道の機敏なこと、第二に記事の確實なこと、なるとあるが、その二つさへ得れば確かに、新聞界を雄飛することが出来るかと考へ、全力を通信機關の設備に注ぐことにした。かくして内外電報は載せられ、特派通信員は置かれ、通信費用はいくら懸つても可いと云ふ事に成り、新聞紙界には資本的競争が始められた。

「大阪毎日新聞」は十六年に「立憲政黨新聞」の改題せられたもので、初めは柴四郎、竹内正志等が編輯に従事してゐたが渡邊治氏がこれを引受けるやうに成つてから、紙面は甚だしく改良せられ、盛んに通信機關を利用して報道を迅速にし、當時日々聲價の上りつゝある「大阪朝日」に致して戦鬪を挑んだ。その頃大阪には「大阪新報」(津田貞)「大東日報」(原敬)となつた。

なるに、これはまた餘りに Preservative であつたけれど、その卓然として時流を抽いた點に至つては、實に文壇の珍であつた。

これより先き二十一年に「東京新報」が起され、主筆朝比奈知泉氏の健筆は、「日本」の論文と鏗を削つて、火花の散る觀があつたけれども、日ならずして廢刊の厄に逢ひ、朝比奈氏は「東京日々」に入つた。

要するに、此期に於ける新聞紙は、士人の片手間式經營から、次第に資本的企業の性質を帯び來り、營業的經營に移さるゝと同時に、報道は従前に比して甚だしく迅速となり、記事また甚だしく豊富となり、廣潤となり、内容に於いて酷く進歩したと云ふことが出来る。

### 第六章 新聞紙の發展

明治二十三年に議會が開かれてから、全國の諸新聞紙は一時また、元の政論全盛時代に居つた觀があつたが、それが爲めに新聞紙の勢力は甚だしく強められ、議會の解散、政費の節減、民力の休養等、すべてやかましい問題の背後には、新聞紙が控えて糸を操つてゐるので、政府も可成りに新聞紙を畏れて、時々發行停止の嚴命を發したものである。

故福地櫻痴氏は議會開設以來日清戰爭迄の間に、新聞紙に在來の空論を避けて、着實な事實に基づいた議論をするやうに成り、次第に理想的から現實的に入つたと觀察したが、故鳥谷部春汀氏は「此間に於ける新聞紙は自營競争の時代に入

「東雲新聞」(中江篤介)など云ふ新聞があつたもので、到底、資本的競争に堪へるものが出来なくして滅び、大阪は全く兩新聞によつて占領せられた。

大阪の新聞紙界を壓倒した村山龍平氏は、更に手を伸ばして東京にまで進撃した。氏は二十一年に「東京朝日新聞」を起して「大阪朝日」と攻守同盟を結び、盛んに通信費を放出して機敏な報道をしたので、他の新聞紙は殆んど全く生氣を失ひ、當時の東京新聞は「東京朝日」の光華に眩惑せられて輝やく群星の瞬くが如くであつた。二十二年、憲法發布の際に於ける「大阪朝日」に、全文電報せられたる憲法を號外にして市中に配附し、二十三年、帝國議會の開かれた際には、議事は悉く電報で打つて翌日の附録とするなど、金のない、よたよた新聞の企て及ばない事をやつたので、他は呆然としてその爲すところを見てゐた。

然るに二十二年三月に創刊せられた「日本」新聞は、此間に在つて特殊の色彩を帯び、宛然として古武士の如き偉を備へてゐる。少くとも當時の諸新聞は、墮落とまではゆかざるも、一種の卑しい商人根性、乃至は封建的根性を持つてゐて、售れ、ば可いと云ふ考へてゐたが、「日本」は谷干城、三浦梧樓等一派の頑固な思想を代表して歐化政略に反對し、勸諭尙武の思想を鼓吹した。社長であり、又主筆でもある陸羯南氏は人格、文才共に一世の雄で、世間から甚だしく敬慕されてゐた。つまり「日本」は新聞社が相率ひて雜報新聞にならんとするのを見て、これではならぬと昔の大新聞の態度を以て、高等批評の任務を盡したのである。世の新聞派の Progressive

りしことを自覺し、爲めに編輯状態を一變して事務的、技術的、營業的とした。」と云ひ、八箇條の主要なる變革を計上してゐる。

- (一) 此期に於ける大新聞紙は、内外樞要の地に常設通信員を置き、大事件の起つた時には特派通信員を派遣して、その事件の詳細を報道せしむるに到つた。
- (二) 海外電報の價値を認識して、ロイタル電報、その他特約電報の供給を仰ぎ、海外に於ける諸事件の發生、經過を報道することに成つた。
- (三) 各種の通信會社が出来て、新聞記事の原料を供給することと成つたので、それを精選する爲めに編輯の技術が必要となり、従つて實質の上に非常な改良が加へられた。
- (四) 三面記事、即ち人心を刺戟する警察種を重んずるの傾向を生じ、新聞紙の中には盛んに社會の暗黒面を描寫して、讀者の好奇心に投じやうとするものが出来て、二十五年に創刊せられた「萬朝報」と、二十六年に起された「二六新聞」とはこの傾向の代表者である。
- (五) 新聞小説は、次第に寫實主義の人情小説、若しくは牽引的な深偵小説を喜ぶやうに成り、以前のやうに政治を主題としたものは跡を絶つに至つた。坪内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴、森鷗外、山田美妙等諸氏の創作や、森田思軒、黒岩涙香諸氏の翻譯小説はいたく歓迎せられた。
- (六) 政治家を兼ねた新聞記者は次第に勢力を失ひて、専門的な記者が輩出し、朝比奈知泉、徳富蘇峰、陸羯南、三宅雪嶺、竹越三又、石河幹明等諸氏は、それ／＼自家の文體と議

論とを以て、文壇に雄視するに到つた。

(七)新聞論説は、從來は抽象的のもの、悪く云へば空想的に傾いてゐたが、議會開會以來、具象的乃至現實的となり、事實問題について着實に議論するやうに成つた。

(八)印刷機械もまた此期に於いて改良せられた、政府が佛國から輪轉機を買つて官報の印刷に用ゐたのは、明治二十三年であつたが、その後『東京朝日』『大阪朝日』先づこれに倣ひ、次いで『時事新報』もまた輪轉機を用ふるやうに成つたので、他の手刷機械では競争が出来なくなり、益々資本の必要が認識せられた。

ところが二十七年に至つて、日清戦争が起り、國民は擧つて戦争狂となり、進軍の様、勝敗の状況、戦地の有様などを知らうとするものが多く、従つて今までは新聞を手で觸れたことのない人までも、争つて新聞紙を購読するやうに成つたので、發行部数が甚だしく増加し、新聞紙は創刊以來、未だ曾て有らざる盛運に向つた。各新聞社また、成るべく多數の讀者を得んものと、編輯上の苦心をしたので、内容外形共に著るしく發展し、全く在來の新聞とは面目を一新するに到つて、つまり日清戦争は、吾が邦の新聞紙をして未曾有の發展をなせしめ、讀者の増加に従つて發行部数を殖し、勢ひその維持力を養はしめたのである。

### 第七章 新聞紙の讀者

#### 吸收策

日清戦役の後の新聞紙は、讀者を本位とした結果、一層營業的となり、號外、附録、廣告、割引販賣、その他あらゆる競争が盛に行はれた爲めに、或る者は倒れて了つたが、或る者は勝利を博して大膨脹をなし、動きなき基礎を定めて了つた。

當時の大新聞は、何れも讀者を吸收する策を講じて、あらゆる手段と政略とを運用したが、中等以下の讀者吸收策としては左の如き手段を執つた。

(イ)文章を成るべく平易にして、誰にでも讀むことの出来るやうにする事。

(ロ)成る可く挿畫を多くして人目を牽くこと。

(ハ)理窟っぽさ問題よりも、感情的記事に紙面の大部分を割いて、世人の感情を満足せしむるやうに計る事。

(ニ)好奇心を動かし得べき記事は、成るべく誇大の報道をして、人の感情を刺戟するやうに努むること。

(ホ)高尚な趣味よりも、通俗な娛樂の材料を家庭に供給しやうと努力すべき事。

(ヘ)國民生活と直接の關係ある經濟事項を、最も機敏迅速に報道する事。

以上の六項は鳥谷部氏の観なのであるが、此外にもまた幾何もセンセーショナルな方法で以て、讀者を釣らうと試みるものがある。この中、家庭趣味の記事と、經濟事情の記事とは、各社の均しく力瘤を入れたもので、その驍將は「報知新聞」である。

「報知新聞」は「郵便報知」の改題したもので、その時は三木善八、村井弦齋兩氏の經營に移つてゐた。此の新聞は讀者吸收策として、先づ政黨との關係を絶つるを公言し、挿畫を加へ、文字を平易にし、主力を三面記事に用ひて、家庭の中に讀まれんと望んだ。それと同時に村井氏の「日の出島」と題する小説を掲載したところ、殊の外の大受て見る／＼中に讀者が増加し、日清戦役前には五六千より讀者のなかつた新聞は、一躍して數万を印刷するやうに成つた。目下各新聞の面を塞いでゐる職業案内、衛生顧問、法律顧問など云ふ欄は、みな始め「報知」の企てたものである。

かくして次第に發展した新聞紙は、探訪、通信の諸機關を整備し、電信、電話の活用頻繁となり、日は一日、刻は一刻より忙がしくなつて來た。又讀者の増加するに従ひ、多くは輪轉印刷機を据え付け、大新聞では一社で二三臺の輪轉機を用ひてゐるが、「報知」と「中央」とは色刷機械をすら使用するに到つた。

### 第八章 現下の新聞紙

かくして日露戦争となり、新聞紙は一時戦報たるが如き觀を呈したが、此時に於いて最も恐ろしいものは金の力で、通信費をどしどし使ふ『大阪朝日』『東京朝日』『大阪毎日』

「時事」の如きは、依然として他の貧弱なる小新聞を睥睨するの概があつた。

戦後に於ける新聞紙の競争はますます甚だしく、今では營業上の争となつた傾きがある。かうなると讀者を殖す爲めには廉賣にもせねばならぬ、割引もせねばならぬ、無代發送もせねば成らぬ。従つて發行部数が多くても、新聞代だけでは收支が償はぬやうな勘定となり、勢ひ新聞經營の一大財源として廣告料に重きを置くに到つた。その結果として廣告の多い新聞は信用のある新聞、聲價の高い新聞、財政の豊富な新聞と目されるやうに成り、或る意味に於いて營業部は、編輯部よりも重んぜられてゐる。こんな風であるから、陸氏の「日本」も主宰者が一度身退つて他人の手に渡つてからは、直ちに墮落して一般普通のものとなり、卓然たる古武士の風を失つて了つた。

この營業政略に最も成功してゐるのは「報知」で、その販賣機關の整つてゐることは恐らく日本一であらう。廣告の多いのは「東京朝日」「時事」「國民」などであるが、大阪では「大朝」と「大毎」が羽振を利かしてゐる。かくの如く、新聞紙が相率ひて讀者本位となり、營業的、商買的となりつゝある間に「東京朝日」と「時事」とは、依然大新聞の態度を保持して悠揚迫らず、他新聞に較べて比較的センセーショナルでないのは非である。島田三郎氏の「東京毎日」また紳士的の新聞として目されてゐたが、今は人手に移つて武富時敏氏主筆となり、高尚な政治的批評と、卑しからざる三面記事とを以て、曾て「日本」の踏んだやうな路を通らうとしてゐる。

今や新聞は殆んど全盛時代に達し、明治十年頃には、全國で僅に一百種に過ぎざりしもの、三十七年には三百七十五種に達し、外字新聞すら横濱に五種、神戸に二種あるに到つたが、日本人の發行する英字新聞は「シヤパン」、「タイムズ」一つある許りだ。

場所	数	場所	数	場所	数
東京	五四	京都	七	大阪	二四
北海道	二五	栃木	三	三重	一七
静岡	五	岐阜	五	長野	九
福島	六	神奈川	一四	長崎	二
埼玉	一	千葉	三	新潟	一八
茨城	四	茨城	三	奈良	四
愛知	一九	山梨	五	青森	五
秋田	五	富山	七	兵庫	〇
石川	四	福井	三	岡山	三
山口	七	徳島	四	愛媛	五
大分	三	熊本	六	宮崎	二
瀬田	三	滋賀	六	鳥取	三
岩手	五	山形	二	徳島	二
島根	二	廣島	七	和歌山	六
香川	三	福岡	七	佐賀	六
宮崎	一	神戶	一	四	六

これは三十七年の統計だが、今ではまだ一殖えてゐるとだらう。東京で今特色のある新聞は「時事」(社長福澤一太郎)「報知」(社長箕浦勝人)「國民」(社長徳富猪一郎)「東京朝日」(社長代理池邊吉太郎)「讀賣」(社長本野威亨)「萬朝報」(社長黒岩周六)「中央」(社長大岡育造)「二六」(社長秋山定輔)など

六雑誌であつた。これより先き、明治六年、森有禮は米國から歸つて學者の一團體をつくり、時代を指導する積りて明六社といふものを組織した。社員の面々には西村茂樹、津田真道、中村正直、西周、加藤弘之、福澤諭吉、箕作秋坪、杉亨二、箕作麟祥など云ふ人々があつた。「明六雑誌」はつまり此の團體の機關で、盛んに歐化主義を鼓吹したものだ。次ぎに慶應義塾の出版局から「家庭談叢」が發行せられ、福澤諭吉氏自から監修の任に當つてゐたが、間もなく倒れて「民間雑誌」なるものが出て、三田學派の思想を宣傳した。又その頃「近時評論」「江湖評論」などいふ雑誌があつて、急激な政論を發表したが、永續せずして廢滅に歸した。明治十二年に創刊せられた「東京經濟雜誌」は、主筆田口卯吉氏の自由貿易論を載せて、一部社會の人心を傾倒したが、維持の方法が宜しきを得たのと、主張が終始一貫してゐたのとで、讀書社會に確實な基礎を作つて、今日までも繼續して來た。當時この雑誌に反抗する積りて、犬養毅氏の「東海經濟新報」が出されたが間もなく廢刊した。

### 第十章 雑誌の發展

ところが、二十年後に至つて、雑誌界の二大明星が現はれた。即ち一は二十年に徳富猪一郎氏に依つて創刊せられた「國民の友」で他は二十一年に三宅雄二郎氏等に依つて發刊せられた「日本人」である。「國民の友」の大立物は徳富猪一郎氏であつた、氏の和漢洋

であるが、大阪は依然「大阪朝日」「大阪毎日」の二新聞の勢力が強く、先頃起された「大阪時事」の如きは少しく持て餘しのやうに見受ける。又地方にも、名古屋、福岡、廣島、岡山、京都、長野、仙臺等に、悔るべからざる大新聞がある。

發行部数は勢力のあるものは十萬乃至二十萬、地方新聞でも三萬以上印刷するものがあつて、將來の擴張窺知すべからずとも云はれる。又通信社には、帝國通信、日本通信、電報通信、自由通信、切抜通信などあつて、何れも追々盛んに成りつゝある。要するに今後、新聞紙は益々盛んとなり、次に發展してゆくには相違ないが、現在流行しつゝある營業振と編輯振とが、どれ程續くかは疑問である。見渡したところ何れも此れも「Americanism」の新聞でないものはなく、一として「ロンドン」、「タイムズ」の如く權威のあるもの、發見されないのは、慨然に堪へぬ次第である。營業本位、讀者本位の繼續してゐる間、新聞に權威のないのは當り前だ、眞正の革命は是れからだ。

### 第九章 初期の雑誌

維新前後に出された新聞紙は、今から見れば「雑誌」と云つた方が適當な位のものであつて、否むしろ、現今の雑誌は其れから進んだものと見るも宜しい。その後新聞が日刊となるに及んで、新聞紙と雑誌との間には、體裁、實質とも、儼然たる區別が出来た。

最初に雑誌の體裁を備へて出たものは、毎月二回發行の「明六雑誌」であつた。これは西洋思想よりも寧ろ東洋思想を鼓吹し、文體の如きも拮据贅牙、鬱然として繁り、儼然として傲るの概があつた。二氏は主として國粹の保存せざる可からざることを説き、極端なる歐化主義に反對して、日本固有の長所を發揮した。此の二雑誌は、實に進歩、保守兩主義の人才の集まつた處で、偉大なる感化を青年に及ぼした。兩雑誌の功は没すべからざるものである。後「國民の友」は「國民新聞」に合し、「日本人」は「亞細亞」と改題したが、再び舊名に復して今日まで續き、「日本」が人手に渡つて以來、合併して「日本及日本人」と呼んで居た。博文館から發行せられた「日本大家論集」といふ雑誌は、二十年創刊以來多數の讀者を吸收し、その第一編の如きは數版を重ねたが、是が爲めに博文館は成功をして、雑誌界の重鎮たるに到つた。その頃少年雑誌として一般に知れ渡つてゐた者は、學齡館の「少年國民」と少年園の「少年園」と、博文館の「幼年雜誌」及び「日本之少年」であつたが、「少年國民」は屢々權利を讓られて一併一起し、「少年園」は名を變改して今の「文庫」となつて存在し、「日本之少年」及び「幼年雜誌」は「少年世界」乃至「中學



「世界」に變形して遺されて居る。また「日本大家論集」の後身とも見るべき「太陽」は二十八年創刊以來、屢々面目を改めながら、年々發展して雑誌界に雄飛し、目下同館から出版せらるる月刊雑誌は總て十三種ある。

轉じて文學雑誌は何うかと見るに、著るしく發達したのは、日清戦役前後だが、それより前に機運が動いてゐたと見え、二十一年には硯友社の「我樂多文庫」出て、尋て「都の花」「早稻田文學」「やまと錦」「しがらみ草紙」等が發行せられたが、中でも「早稻田文學」は坪内雄藏氏の創刊に係り、英國派の穩健なる思想を鼓吹して、文壇に一路清新の氣を與へ、「しがらみ草紙」は森林太郎氏の創刊に係り、獨逸派の煩瑣なる思想を代表して、兩々相當り、一時文壇の光明となつてゐた。

日清戦役後文壇は一入盛となり、小説雑誌としては「新小説」「春陽堂より」「文藝俱樂部」博文館より、何れも月一回宛發行せらるるに成り、二十八年に帝國大學文科出身者編輯の月刊雑誌「帝國文學」出て、「早稻田文學」に對抗することとなり、「反省雑誌」また屢々文學的作品を載せて、文壇を賑はしてゐた。

數年前よりは婦人を相手にする婦人雑誌が、彼處や此處から澤山出版されたが、博文館の「女學世界」「實業之日本」の「婦人世界」を初めとして、皆な大に賣行がよい。又實業雜誌は日露戦役後、實業熱の高潮に際して續出し、「實業之日本」「三田商業界」「實業之世界」「太平洋」など何れもよく賣れるが、中でも「實業之日本」は非常なる勢を以て讀者を吸収してゐた。

榮えて、金港堂、集英堂、普及舎、文學社、國光社の名は天下に鳴り響いたけれども、國定教科書の制定以來曉天の星の如く影を潜めた。

此の間に於いて、豫約出版に由つて刊行せられたものには、随分大部のものもあるが、他は多くは片々たる小著述ばかりで、後世に傳へるに足るやうなもの極めて少ない。豫約出版の重なるものは近藤版活所の「史籍集覽」(五三三冊)「經濟雜誌」の「群書類從」(二六冊)「國史大系」(二九冊)「徳川實記」(七冊)吉川弘文館の「雅言集覽」(五七冊)「故實叢書」(一三冊)などて神宮司廳の「古書類苑」と東京帝國大學の「大日本史料」と京都藏經書院の「一切藏經」とは、射利以外の豫約出版である。

かくも失敗者の多い中に在つて、博文館のみは偉大なる成功をなし、二十一年から三十年迄の間に獨力を以て三千三百八十餘冊の出版をしたが、中には個人の事業として企て難いやうな叢書の出版もある。「帝國文庫」(一〇〇冊)「日本文學全書」(二〇冊)「支那文學全書」(二四冊)「帝國百科全書」(二〇〇冊)「日用百科全書」(五〇冊)「工藝叢書」(五〇冊)「通俗教育全書」(一〇〇冊)「少年文學」(三三冊)其の他「日本も伽羅」(日本歌學全書)「日本歴史讀本」等はその重なるものである。日本出版界の光りとして、世界に誇るに足るものは、彩色刷の木版である。雑誌「國華」と「審美大觀」とには、名残なくその妙技が揮はれて居る。此の他、西洋式の諸製版、諸印刷共に、日進月歩の勢を以て進み、その技術また次第に進歩しつつある。

し、出版界の珍として人を驚かして居る。この外、各種團體より發行せられる定期刊行物、科學、宗教、教育、哲學、美術、工業、農業、實業に關する雜誌頗ぶる多く、日本全國を通じて一千種以上もあるといふことである。實に盛なりと謂つ可しだ。

### 第十一章 出版界の概況

出版界の範圍は頗ぶる廣いからして、一々これを詳しく述べれば、一冊や二冊の書物では足らぬ、仍つて此處ではその概況を述べるとにして置かう。明治初年には、既に活版の傳習所が設けられてゐたけれども、出版物には木版印刷のものが多く、教科書は勿論、その他の書籍も大方は木版であつた。この傾向は明治十五六年頃まで續き、有名な「西國立志編」や「輿地誌略」や「經國美談」や「佳人の奇遇」等は、何れも木版印刷であつた。

明治十年から三十七年に到る統計を見ると、出版書籍の部数は年々増加して居るが、その中、翻譯と翻刻は次第に減少し、自著出版のみ次第に殖えて行くやうである。維新以來、出版業者の輩出したものは、その數甚だ多く、中には一時成功したのもあるが、大抵は皆失敗に終つてゐる。漢書を翻刻した風文館、政治經濟文學の新刊書を出した博文堂、法律書の博聞社、八尾書店の如き、みなそれ、維新前より出版界に重視せられた須原屋茂兵衛、山中市兵衛の如きも、衰滅の運命を免るゝとが出来なかつた。教科書屋は一時甚だしく

此の頃では、大分支那や、朝鮮へ日本の出版物が輸出せらるゝやうに成り、その販路は次第に擴がつてゆく様である。併し、日本語は英語など、遠ひ、その使用せられる範圍が狭いから、到底英語のやうに世界各國に擴まることは、先づ當分の中であると思はれる。とは云へ、吾國運の興隆したと、開關以來今日の如く盛んなことはない、此の機に乗じて出版事業の昌んになるのは疑を容れぬ次第である。

### 第十二章 結論

如上の發展過程から推して、吾が邦將來の出版界が、何うなるであらうかと云ふことを量るのは、必らずしも難事ではあるまい。思ふに國語が現在の儘では、とても大きな發展は出來まいが、一時喧ましかつた羅馬字問題が成立し、國語が羅馬字で綴られるやうに成つたら、一時は衰へもしやう、永久には益々盛んに成つて、多少し世界的の言語となるであらう。されば出版物も自ら販路を擴張して、世界的となる譯である。

グツと後々の事は別として、つい近くの將來は何うであらうか。——今の様子から見ると新聞紙には次第に亞米利加主義の遣り方が加へられて、資本的企業的に經營せられると同時に、編輯の方もなか／＼機敏に成つて、どし／＼と費用をかける。「手の記者」「足の記者」といふやうなことが理想にせられて、執拗く、熱心に、飽くまでも突込み記事が多く、今までのやうな上ツツりのものは餘り歓迎せられなく成つて、



# 附 録

## 四 十 一 年 史



此年内閣の更迭ありて、西園寺内閣倒れ桂内閣興る。種々の事件も出来したるが、先づ此内閣更迭を以て、本年の中心事件とすべし。政治界、財界に在りては積極主義甚だ振はず、整理緊縮主義頻りに唱説せられ、經濟界一般の調子も常調に復して、先づ平時の眞面目に立返へり、堅忍自重して徐ろに景氣を挽回せんとする健全なる状態を呈するに至り、或は又社會風教上の問題の稍々眞面目に論議せらるゝに至り、教育及文藝方面にも多少其影響を及ぼすに至りしが如き、更らに又外交の守成を専らとして、八方事なからんとを希ひ、寧ろ退嬰抑損に過ぎたる如き、種々の方面より觀察せらるべきも、要するに此一年を始めとし終りとして時勢を觀察するときは、内閣更迭の一事、以て全局を蔽ふといふべく、随つて全局を解する管轄たるべし。何となれば、西園寺内閣は時勢の容るゝ所とならずして遂に失落し、桂内閣は時勢に迎合して復興し、共に時勢の燒點に立つて、得失其處を異にしたる次第なればなり。故に此内閣更迭の一事にして議すべき價值ありとすれば、此年を支配したる時勢亦相應に議すべき價值ありとすべく、内閣を更迭せしめたる時勢にして、戰後有りふれたる凡庸の成行に過ぎずとせば、之を中心として出来したる社會各方面の現象も、日露戦争を中心とする十年乃至二十年の史乘中、左程重要ならざる平凡の數頁を充たす迄なるべし。只前一年に比較すれば、前年より此年は波瀾多かりし年と謂ひらるべく、波瀾の多きだけに、前年よりも世に印象を與ふると幾分多かりしを疑ふべからず。

# 序 論



いもの、商の小さいものよりも、價は高くても大きなもの、内容の充實したものが歓迎せられるやうに成つた。一例すれば三十八九年に亘つて流行した辭書出版の如き、當時に在つては、杜撰なもの、小ほけなものでもどしどしと出版されたが、此頃は纏まつたもの、中味のあるもの、大きなものなれば出されなくなつて来た。即ち出版業者も、讀者も、書籍に對する選擇力が強くなつて来た結果、何でも彼でもといふ入つ當り主義が捨てられて、あれも可くない、これも可くないといふと云ふ選り取り主義が盛んに成つて来たのだ。此の傾向にして長く續かば、出版界の將來は寔に有望である。少くとも今後は、出版圖書目錄を見て、これは是非買ひ度、買つて置き度いと云ふものがあるやうに成るだらう。

これを要するに、新聞、雜誌、圖書、すべての出版は、維新以後の準備時代、練習時代、乃至は研究時代を過ぎて、今や既に自覺時代、覺醒時代に入つてゐる、眞に活動するのはこれからである。舊時の夢を破つて醒覺した態度に、眞實に、忠實に、出版事業に當るものが、眞の成功を收むべき境涯に成つて来て居るのである。今は即ちその過渡期だ。

雑誌は實に近年、非常なる進歩をしたが、内容にはたゞ名家の名を並べてある許りだといふ様なものが多いが、體裁はいづれも美しく、次第に新聞的色彩を帯び來つたやうな條がある。これも營業本位、讀者本位で、雑誌の品格を保たうと云ふやうな考のあるものは極僅少で、團體機關の或るものを除いては、皆煽情的記事を掲げて、讀者を吸引することを是れ力めて居る。ても種類が多いので、發行部数は比較的少なく、十數種を除いては皆万以下である、雑誌はつまり今共倒れすべき運命を待つてゐるのだ、もし淘汰せられ、精練せられなければ、到底理想的のものを見るには出来ない、今が改革の好時期である。

最後に出版物を窺ふに、日露戦争前後のやうに、書籍の濫發は少くなつたが、一時濫發の影響を受けて、明治四十年から四十一年にかけては、出版界は恐ろしく萎靡沈滞を來し、購買力は甚だしく減少を來した。けれども、これが爲めに出版業者は、不知不識の間に選擇を行つて、その頃では價の安

珍らしい、得難い、測り知るべからざることを十分探訪し得て記載することが、良新聞の能事とせられて居る。従つて、競争は益々酷くなり、此頃は記事のみならず、寫眞や挿畫までも競争する。此の結果として夕刊も出る、縮切時間も遅くせられる、休刊がなくなつて来る。新聞紙は益々忙がしく、益々機敏を要するので、誇大に書いたり、偽を書いたりして人をチヤームしやうとする者も出て來る。併し、そんなアメリカニズムは一時の成功をしても、永久に讀者を纏く譯には行くまいと思ふ。

# 第一章 政治

## 一年頭の波瀾

一月十四日、世は新春の行樂に耽り、屠蘇の醉未だ醒めず議會も尚ほ休會中に屬して、朝野の政客多くは近縣に避寒の客となり、或は郷里に歸省して、中央政界の閑散なる、表面例年と大差なかりし時、西園寺首相以下内閣諸大臣は突然閣下に伏して骸骨を乞へり。聖明之を聽許し給はざりしかど、坂谷大藏、山縣逓信の二大臣のみは、已むなく罷免せらるゝこととなり、西園寺内閣は僅かに其覆滅を免れたり。

事は後に叙する所の財政計畫に基く。其計畫は前年十一月下旬より十二月中旬に亘れる元老大臣會議にて決定したるものにして、當時内閣は既に非常の窮境に陥り、此計畫の成否即ち内閣死活の問題たりしが、此事兎も角も決定して小廉を得たるに、其計畫の一要件たる鐵道經營年割額に關し、其後(十二月廿七日)逓信省より大藏省に廻付せる鐵道豫算は、全然其計畫を無視したる年度割變更案なるのみならず、山縣逓相は同時に鐵道會議を召集して此變更案を可決せしめたり(案の内容は、鐵道事業繼續十二箇年計畫に依り、既定年割額一億二千八百萬圓に新計畫一億三千四百萬圓を追加し、合

計約二億七千三百萬圓として年度割を變更せんとするものにして、元老大臣會議成案の鐵道繼續費總額及年度割が當時如何に計上せられたるか(明かならず)此に於て多大の困難を重ねて漸やく決定したる財政計畫は、逓相の爲めに先づ内り破壊さるゝの奇象を呈するに至り、差向き坂谷藏相と大衝突を初めたり。藏相は他の事業との關係上鐵道豫算に如斯き急激なる膨脹を來すの非なるは勿論、元老大臣會議の成案を變更するの困難を以てし極力其新案を排斥して豫算面より削除せんと求めたるも、逓相は其計畫を頑守して一步も動かざりし。動かざりしも亦一應の理由なきに非ざりしが故に事は益々面倒となりたり。曰く該計畫は既に一度閣議の決定を経たるものに屬す、閣議を経たるものゆゑ、鐵道會議を召集し更らに之が決定を経たるものに屬す、其手續に於ても道理に於ても今更ら其要求を徹すべき理由なしと。即ち閣議の決定を盾として逓相は飽くまで其要求を頑張りたるなり。

然れども逓相が閣議一點張りにて、所謂元老大臣會議の成案なるものを全然無視して、殆んど没交渉の態度に居るは如何の理由に基くか明かならず。勿論逓相の此會議に漏るゝ答なく、元老大臣會議といふからには、逓相も亦其一人たりしに相違なし。前後の事情より察するに、事主として數字に關する故、藏相の説明に一任して自分は唯盲判を押したるに止

まりしか、左もなければ、首相を始め會するもの多く計數に迂きに乗じ、坂谷、山縣二相若くは之に桂侯を加へ、政治上の陰謀よりして故らに此陷阱を作り置きしか。孰れかにあるべしと解せらる。然れども前者の如きは餘りに無責任にして後の行動と矛盾す、恐らく後者に屬せんも、山縣系一派の政治家が斯くまでに陋劣なるべしとするは、常識にては受取り兼ねる所なり。故に事の真相は兎も角、表面は前者に屬するものとして傳へられ、藏相は此變更案の閣議の是認を経たるものなるに拘らず、元老の前に之が説明を爲さざりしのみならず、元老大臣會議にて各自記名調印したる成案にすら鐵道豫算に關し藏相が宣明したる所に多大の誤算あるを發見したり(國民新聞)といふ。かゝる事情なりしを以て逓相は元老大臣會議に於ける責任の藏相に在るの無論にして自家の關知する所に非らずとし、撤回の要求にも、再調査の懇請にも應ぜず、結局藏相をして枉げて逓相の要求を容るゝの外なきに至らしめぬ。

問題は斯くして逓相の主張通りに一先づ落着きたるが、落着きたるは單に逓藏二相間の衝突に止まり、續て當然の成行たる内閣對元老の物議となり、愈よ奇怪なる大波瀾を惹起すに至りたり。

桂侯を筆頭とし松方井上兩老等烈火の如く怒れり。曰く内

閣が最初より補助を乞はざりしならば兎も角、既に一度閣議を掛け元老大臣會議の上一致を以て決定したる財政案を一應の交渉もなく變更して、實行せんとするに於ては最早手を引くの外なし。……内閣が圓滿なる解決を望むに於ては之を元老大臣會議に於ける決定に引戻さざるべからず(國民新聞)と。此に於て西園寺首相も憂慮措く能はず、十二日より各元老間に奔走して頻りに調停を講じ居る内、形勢は益に又一變化を來し、逓藏二相は密かに申合せて十三日夜共に辭表を首相の手に提出するに至りたり。此に於て首相も形勢の益々非なるを知り亦桂冠の決心を爲し、翌十四日の閣議に於て逓藏二相と共に聯帶引責の決心ある趣きを披露し、他の閣僚も聯袂辭職することとなりて、即日閣下に伏奏に及びたり。

之より前、聖明にも事態の容易ならざるを憂慮あらせられ、十四日早朝伊藤公の御召あり、公は參内の途上、桂侯を訪ふて其意見を叩き打合す所ありたる後、午後一時四十分參内し、御下間に對して委曲奉答する所あり、次に二時五十分西園寺首相參内したるに、種々優渥なる御説を賜はり、伊藤公は御前に於て國家の現状に慮み此際首相の桂冠を許さずとて諄々留任を勸告し、首相も亦聖慮を煩はしたるを畏み、大命の重きに感激して其決心を翻へし留任することとなり、午後四時退出したるが、之れと同時に坂谷、山縣二相の辭表は御裁可と

なり、年頭早々の奇變遂に漸く終局を告げぬ。  
 遞藏二相は當分専任を置かず、原内相遞信を兼ね、松田法相大藏を兼ね、後(三月)其補缺を貴族院に取り、子爵堀田正養遞相に任じ、男爵千家登福法相に任じ、松田法相は轉じて大藏専任となれり。蓋し西園寺侯の勢力由來貴族院に缺ぐる爲め、内閣成立以來此方面に對する苦心絶えず、此機に乗じて此弱點を補ひ、併せて將來の地盤を鞏めんとしたるなり。

### 二 財政反對の物論

西園寺内閣は、四十一年度以降の財政を理する爲、増税及事業繰延の二大綱目を標榜したり。所謂元老大臣會議の成案なるもの是なり。蓋し四十一年度豫算案を編成するに當り約一億圓の缺陷あり。然るに財界疲弊し、對外信用失墜し、戰時の餘波と之に引續く軍備の擴充の爲め、海外貿易は堪えず輸入超過を示し、憂ふべき正貨流出の勢は、滔々として底止する所なく、兌換制度の基礎も爲めに或は危からんとするの狀態に在りて、之が財源を公債に得んとは、内外共に不可能に屬し、行政費の節約、及税制の整理も急に行ふべき見込なく、之を斷行し得べしとするも到底其缺陷の幾分をも補ふに足らず、他に方法もなく、財源もなきが故に、已むを得ず増税と繰延事業の繰延に依り其缺陷を補ふの計畫に出てたるも

のなり。増税案は酒税、砂糖消費税、石油消費税(新設)の三種にして、酒造税は第一種一石十七圓を二十圓、第二種一石二十四圓を二十五圓、第三種一石二十二圓を三十圓、第四種一石二十五圓を三十五圓、第五種一石酒精分一度毎に八十五圓なるを一圓に、何れも税率を増加し、又麥酒税一石八圓を十圓に、酒精及酒精含有飲料税の一石酒精分一度毎に八十五圓を一圓とし其最底制限十八圓を二十一圓とす。砂糖消費税は第一種百斤に付二圓を三圓に、第二種四圓四十錢を五圓五十錢に、第三種六圓五十錢を八圓五十錢に、第四種七圓五十錢を十圓とす。又石油消費税は一石に付一圓を課するものにして何れも四十一年度より實施す。而して此外別に煙草專賣の價格を従来よりも平均二割方引上げ、四十三年度より年々徵稅費を除き三稅增收一千五百萬圓、煙草增收約一千萬圓總計約二千五百萬圓の增收を得る計算にして、四十一年度分としては、三稅增收額四百九十一萬五千餘圓、煙草增收六百四十餘萬圓合計約一千百餘萬圓を計上したり。

繰延事業費の繰延は、四十一年度より四十六年度に至る六年間に、總額一億二千六百萬圓(陸軍省約六千萬圓、海軍省約五千萬圓、遞信省約五百萬圓、其他各省約五百萬圓)を繰延べ、四十七年度以降に於て適宜復舊支出する計畫にして、差向き四十一年分としては三千五百萬圓(陸軍省二千萬圓、海

軍省五百萬圓、遞信省五百萬圓、其他各省五百萬圓)を繰延ぶるとしたり。即ち此の繰延と増税に依り、約四千六百萬圓を得、尙ほ足らざるは、前年度剩餘金、臨時軍事費特別會計剩餘金及び露國俘虜收容費の三收入を以て補ひ、兎も角四十一年度の豫算面に歲出入の均衡を保つとを得せしめたり。即ち左の如し。

歳入	歳出	
總豫算	六一一、〇四三、〇四八	六一五、九五八、三一九
第一追加豫算	五、一四七、九三九	二二二、六四八
第二追加豫算	三、五五六、〇九六	三、五五六、〇九六
第三追加豫算	五〇、五八八	五〇、五八八
合計	六一九、七九七、六七一	六一九、七九七、六七一

而して此豫算は、厘毛の修正なくして衆議院を通過(三月十日)、貴族院を通過(三月五日)したり。然れども其通過は容易に非ざらざりき。前年十二月増税問題の閣議に上りたる時より、民間反對の物論鬱然として起り、進歩黨及猶與會の一部は最も熱心に反對の氣焰を擧げ、而して増税費目の直接商工業家に影響し、戰勝の反動に基く民間經濟界の恐慌的不景氣をして、一層不景氣に陥らしむる虞れよりして、東京商業會議所を中堅として全國商業會議所の聯合反對運動となりて、商工業者の財政根本整理論勃興し、反對の聲浪全國を風靡せんば

かりの勢となりたり。此勢に乗じて進歩黨は猶與會と均衡し、休日明けの議會劈頭(二月二十一日)内閣不信任の決議案を提出したり。曰く政府は遂に過大の財政計畫を以て、今に至て之が實行に艱み、其標榜せる非増税の言明を無視して、荷重の負擔を國民に施さんとす。其無責任之より甚だしきは無し。仍て茲に之を決議すと。然るに此決議案は大同派に差向へあり、大同派は外に増税問題を抜きにしたる不信任案を提出し、單に内閣不信任といふ點にて一致の行動を執るととなり、二箇の決議案は同時に二十三日の議事日程に上りたるが、記名議決の結果、出席議員三百四十五に對し、可とするもの百六十八、否とするもの百七十七、即ち九票の少数を以て敗れたり。然れども民間の反對論は毫も其勢衰えず、豫算面に於て、又増税の諸法律案に於て之れを否決し去らんとし、熱心に示威運動に従事し、殊に商業會議所を中心とする商工業有志者の運動目醒ましきは、殆んど空前の壯觀と稱するに堪えたりき。此間に處する政府の苦悶亦察するに堪えたりといふべし。然るに二月四日の議場に政府黨の緊急動議にて増税案附議せるや、酒、砂糖増税に關する諸案は出席議員三百五十の中、賛成二百二十二、反對百二十八、即ち九十四票の大多數を以て、又石油税法案は出席議員三百四十、賛成百八十二、反對百五十八即ち二十四票の差を以て何れも衆議院を通

過し、豫算案亦出席議員三百三十六、讀會に移すべしとするもの二百十九、返付すべしとするもの百十七、即ち百二票の差を以て通過し、貴族院亦別段の故障なかりき。斯くて政府は兎も角議會の最大難關を切抜くるとを得、一先づ安堵の胸を撫下ろしたる次第なり。

### 三 第十回總選舉

第九回の總選舉の選出にかゝる衆議院議員の任期は、此年三月末日を以て満期となり、第十回の總選舉五月十五日を以て、西園寺内閣の下に行はる。政友會が在野黨たる勢を利して、絶對過半数黨たらんとしたると、増税反對派の奮起殊に、商工業者の逐鹿場裏に立つもの稍々多かりしと、今次總選舉の特色は、此二點に存したりき。

總選舉を目前に控えて、増税案の提起を餘儀なくせられたる政府黨の不利苦痛は、言ふまでもなく尋常にあらざりき。然れども彼等は全力を擧げて難苦闘したり。桂侯の一派を首め反對派は、鶴の目鷹の目にて、殊に其喜ばざる原内相が干渉的行爲に出づるなきかを猜視し、諸方より干渉の聲も少からず聞えたるが、聲のみにて概して其形迹なく、比較的甚だ公平に行はれたり。而して選舉の結果は、政友會の期待せし如く絶對過半数には達せざりしかど、殆んど之に達し、一政

黨にして從來未だ會で得たるとなき大多數を占めたり。反對黨は、増税といふ復た得難き利器を與へられたるに拘らば、勝利は依然政府黨に歸したらしなり。

政友會は選舉結了當時各派の計算によれば、從來の百八十一名を増加して百八十九名を得、別に准黨員ともいふべきもの十三名ありと聲言し、進歩黨は八十九名の中十三名を減じて七十七名となりたるも、准黨員十二名を有するが故に從來と大差なしと稱し、猶興會は三十七名中十名を減じて二十一名となり、大同俱樂部は五十八名の中二十六名を減じて三十二名となり、而して無所屬五十三名と數へられたり。然れども此計數の正確ならざりしとは、超えて十二月、第廿五議會召集當日、各派より衆議院に届出でたる左の所屬別に依つて明かなり。

- 政友會……一九二
- 進歩黨……六六
- 又新會……四五
- 戊申派……四二
- 大同派……三〇
- 無所屬……四

即ち政友會は殆んど准黨員を合したる數に達して、僅ながらも絶對過半数を占むるに至り、進歩黨は結局二十三名を失ひ、大同派は二十八名を失ひたる譯なり。又新會は猶興會と新選無所屬中主として非増税派に屬する者、十二月廿一日を以て合して一團體を形成したる者、猶興會と同様の俱樂部組織たり。戊申派は無所屬の商工派、准桂派等の集合したるもの

總選舉場裏の最大支配力は依然として金力に在りき。最も多きは、一人實に入萬圓を費したるもありといへり。

### 四 内閣の更迭

にして、玉石同架の輪廓不明瞭なる新團體にして、七月廿五日日紅葉館に發會式様のものを擧げ、戊申俱樂部と命名す。其席上、國債償還の方法を確定すると、財政を整理し、其基礎を鞏固にすると、税制を整理すると、産業の發達を期すると、外交を刷新すると等數箇條を綱領的に決議し、中野武營、戸水寛人、仙石貢、片岡直温、中村彌六等之が手耳を執れり。進歩黨は其頭數に於ても、萎微振はざる状態を現はし居るのみならず、前年來黨内に勢力を得たる改革派なるもの益々す勢力を加へ、後桂内閣成立するに及んで此派の爲め黨内を擾亂せらるゝと彌々多く、其實質は殆んど一變したり。序てに各派の色別を現時政界の二大柱たる西園寺、桂の二派に大分して觀れば、政友會の西園寺派、大同俱樂部の桂派たるはいふまでもなく、戊申派及進歩黨改革派は共に桂派の別働隊たるの觀を呈し、進歩黨非改革派及又新會の大部分は、桂、西園寺何れにも屬せざる中間黨たり。

尙這回總選舉の結果にて、稍々注目せられたるは、新選せられたるもの二百二十二名に上り、從來の總選舉よりも、其比率可なり多きに上りたるとなり。又商工業者の一般に政治運動に拙劣なりしとなり。又全國を通じて有権者數の激増に拘はらず、棄権者數の割合に少數なりしと、運動方法として公會演說稍や重きを置かれしと等あり。然れども要するに

總選舉の結果は、概ね其期待に達はざりしを以て、西園寺内閣は、愈々持久の決心を固めたりしと覺はしく、内外に失ひたる信用を恢復せんとして、其計畫に怠りなき有様なりき。或は鐵道特別會計法を以て、鐵道政策に一改善を企てんとしたる如き、一度は打切りを聲言したる行政整理を復活して、輿望に副ふの計に出でつゝありし如き、第一回の國庫債券償還も不手際ながら、着々進行の途に就き、獅子身中の蟲たる觀ありし水町大藏次官を罷め、或は日本銀行にも何等かの改善を加へんとしたる如き、若くは外交官の大更迭を行ひ、樺太長官以下地方官の更迭を斷じ、又時ならぬ時に社交的大宴會を催はしたる如き、未だ特に感服すべくものなきも、如何にもして不人望の勢を轉ぜんとし、内閣の持續に苦心しつゝある状、蔽ふべからざるものありき。故に政友會の如き、世上の政府反對の聲、總選舉前に比して、尙一層勢熾を加へたるに拘はらず、勇氣益々昂がり、得意満々たりき。然るに、危險なる暗流は、世間(政友會を含む)の氣付かざる間に、頗る猛烈なる勢を以て西園寺内閣に肉迫し、元來極

めて薄弱なりし根底を突壁の間に覆へし去り、一國を擧げて暫らくは呆然、茫然、開いた口を塞がらざらしためたり。

西園寺首相は病氣と稱して六月下旬以來、大磯に引籠り勝ちなりしが、超えて七月三日に至り、宛然引退説傳へられ、四日午前参内、果して其事あり。首相は御前に呎尺して病軀大任に堪えざる趣きを言上して骸骨を乞ひ、同時手許に取揃へありし各大臣の辭表を捧呈し、且後繼者には桂侯を奏薦して退出したり。

爾來政局の混沌たるもの旬日、十四日に至りて新内閣漸やく成立す。同日午前桂侯参内、組織の次第を伏奏して直ちに御裁可を得、午後更らに各員を率ゐて参内、左の通り親任式を行はせらる。

内閣總理大臣兼大藏大臣	侯爵 桂 太 郎
内務大臣	男爵 平 田 東 助
司法大臣	子爵 岡 部 長 職
文部大臣	正四位 小松原英太郎
農商務大臣	男爵 大 浦 兼 武
逓信大臣	男爵 後 藤 新 平
陸軍大臣(留任)	子爵 寺 内 正 毅
海軍大臣(留任)	男爵 齋 藤 實

而して外務大臣は駐英大使伯爵小村壽太郎之に任ずるとに

内定し、其歸朝就任まで(七月廿七)寺内陸相臨時外務大臣兼任を命ぜられたり。同時に前大臣は何れも依願官を免ぜられ、西園寺侯に對しては、特に前官の禮遇を賜ふべき御沙汰あり。同日又法制局長官内閣書記官長の更迭あり。柴田家門内閣幹長に安廣伴一郎法制局長官に新任す。引續き内務、外務、大藏、文部の各次官も更迭し、又警視總監には龜井英三郎新任し、警保局長には有松英義新任す。

此更迭の經過に關して、新内閣首相桂侯の談する所(國民新聞)に曰、自分は近年二回ほど大患に罹り、今日とても其他康末だ全く恢復したりと云ふにあらず。然るに過日西園寺侯より面會致したけれど病中にて訪問する能はず、差支なければ來臨を請ふとの事にて、予は同侯の病氣見舞旁々之れに赴けり。そは三日の午前なり。然るに西園寺侯は、病氣にて此儘推想せば或は内閣の統一を缺く虞あり、依つて骸骨を乞はんと欲す、就ては予を後任者に奏薦すべし云々の談あり。予は茲に於いて侯の辭職は已むべからざる事として同意を表したれども、後繼者云々に至つては自から別問題に屬するを以て、固より決答すべきものにあらずと信じ、其旨を告げて歸れり。翌四日西園寺侯は骸骨を乞ひ併せて予を後繼者に奏薦したる由なるが、夫れより特使韓國に赴き伊藤公に御諮詢あらせられ、其歸來と同時に、山縣公侯井上侯にも同様御諮詢あり

り、斯くて十二日御沙汰に依り参内し、親しく内閣組織の使命を拜し、併せて各元老の復奏何れも手を奏薦したる旨を拜承したり。茲に於て予は謹んで聖旨を奉じ、予の自ら信ずる所を以て施政の方針を定め、組織の事成りたるを以て十四日には之を上奏し御裁可を経て、其午後内閣の成立を告げたりと。即ち桂侯言ふ如くんば、侯は後繼内閣組織の使命を奉じたる後二日にして、早くも其新内閣を組織したる次第なるが、而かも世間大命の侯に下ると稍や遲きの感をも爲し、四日西園寺内閣總辭職以來、十二日桂侯大命を拜受するに至る約一週日の間に於て、揣摩百端、或は桂内閣の成立難を傳へ、或は山本内閣、寺内内閣説なども出て、或は伊藤公の出馬を説くもありて紛々停止する所なかりき。

切て西園寺侯辭職の原因は、右桂侯の談にもいふ如く、又西園寺侯が御前に奏請に及びたるが如く、病軀劇務に堪えずといふに在りて、總辭職の準備全く成りたる三日午後八時、西園寺侯が駿河臺の自邸に政友會の各領袖を招き、其決心願末を披露したる談話の要領を五日政友會在京代議士會に於て長谷場同會幹事長より報告したるものに見るも、畢竟其意に過ぎず。即ち侯元來健康といふべからざるに、頃來更に肝臓の疾患あるとを發見し、三箇月前醫師の既に閑地の静養を勸告したる程なりしも、當時諸大問題の未だ解決を告げざるも

の少からず。且つ總選舉も目前に迫り居り、遽かに其職を去るを容ざる事情よりして今日に及びたるも、最早來年度の豫算の方針等大問題は概ね決定を告げ、國務の進行上何等の阻礙なきに至りたる故、之を好機として桂冠し、専ら静養の決心を爲すに至りたる。第なりといふに在りき。

果して如斯くなれば、西園寺侯の辭職は所謂圓滿辭職、若くは功成り名遂げての芽出度き隱退ともいふべきものにして、必らずしも辭職を要したるにあらず、辭職せざるも別に静養の途あるべく、又辭職するとしても、其後繼者を推薦するに自から其人あるべく、其平生の政治主義及系統よりしても、到底政敵たるを免れざる桂侯に内閣を明渡さるべからざる所以なかるべし。故に實際病氣に相違なかりしも、單に病氣とのみにては、辭職の原因極めて薄弱なるを免れず。而かも侯は辭職を以て已むを得ざる勢となし、又最も至當の措置したり。而して其決意の重きや、原、松田兩相が大磯に侯を訪ふて熱心之を諭さしめんと努めたるも、侯は斷乎として斥け、駿河臺參集の夜も、某領袖より内閣の總辭職は全國數十萬の黨員に抄らざる憂慮を與ふるとなれば、既に辭表提出後なら致方なきも、明日提出とのとならば、幸に今一應再考せられたしと泣陳したるに對しても、侯は今更再考の餘地なしと答へて、斷乎として動かざりしといふ。其率乎たる決心

に對して翻つて其原因を觀る、輕重の差餘りに甚だしきに、何人も疑なきを得ざるなり。病氣以外更に一層込入らるる何等かの原因なかるべからずと想はしむるは、勢ひ免るべからざる所。殊に況んや侯の一進一退の爲、直接重大なる影響を蒙る政友會員に於てをや。されば政友會員中には、右の報告を受くるや、言ふべからざる不快の氣に襲はれ、飽くまで辭職の真相を訂さんと教團くものあり、多數の賛成を得て辭職原因調査委員と稱する前代未聞の委員を設くるに至りたるが、如斯きは黨の總裁たる西園寺侯の信任を議すると同様、會の面目にも關する次第なればとて、後ちに、幹部に慰撫せられ、實際の調査には着手するとなくして、立消えとなりたり。

事情如斯くなりしを以て、辭職の眞因に關しては、世上多くの揣摩臆測を傳へたり。其最も奇怪なるものに曰く、辭職の眞因は全く病氣の故にあらず、前内閣派(桂派)が政友會の順境を妬み、山縣公を通じて、政友會は西園寺首相を初め、原、松田等すべて佛學系統に屬し、隨つて共和政策を喜ぶもの等にして、近時新聞に於ける社會主義無政府主義者の取締を緩漫に付するも、全く之が爲めなるのみならず、多數黨たる政友會議員の議決せる新刑法の如きも社會主義を含有し、又近時教育上に於ても同主義の加味し來りたるは、全く我國

體を傷くべき危険の政策なりとて、恐れ多くも畏れ遠くへ上奏に及びたる結果、這回の政變を見るに至りたるものなりと。果して斯かる事實ありたるや否、確證を得ざるも、世間之に信を置くものも甚だ少からざり。

要するに眞相混沌、今日に至るも明かならず。或は西園寺内閣の覆滅を憐みて「毒殺」と評したるものもあり。

### 五 新内閣の財政策

新内閣は成立と共に、堂々政綱を發表すべしとの噂あり、桂侯の平生に似合はしからぬと思はれたるが、果して遂に其事なく單に風説に止まりたり。桂侯又此風説を否定して語つて曰く、予は今茲に政綱などと稱して世に發表するを好まざ、事實が追々如何なるものなるやを證明するの時期あるべし。但だ列國と最も平和を厚くし、何れの政黨に對しても一視同仁、偏倚する所なく、財政を按排して國家經濟の發展を圖るに於て微力を盡さんとは予が不肖を顧みず期する所也(國民新)と。其言簡なりと雖も、以て外交、財政、及對政黨策の要を盡す。以て新内閣の政綱と見るも可なり。外交の平和を主とすべきは言ふに及ばず、新内閣に限らざるが、平生武斷主義者として知らるる桂侯に在つては、又特に此言なかるべからず。政黨の一視同仁は、依然たる超然主義よりして又至

極當然の聲明とすべく、而して財政を按排して國家經濟の基礎を固むるといふ所に、新内閣政綱の全幅の精神は籠もる。何となれば、西園寺内閣の不人望を重ね、遂に憐むべき滅落を見るに至り、桂内閣を容易に再興せしむる機會を得せしめたるは、畢竟此財政問題と、國家經濟問題に對する西園寺内閣の按排宜しきを得ざりし故なり。而して何の據る所ありしかの明かならざるも、桂内閣は西園寺内閣よりも、此點に於て優れる能力を有すと信ぜられ、此期待あるが爲めに、桂内閣の成立は、先づ一般に歓迎せられたる方なり。故に桂内閣成立の性質よりしても、財政の按排、經濟の發展に最も重きを置かざれば、存在の理由立たざればなり。隨て桂侯も此黨に自任し、成立勿々、御用記者の筆を假りて、非公式的に、特に其抱負の存する所を極めて簡單明白に言明したるものと知らる。

爾來新内閣は鋭意財政の按排に著手し、八月廿八日の閣議に於て其綱領を決定し、間もなく之を發表したり。其要點を擧ぐれば、(一)繼續事業の繰延、(二)公債政策の中止、(三)國債償還額の増加、(四)歳入自然増加見積放棄、(五)鐵道會計の獨立等にして、歳出入の均衡を得せしむると、公債の整理を以て二大眼目とす。即ち(一)に對しては、前議會に決定したる六年計畫を多少變更し、既定繼續費及臨時軍事費繰

越額約一億七千八百餘萬圓を向ふ十二年間に割當て繰延ぶると。(二)臺灣事業公債の外、(後方に河川改修、海防、製鐵事業等の此金額は一億六千八)從來公債を財源としたるものは爾後一般財源の支辨に移し、新規公債の發行を當分廢止すると。(三)國債償還高は是迄三千七百萬圓なりしを、今後は五千圓以上とする。(四)從來の計畫にては歳入の自然増加を見込みたるも今後は歳入の確實を圖り、又餘裕を後年に存する爲、之を見積らざるとすると。(五)鐵道の經營は今後一般との關係を斷絶し特別會計とし、又一般財政計畫の主旨に由り當分公債の募集を見合はすと(而して其缺は預金部運用資金よりの借入金で以て充つ)にして、公債償還額増加の外は、別段前内閣の施設と大差なく、公債募集の中止といふも、之れは中止と否とに係はらず、實際不可能に屬するを以て、前内閣と雖も四十二年以降の財政を按排する爲めに、自然此に出づるの必然なりしなるべく、又之を中止したりといふも、鐵道特別會計といふもの依然として實質公債に變らざる預金部借入金を財源とする故、精確にいへば公債政策依然存在する次第なるが、此計畫は不思議にも實業家殊に銀行家の歡迎する所となり、新内閣に望を囑するの益す偶然ならざるを誇るに似たり。隨て實業出身の代議士が相率ひて戊申俱樂部と稱する如きものに割據するに至りたるなれ。

### 六 大博覽會の延期

桂内閣は右の財政整理の綱領を發表する數日前、來四十五年に開設すべき日本大博覽會を來五十年まで延期するの議を閣議に於て決定したり。財政上の都合、到底豫定までに其準備を調ふる能はず、延期の已むを得ざるに至りたりとの理由に依る。而して其準備を危ぶみたるは、主として鐵道の完備旅館の設備の二點に存し、此等の設備不完全なる爲め、東洋初めての准萬國博覽會に不手際を來し、嗤笑を列國に招かんよりも、十分準備の餘裕を與へて、今上陛下踐祚五十年を以て堂々たる萬國博覽會を開設するに如かずといふに在りき。此事世上に傳はるや、四十五年を期し、一般經濟界の景氣を恢復せんと待設けたる市民、商工業家、及既に博覽會敷地を中心として諸種の計畫を立てつゝありたる人々の大恐慌を招き、東京市及東京實業組合聯合會は反對運動の中心となりて熱心に其議を翻へさしめんとしたるが、政府は一切頓着せず、八月三十一日、在京大博評議員二十餘名を農商務に招集し、評議にあらず、決然たる態度を以て、大博延期の議を公宣したり。

政府の大博延期を決するや、如斯く單に評議員にも諮らざりしのみならず、當事者たる總裁(閣院宮殿下)、會長(金子

男)等にも豫め一言の相談もかけず、全然專斷に出でたる爲、政治的に反對を唱ふる聲も亦一時響々たりき。然れども政府は既に贊同を表したる列國、殊に恰かも委員長來航の途に在りし米國政府に對しては、豫じめ鄭重なる通牒を發し、其同意を求めたり。而して米大統領の通牒頗る感服を極めしかば、政府は之を早速反對者の頭上に閃めかし、以て恰好なる辯疏の料としたり。而して反對運動は、結局其効を奏せざりき。金子會長は延期公表三日目に職を辭して去り、東京市は既に納附したる百三十七萬圓の下戻を迫りて之を諾せしめたり。

超えて十月五日に至り、政府は又々世間を騒がすべき一事を企て、之を斷行したり。競馬に默認したる馬券發行の禁止令是なり。單に禁止したるに止らば、元來疾くに弊害を認められ、識者の憂慮せる問題なれば、其斷行は寧ろ政府の手柄となるべき次第なりしかど、其禁止の仕方甚だ拙劣、愚劣を極めたりし爲、直接大影響を被れる競馬業者も尙ほ堂々政府の施設を非議する口實あらしめ、又世論の喧嘩を招けり。其次第を略叙すれば、之より前、秋季劈頭の競馬會を鳴尾に開催するや、例に依て會社と馬券買ひとの間に醜惡なる紛擾を醸し、爲めに該地方司法官の檢舉となり、事件の進行に隨ひ其影響する所頗る重大ならんとす。茲に於て政府も默視す

る能はず、多くの新聞紙亦筆を極めて政府の斷乎たる措置に出でんとを通る。此に於て競馬業者は何れも秋季の開催目前に控へて頗る當惑し、政府の意向を漏らさんと望みたるに、十月一日に至り、馬政局は、各競馬會社に諭達して、從來の方針に據つて處理すべきに依り、豫め届出の開催期日等を變更するなく開催して可なりとの保證を與へたり。當業者爲めに愁眉を開き、専ら従前通り開催の準備を進せしめつゝありしに、超えて五日、政府は掌を反へすが、如く眞向正面より此禁止令を浴びせかけたりしなり。當業者の狼狽知るべし。

馬政局も亦禁止の爲めに、大に動搖し馬政局長の更迭となれり。

### 七 大詔の煥發

十月十三日附、十四日官報に於て、左の詔書を宣布せらる。

詔書

朕惟ふに、方今人文日に就り月に將み、東西相倚り彼此相濟し、以て其福利を共にす。朕は茲に益々國交を修め友義を悼し、列國と共に永く其慶に頼らむことを期す。顧みるに日進の大勢に伴ひ文明の惠澤を共にせむとする、固より内國運の發展に須つ。戰後日尙淺く庶政益々更張を要す。

宜く上下心を一にし、忠實業に服し、勤儉産を治め、惟れ信、惟れ義、醇厚俗を成し、華を去り實に就き、荒怠相賊め自強息まざるべし。

抑々我が神聖なる祖宗の遺訓と、我光輝ある國史の成跡とは、炳として日星の如し。寔に克く恪守し淬勵の誠を輸さば、國運發展の本近く斯に在り。朕は方今の世局に處し、我が忠良なる臣民の協贊に倚藉して、維新の皇猷を恢弘し、祖宗の威徳を對揚せむことを庶幾ふ。爾臣民其れ克く朕が旨を體せよ。

後に世上成申詔書を拜稱するもの是なり。國家非常の際若くは或特別の場合に於て閣臣(稀には議會)の奏請ある時に發せらるゝ勅語及詔書は、其發表突然なるも、之を擁護して直ちに其由來を諒解するを得、聖旨の要點何れに在るかも明らかかに解せらるゝを常とするが、今次の大詔は其煥發突然なると共に、現下特に國家人民の利害休戚を繋ぐる問題なく、時局固より安泰無事にして非常の時にあらず、深遠なる聖旨のほど亦頗る多岐に亘りて、其要點何れに在るかの容易に解せられず、畏れ多くも之が煥發を奏請し奉れる輔弼宰相の誠意何れに在るかを惑はしむ。故に之を拜戴せる者の見解一ならず、或は列國殊に恰かも來遊の途上に在る米國艦隊に對して、平和修交の聖旨を示し給ふ御趣旨ならんといひ、或は



勤儉の御布令といひ、或は特に風紀の弛廢を軫念せらるゝに出づと爲す。凡そ勅語、詔書の類にして、此詔書位、區々の見解を招き、國民に疑惑を起さしめたるにあらず、是れ識者の恐懼して措く能はざりし所なり。面かも當面の責任者たる政府は、努めて此疑惑を解かんとせず、特に詔書の御趣旨を説明したることなく、其奏請と、御趣旨普及と、共に甚だ誠實を缺きたり。されば地方に在りては、極端なる檢約令を布き、父兄の眉を蹙ましたる教育家も出て、常識を逸したる地方官の訓令など出て、甚だ威服しがたき奇話を生せしむるに至りたり。然れども爲めに、從來よりも稍や眞面目に社會風教の問題が論議せらるゝに至りたるは、喜ぶべき現象にして、此點に於て、當局者が此詔書を奏請したる趣旨幾分相立たるにあらず。内務當局者は特に之を風紀振奮の上に乗算し、殊に勤儉貯蓄の風を鼓吹するに努め、二宮尊徳の報徳教の宣傳などに従事するに至りぬ。

西園寺内閣倒れ、桂内閣成立して以來、政治上の施設として、特に肥すべきは、概要以上の諸點に盡く。

## 第二章 外交

### 一 辰丸事件

日清間の懸案は、前年來何程も片付かず、停滯不振を極めて、不評判なりしが、此不評判をして更らに不評判ならしめたるものに、辰丸事件あり。

事件の概略は、神戸安宅商會の持船に第二辰丸といふがあり、二月五日清國澳門商人の注文に依り、モーゼン銃若干挺、彈丸若干發及石炭雜貨を積載して澳門の海面に現はれたるに、時しも天候險惡にして、容易に港内に入るを得ず、已むなく投錨したる海域は、澳門領域にあらず、轉錨せんとするも波浪高きに加へ水深浅かりし爲め海面の靜穩と滿潮時を待つととし。一時其處に假泊したり、然るに此時何處よりともなく清國砲艦三隻及武裝せる税關汽艇一隻現はれて該船近く包圍形を爲し、其旗艦とも覺ぼしきものより、清國水師參謀吳某なるもの其部下と漢人税關吏等數名を隨へて、汽艇を飛ばして該船に臨み、武器積載の有無を取調べ、武器を積載するに拘らず、清國領海内に投錨するは不法なり、既に此不法の投錨を爲すからには、荷揚の目的ありしに相違なし、是れ明らか日清條約に抵觸するものなれば、本船を廣東に引率

すべしとし、艦長言を盡して其全然否らざる所以を辯じたるも、清將等頑として聽かず、結局強制的に黃浦へ廻航するの餘儀なきに至りしが、時既に午後三時を過ぎ(六日)、之よりスチームを焚き出せば、出航は夜に入り、殊に廣東河口の淺瀬危險にして潮時の都合も悪く且つ海圖もなければ、翌日未明迄出航を延期せんことを艦長より清將に懇願したるも、彼等亦之を聽かず、然らば我方にて運轉すべしとて、艦長に迫るに日本國旗を撤去せんとを以てし、艦長怒り應ぜざるや、彼等は無禮にも擅かに帝國國旗を下ろし代りに清國國旗を以てしたり。斯くて辰丸は廣東河口津西附近まで拉し去られ、其處に拘禁同様の侮辱を受けた。

蓋し當時南清地方に於て革命的運動の勢焰頗る高く、廣東地方に於て殊に其危懼ありしかば、地方官憲の神經頗る過敏となり、辰丸が少なからぬ武器を搭載して澳門に向へるを聞き、必然革命黨に密かに武器を供給するものと妄斷したる結果、此暴狀無禮に出でしなるべし。故に問題は甚だ單純にして、之を解決する左程に困難ならず。然るに我外務當局者は不手際にも之を簡單に解決する能はずして、國際間の面倒なる問題たらしめ、一時は最後通牒的の言議を弄するに至らしめ、約一ヶ月半の日子を費して、漸やく之を解決し得たり。我要求左の如し。

- 一、清國政府は日本國旗引卸しの件に關し、辰丸碇泊地附近に於て日本領事立會の上、清國軍艦及日本國旗を掲げ、軍艦砲を發して陳謝の意を表し、不都合の官吏を處罰すること。
  - 二、清國政府は直ちに辰丸を釋放すべしと。
  - 三、清國政府は辰丸抑留の爲めに生じたる損害を賠償すべしと。
  - 四、清國政府は辰丸抑留に關し、事實調査の上不都合ありと認むる官吏を處分すること。
  - 五、辰丸搭載の媽港行武器彈藥は、清國政府にて其積入後の成行を懸念し之が買求を希望する故、日本政府は好意を以て買収せしむること。
- 清國政府は凡て之を承諾し、謝罪禮砲、辰丸釋放のとは三月十九日を以て實行せられたり。
- 此事件紛紜中、廣東商人の對日本ポイコット行はれ、殆んど南清方面の我對清貿易を途絶せしめたり。清國官民が帝國の誠意を解するに至らず、兎角惡感情を潜むる、殊に遺憾とすべく、外務當局者は人を代ゆるも、此點に就て年を終るまで、何等の得る所なく、ポイコットは一張一弛尙ほ其迹を絶たず。
- 事情如斯くなるを以て、前年來の日清間の懸案は鴨綠森林

問題の外、一も解決せられたるものなし。即ち懸案の儘にて後年に持越したる問題左の如し。  
新法鐵道布設問題、關東州製鹽問題、郵便條約問題、電信問題、間島問題、北滿稅關問題。

### 二 對米外交

對米外交は頗る賑かなりき。先づ五月五日に日米仲裁條約の締結あり、從て同十九日に清韓兩國に於ける發明、意匠、商標及著作種の保護に關する二個の日米條約の締結あり、續て十月米國太平洋沿岸商業議會代表者約五十名の來遊あり、續て米國艦隊の來訪あり、皇室を初め官民上下の歡待優遇懇切殷勤を極め、終りに十二月卅日を以て日米覺書所謂日米協約の交換を見るに至る。右の内仲裁條約及覺書の全文を左に録す。

#### ▲日米仲裁條約

日本國皇帝陛下及亞米利加合衆國大統領は、千八百九十九年七月二十九日海牙條約に締結せられたる國際紛争平和臨時現條約第十九條に依り、各締約國は仲裁裁判に付することを得べしと思惟する一切の問題を該裁判に付せんが爲、協定を締結するの權利を保留したることに鑑み、兩國間に仲裁裁判條約を締結することに決定し、之が爲に日本國皇帝陛下は米國駐劄特命全權大使正三位勳一等男爵高平小五郎を、亞米利加合衆國大統領は合衆國國務大臣エリヒュームトを各全權委員に任命せり。因て各全權委員は互に其委任状を示し、其良好妥當なるを認め以て左の諸條の約條決定せり。

第一條 法律問題又は兩締約國間に現存する條約の解釋に關し、外交上の手段に依り處理すること能はざる紛議は、千八百九十九年七月二十九日の條約に依り、海牙に設置せられたる常設仲裁裁判所に付せらるべきものとす。但右等の紛議にして兩締約國の緊切なる利益獨立若くは名譽に關し、又は第三國に關係ある場合は此限に在らず。

第二條 常設仲裁裁判所に訴ふる各場合に於て、兩締約國は必らず先づ其係争事件の趣旨、仲裁裁判官の權限並仲裁裁判部の構成及手續に關し定むべき期限を明瞭に確定したる特別契約を締結すべきものとす。

該特別契約は亞米利加合衆國に於ては、大統領に於て上院の協贊を経て之を締結するものとす。

右契約は文書の交換に依り、兩國政府の確證を経たる場合にのみ約束力を有するものとす。

第三條 本條約は、批准交換の日より五箇年間效力を有するものとす。

第四條 本條約は兩締約國に於て之を批准し、其批准は可成速に華盛頓に於て交換すべし。(以下略)

#### ▲日米交換の覺書

##### 日本政府の覺書

以書東啓上候、陳者先頃來閣下と本使との間に數次の會見

を遂げ意見を交換致候結果、日本國及合衆國は太平洋方面に於て本國より隔在する重要な島嶼の所領を保存するものに有之、兩國政府は同方面に於て共通の目的及旨意を有すること明瞭と相成候。

帝國政府は該目的政策及旨意を眞率に表明するは、常に日本國と合衆國との間に久しく存在したる友好善隣の關係を鞏固ならしむるに至るべきのみならず、又以て大局の平和を維持するに資することを信じ、該共通の目的政策及旨意を認むる所の左記の綱領を閣下に提出すべき旨、本使に訓示有之候。

一、太平洋に於ける兩國商業の自由平穩なる發達を獎勵するは、兩國政府の希望なり。

二、兩國政府の政策は、何等侵略的傾向に制せらるることなく、前記方面に於ける現状維持及清國に於ける商工業の機會均等主義の擁護を目的とす。

三、從て兩國政府は相互に前記各方面に於て、他の一方の有する所領を尊重するの強固なる決意を有す。

四、兩國政府は、又其權内に屬する一切の平和手段に依り、清國の獨立及領土保全並同帝國に於ける列國の商工業に對する機會均等主義を支持し、以て清國に於ける列國の共通利益を保存するの決意を有す。

五、前述の現状維持又は機會均等主義を侵迫する事件發生するときは、兩國政府は其の有益と認むる措置に關し、協商を遂げんが爲、互に意見を交換すべし。

若し前記綱領にして合衆國政府の見解と一致するに於ては、之に對する閣下の確證を得度候。

本使は茲に閣下に向て重て敬意を表し候敬具。

一千九百八年十一月三十日

在華盛頓日本帝國大使館に於て

日本帝國特命全權大使

男爵 高平小五郎

北米合衆國國務卿エリヒュームト閣下

##### 米國政府の覺書

以書東啓上候、陳者先頃來本官に於て數次閣下と會見し意見を交換せる結果、兩國政府の太平洋に於ける政策に關し双方の認識せる所を開陳せられたる本日附貴東正に領收致候。

右双方認識の表明は能く兩國の親善なる關係に適應し、且兩國政府が極東に關し從來累次聲明せる協同の政策を約述互認するの機會を與ふるものにして、合衆國政府の歡迎する所に之候。

茲に合衆國政府を代表し、閣下に向て左記兩國政府の宣言を確證するを得るは本官の欣幸とする所に之候。

(以下日本政府の覺書と同文なり)

本官は茲に閣下に向て敬意を表し候敬具。

一千九百八年十一月三十日

在華盛頓國務省に於て

北米合衆國國務卿 エリヒニールト

日本帝國特命全權大使 男爵 高平小五郎閣下

日米兩國政府間、具體的に友好交換の旺んなりしと、蓋し近年其比を見ざる所に屬す。幾分反動的現象に屬せざるに非ざるも、要するに兩國の利益關係が、此數年來實質的に緊切の度を加へたるの致す所たるは、疑ふべくもあらず。右の外米艦來航の際、彼我兩元首の間に交換せられたる歡迎勅語及謝電の如き、最も友好善隣の誼に溢れたるものなりき。然れども尙ほ米國民一部の排日感情を一掃するに足らず、米國政府の友誼と米國民の對日感情との間には、尙ほ多くの懸隔あるを免れざりき。たえず物議の原因となる移民問題の如き、依然解決せられず、只我過ぎたる抑損の政策に依て無事なるを得しのみ。

英、佛、獨、露、其他列國との關係は、極めて無事の状態に在り。七月頃三重丸露國艦隊加沿海に於て密獵嫌疑を受け拘禁せられたる所ありしも、程なく圓滿に解決せられたり。平和會議大使の一行は一月中旬無事に歸朝し、十月には清國奉天撫唐紹儀米國に使用する途次來朝して、我外交團の歡迎を

受けたり。又明治四十三年にて現行條約廢棄となるを以て、政府は之が改正準備委員を設けたり。

### 三 外交官の更迭

六月六日西園寺内閣の下に、外交官に大更迭を行ひたり。即ち外務次官男爵珍田捨己は駐獨大使に、通商局長石井菊次郎は次官に、駐清公使男爵林權助は駐伊大使に、英國大使館參事官伊集院彦吉は駐清公使に、政務局長山座圓次郎は英國大使官參事官に、外務省參事官倉知鐵吉は政務局長に、總領事萩原守一は通商局長に何れも交迭し、井上駐獨大使は待命となり、前駐米大使男爵青木周藏は樞密顧問となれり。後桂内閣成立して小村駐英大使外務大臣たるに及び、前外務大臣加藤高明駐英大使に任ず。

## 第三章 統監政治

七日伊藤統監、此年に入りて二度目の歸朝を爲せるとき、往訪の新聞記者に語つて曰、凡そ韓國に對する内外の批評は善惡の二面を出づる能はず、即ち統監の施設を以て善良なる措置なりと認むるものに非ざれば、韓民を害ふものなりと論ず、予の立脚地に於ては其何れに出づるも之を抑壓するを

欲せざるなり、然れども局外の批評が屢次統監の施設を妨げ

韓國民を誤りたる例なしとせず、而かも予の韓國民に對する態度は公明正大にして彼等を偽るものにあらず、彼等をして日本の誠意を疑はしめざらんとするに在るが局外者の之を見るものは懷柔に過るとなせり。然れども韓國民に對し峻嚴を以て臨まんに、直ちに日本を以て韓國を害ひ其國を奪ふものとして延て統監府の施設の阻害を被むる事となるべし、故に曰く韓國を破ぶるものに韓人にして日本の政策を害ふものは日本人なり云々と。統監の通懷めきたる談話に見るも、統監政治が大體に於て相變らず一所を回轉しつゝあるに過ぎざるを知るべし。統監の施設を諒とするものはある一方に於て、全然之に感服せざるものありて、依然善惡兩極端の大體論ある外、中間施設の見るに足るなきを知るに足るべし。殊に著るしきは、統監自から其政策を最善最良のものとして確信し、全力を傾注し居れりと確信し、惡くいはるゝ一面あるは、畢竟、韓國民と日本國民とに歸するとし、毫も自から顧みるの意なき驕慢なる態度とす。此驕慢なる態度あるが故に、施設の得喪正確に公の眼中に映せず、統監政治ありて以來、既に四年に及ぶ、特に進境を見ざるは識者の遺憾とする所なり。單に對韓施設に於て然るのみならず、統監府上級官吏の甚だ不評判にして、屢々あるまじき放縱淫逸の醜聲を耳にす

る如き遺憾も亦尠からざりき。

年來地方政治の障害となりたる暴徒跋扈は、秋來漸く鎮靜の狀あり、此一事は稍や跨るに足るものなからず。蓋し彼等の暴動息まざるは、畢竟生活問題の爲めなれば、統監府は此點に留意して、衣食の道を開くの工夫に出て、同時統治機關として四千人の韓人を統監府に使用し、補助憲共の任務を與たる如き、其最も有効なる手段なりしに似たり。

六月六日に韓國内閣の改造あり、内外商工部大臣宋秉駿内務大臣となり、内務大臣任善準は度支部大臣となり、法部大臣趙重應は農商工部大臣となり度支部大臣高永喜は法部大臣となり、讀て各道觀察使にも更迭を行ひ、十六日に至りて又侍從院卿閔炳奭を宮内大臣に任じ、皇后宮大夫尹晉榮を侍從院卿に任じ、宮内府大臣李允用の官を免じたり。又前記大臣の更迭と共に、内務次官木内重四郎は農商工部次官に、農商工部次官岡喜七郎内務次官に轉ず。蓋し此改造は、統監の信賴最も厚き爲め、内閣切つての最權勢者たる宋秉駿を中心とし、其手腕に依つて地方政治を刷新改善せんとする趣旨に出たり。

前年制定したる司法制度に依り、法官官制を制定し、此年四月大審院長檢事總長等の諸官任用せられたり。重なるものは大審院長渡邊暢(東京地方裁判所長)、同檢事總長園分三亥

(大阪檢事正)、京城控訴院長城數馬(東京辯護士)、同檢事長世々裕次郎(京都檢事正)、京城地方裁判所長中村竹藏(地方裁判所判事)、大邱控訴院長大井康太郎(廣島地方裁判所判事)、平壤控訴院長永島殿(和歌山地方裁判所判事)等。

四十一年韓國歲出豫算は經常費は千三百九千三十一萬圓、同臨時費六百六十九萬七千四百二十二圓にして、其内譯は皇室費百五十萬圓、内訳三百五十二萬八千六百餘圓、度支部六百二十五萬二千八百餘圓、内閣費十一萬三千餘圓、會計検査局一萬八千八百餘圓、内閣徵稅費八十九萬七千六百餘圓、國庫豫備金百五十萬圓、軍部百十六萬八千二百餘圓、學部二十九萬八千七百餘圓、臨時部内訳三十六萬七千九百餘圓、同度支部五百二萬八千五百餘圓、同學部十五萬四千餘圓とす。而して歳入臨時部中には日本より無利息借入金五百二十五萬九千五百百八十圓起業資金より借入金三百六十萬三千四百四十四圓を計上す。日本政府の借入金と稱するは、四十年より向ふ六箇年間政費補助として總額一千九百六十八圓を韓國政府に立替ゆるととなり、其四十一年度支出額に屬す。統監部豫算は前年と別段の變りなし。

十月二十一日統監府總務長官鶴原定吉依願其職を免じ(後ち貴族院議員に勅選せらる)同參與官石塚英藏臨時總務長官事務を代理す。超えて十二月二十一日駐韓軍司令官陸軍大將

### 第四章 軍事

#### 一 陸軍

戰後陸軍の擴張に伴なふて諸般制度の改革行はれたるが、明治四十一年に入りては、先づ旅團司令部、要塞司令部、對馬警備隊司令部、臺灣陸軍部、戶山學校、騎兵實施學校、野戰砲兵射擊學校、射擊學校、陸軍士官學校、陸軍六週間現役兵等の諸條例が、一月二十九日を以て改正發表せられたるに始まり、二月には秋季特別大演習を攝河泉の地方に舉行すべきと確定し、同十四日附を以て與參謀總長は其の參加師團たる第四、第九、第十四、第十六の各師團に對し、大演習に關する一般方略、集合地點、參加人員其他輜重輸送に關する事項を内達せり。又同十五日八留米第十八師團騎兵第二十二聯隊兵舎竣工して、習志野に收容中の同聯隊全部は新兵舎に移轉しき。三月四日再び軍馬補充部、陸軍兵器廠、砲兵工廠、陸軍運輸部、陸軍會計監督部、同衛生材料廠、陸軍被服廠、陸軍糧秣廠、陸軍衛戍病院、陸軍經理部、陸軍軍醫部、獸醫部、陸軍法官部、陸軍經理、軍醫、獸醫學校等の諸條例の改正及制定を見しが、そは主として平時編制の改正に伴なふ結果なるが如し。同十八日歩兵大佐野口坤之氏陸軍少將に任じ、步

子爵長谷川好道本職を免じて軍事參議官に補せられ、第三師團長陸軍大將男爵大久保春野其後を襲ふ。長谷川大將は去三十七年九月遼陽戰の終局と同時に、近衛師團長より最初の韓國駐劄軍司令官に轉じ、今日に至るまで約四箇年半の間、終始一日の如く其職務に勵精し、屢々難局に處して、寛嚴常に宜しきを得、皇室を初め韓國の上下に宗主國の威信を植ゆるに與つて最も力ありし人、保護國統治の初期に於て最も功勞多く、永久記憶さるべきもの一人たり。

東京御在學中の韓國皇太子殿下は、學業に長足の御進歩あり、體資益す御健全、我皇室の御教養のことに意を用ひさせらるゝと亦感戴を極む。此點に關しては、韓國皇室も殊の外御満足にて機會ある毎に、感謝の意を表せらる。

其他統監府外務顧問スチーブソンの賜暇米國歸省の途次悲慘の横死を遂げたるを、韓國官制の改革、東洋拓殖會社の成立、日本居留民團長を官選にしたるをあり、後者に關しては統監府は在韓同胞の包圍攻撃を受けたり。

南滿鐵道經營は豫定計畫の幾分づゝ進行し居る外、特に駐すべきとなし、只鐵道男爵後藤新平の歸國行と、後ちに選任大臣に任じたる勢に依り、其監督權を通信省に移したると、副總裁中村覺公總裁となり、理事國新軍兵衛の副總裁となり、下級社員に稍や大任掛の淘汰を行ひたる等の二三事あるのみ。關東都府民政長官には、前文部普通學務局長白仁武新たに任す。樺太は民政官補瀨田將軍と熊谷本務官との間に懸念なる衝突を起し、其結果共に免ぜられ、爾後文官官制として福島縣知事平岡定太郎を以て之に任す。露海にては民政官官邸已病没し、警務部總長大島久滿次後任となる。又十一月盛大なる露海鐵道全通式を舉ぐ。

兵第十一旅團長に補せられしが、同時に陸軍少將多田保房、同原義成の二氏豫備に、同石原應恒氏後備を仰付けられぬ。四月六日より十一日まで師團長會議開催されしが、會議中殊に注意を惹起せし問題は、寺内陸相より嚴達したる競馬賭場に於ける軍事關係者の取締及社會主義の取締に關する二個の軍紀問題なりしが如し、此際亦た戰後軍制改革の必要上より西大將を委員長として設けられたる軍制調査會は、全部の調査事項終了して事務なきを以て解散を命ぜられたりき。次て五月八日大元帥陛下は宮中正殿に出御、新設歩兵第六十五乃至七十二聯隊、同騎兵第二十一、二十二聯隊に對し、軍旗親授式を行はせ給ふ。同月十一日より十四日に至る五日間、參謀本部に於て各師團參謀長會議あり、與參謀總長は新團隊配備、新管區改正(平時戰時)編成の施行並に參謀本部の編成改正、其他諸條例改正に關し、其施行等に就き訓示する所ありたり。次て二十三日陸軍の特命檢閱使任命され、黒木大將は第六、第十七、第十八師團特命檢閱使を、伏見大將宮殿下は第四、第十四、第十六師團及第十師團内地部隊特命檢閱使を、川村大將は第七、第八、第十五師團特命檢閱使を仰付けられ、同時に井口、藤井、松石の各少將は各屬員を拜命し、六月初旬に至りて是等特命檢閱使は、各自部署の地に向て出發し、軍紀の張弛、教育の精粗、動員計畫の完否其他を檢閲し、同

時に團隊長に對して意見を訓示し、漸く七月下旬其の使命を果して歸京したるが、超て八月八日伏見宮殿下を始め黒木、川村の特命檢閱使は參内し、天顏に咫尺して各師管下の實狀を伏奏しぬ。其前日に於て陸軍中將井上光、同大久保春野の兩男爵は陸軍大將に任ぜらる。同二十六日陸軍大將男爵大島久直氏は歩兵操典改正審査委員長に、同少將依田廣太郎同梅澤道治氏等を始め大中少佐十一人同委員を仰付けられたり。九月には駐韓第十三師團歸還し第六師團之に代りぬ。十月より十一月の間に於て全國各師團の機動演習は各別に舉行されしが、其中第四、第九、第十一、第十六の四箇師團は機動演習の終了するや、直ちに秋季特別大演習に参加し、攝河泉の廣原に於て龍驤虎鬪の大活劇を演出しぬ。先是、十月二十八日統監部職員には參謀總長奧大將、審判官福島、上原、大迫の各中將其他將官以下を始めとし、管理部長菊地步兵大佐、通報部長重見砲兵大佐、交通部長大澤少將其他各部職員任命され、次て十一月五日大演習兩軍司令部編制と同時に乃木大將南軍司令官に、秋山少將同參謀長に、伏見大將宮殿下は北軍司令官に、藤井少將同參謀長に、尙ほ以下の職員任命せられぬ。斯くて同九日 大元帥陛下には大演習御統監のため東京御發聲靜岡に御泊の上、十日大本營たる奈良俱樂部に行幸在らせ給ふ。當時北軍たる第九、第十六の兩師團、南軍たる

第四、第十一の兩師團は孰れも機動演習を終結して、豫定の地點に集合して全部の編成を告げたるの時なりき。而して九日既に一般方略の發表されたるが故に各軍は其部署に就き十日未明より戰鬪の端は開かれぬ。此日は奧參謀總長耳成山に登りて演習を統裁す。十一日より十三日に亘れる大活動は、大元帥陛下耳成山に行幸在せられて、御統監あらせ給ひぬ。此大演習中、十二日に至り乃木大將は南軍司令官を止め、井上大將之に代りて、戰局に一變轉を來したりき。而して十三日の慘澹たる白兵戰に於て、北軍の敵陣地占領と、南軍の潰亂して退却を開始したるに際し、演習中止の命は下り、次て耳成山の麓なる河合小學校に於て 大元帥陛下は兩軍司令官に拜謁を仰付けたる後、同校運動場に出御、參謀總長、侍從武官並に各皇族、大臣、元帥、將官等侍立の上、兩軍司令官をして各軍特別方略を朗讀せしめ、次て奧參謀總長をして演習各日に付き講評せしめ、終て優渥なる勅語を賜ひ、午後一時還幸あらせ給ひぬ。勅語は左の如し、

演習ノ細目ニ就テハ參謀總長ヲシテ講評セシメタリ更ニ之ノヲ概括スレバ其成績往日ニ比シ一層進歩セルヲ認メ朕之ノヲ嘉ニス然レドモ汝等治ニ居テ亂ヲ忘レズ益々奮勵日新ノ軍事ヲ研鑽シ以テ干城ノ重任ヲ完フセヨ

此日兩軍の編制は解かれ、次て乃木大將は閱兵式諸兵指揮官

を岡少將は同參謀長を仰付けらる。十四日朝大演習参加の各部隊は奈良街道に於ける閱兵式場に參集し、大元帥陛下の御親閱を受けぬ。式終りて 陛下には奈良行在所に還幸在せられたり、午後三時大演習後の大宴會は行在所正門より西方の芝原に開かれしが、斯くて大演習も終了を告げぬ。

猶十一月中に於て、第十三、十四、十五、十六の各師團兵及近衛師團の鐵道聯隊は、兵營の竣工したるを以て、孰れも新兵舎に移轉せり。超えて十二月十九日陸軍省、參謀本部、教育總監部等の官制改正されたるが、其改正の要點は、陸軍省に於ては、新に兵器局を置き、少將を以て局長に補し、其下に銃砲課及器材課の二課を設け、少中佐を以て其課長に補し、銃砲課は(一)兵器の制式支給交換検査と其に關する一切の經理事項、(二)要塞備砲工事に關する事情、(三)陸軍技術審査部、陸軍兵器廠、砲兵工廠及陸軍火藥研究所に關する事項を掌理し、器材課は(一)砲工兵の器具材料の制式支給交換に關する事項、(二)軍用通信用鐵道用及氣球用器具材料の支給及交換に關する事項、(三)前各號の經理並に検査に關する事項を掌理するとに制定され、參謀本部條例に於ては參謀本部次長を參謀次長と改め、教育總監部條例に於ては參謀長を廢し、之を教育總監本部長と改めたるに過ぎざるが如し。同廿一日陸軍將官親補式は舉行せられ、教育總監西大將、韓國駐劄軍司令官長谷川大將は孰れも本職を免じ軍事參議官に、東京衛

成總督川村大將は軍事參議官兼東京衛戍總督に、近衛師團長大島(久直)大將は教育總監に轉補し、上田中將近衛師團長に、上原中將第七師團長に、大久保大將韓國駐劄軍司令官に補せられ、少將神尾光臣氏は陸軍中將に任じ第九師團長に補せられ、第八師團長渡邊(章)中將は第三師團長に、下關要塞司令官山根中將は第八師團長に、第十一師團長土屋中將は第四師團長に、東京灣要塞司令官伊地知中將は第十一師團長に補瀬中將は由良要塞司令官に、内山中將は東京灣要塞司令官に、少將牟田敬九郎氏は陸軍中將に任じ下關要塞司令官に、落合少將は工兵監に、明石少將は韓國駐劄軍參謀長兼同憲兵隊長に、中村少將は交通兵旅團長に、工兵大佐阿部貞次郎氏は陸軍少將に任じ清國駐屯軍司令官に、砲兵大佐小原傳氏は陸軍少將に任じ對馬警備隊司令官に、柴少將は佐世保要塞司令官に、工兵大佐太田正徳氏は陸軍少將に任じ澎湖島要塞司令官に、小泉少將は臺灣第一守備隊司令官に、歩兵大佐森川武氏は陸軍少將に任じ歩兵第二十六旅團長に、松川少將は歩兵第六旅團長に、松石少將は參謀本部第一部長に、島村少將は歩兵第二旅團長に、歩兵大佐生井順造氏は陸軍少將に任じ歩兵第四旅團長に、林少將は近衛步兵第一旅團長に、岡少將は歩兵第二十九旅團長に、大島少將は參謀總務部長兼參謀本部第四部長に、大澤少將は參謀本部第三部長に各轉補し、第

九師團長塚本中將は休職仰付られ、川村益直、中田時愨の二少將は陸軍中將に任じ同時に豫備仰付られ、小野寺實、手島本善、本庄道三、江口昌條の四少將も豫備に、砲兵大佐馬淵正文、同鶴田正徳、同小野安堯、歩兵大佐菊池節藏、同藤見成一諸氏は陸軍少將に任じて同時に豫備に廻され、一等軍醫正村井菊之助、同市川廣助二氏は軍醫監に任じて同じく豫備仰付けられ、輜重兵監澁谷少將、重砲兵監豊島少將は陸軍中將に任ぜられたり。翌二十九日侍從武官々制改正され、侍從武官府制公布せられたるが、同時に第十五師團長陸軍中將男爵中村覺氏は侍從武官長に任ぜられぬ。尙ほ四十一年にありては、元帥陸軍大將野津道貫侯、陸軍大將井上光男、同岡澤精子の三大將を失いぬ。亦た我陸軍の厄年なる哉。

二 海軍

海軍にありては、一月十一日松島、殿島、橋立の三艦を以て練習艦隊編成され、海軍少將吉松茂太郎氏其の司令官たり而して少尉候補生百七十七名を分乗して、同二十五日横須賀抜錨、遠洋航海の途に上りぬ。二月二十日には大湊要港部參謀長海軍大佐矢島純吉氏は出雲艦長に轉補せられたるを始めとして、艦長以下の小異動發表せられ、三月に及びて海軍小演習を開始されたり、即ち有馬中將の率ゆる第一艦隊は鎮海

灣にて演習終了後、三月六日佐世保に入港し秋水補給を行ひて、十一日抜錨九州西南に遊弋し、日向灘方面より瀬戸内海方面に敵あるものと假定して、艦隊基本演習を行ひ、土佐沖より紀州沖を行動しつゝありしが、先是吳鎮守府に於ても統監山内長官監視の下に鎮守府艦隊臨戰準備をなし、又舞鶴より參加の鹿島及第十三驅逐隊は山田司令官の指揮によりて來り會し、十六日周防灘より豊後水道方面に出動して、第一艦隊と對抗せんとし、一方横須賀艦隊の八重山、鎮遠、高千穂及須磨の各艦も十一日より漸次伊勢灣に集中して演習を開始し、以て吳鎮守府艦隊に勢援を與へぬ、斯くて是等の艦隊と第一艦隊との對抗演習は、豊後水道方面に於て壯烈なる大活劇を演じたり。尙ほ三月には水雷艇小鷹、福龍、二十六號、二十七號、十一號、十四號、八號、九號の入隻除籍の結果、水雷艇隊の編制に變更あり、四月三十日彼の松島、殿島、橋立の練習艦隊は、マニラ、西貢、新嘉坡、コロンボ、香港を廻航して馬公港に碇泊中、松島は突然後部火藥庫爆發して沈没し、乗組員總數三百四十名の中、矢代艦長始め少尉候補生下士卒等多く難に殉するの珍事を起しぬ。而して生存者百四十餘名は僚艦殿島、橋立に分乗して豫定航路たる北清沿岸より樺太方面の廻航を續行せり。五月十五日海軍將官の更迭發表せられ、中將中澤徳太郎氏海軍省軍務局長兼海軍將官會議

員に補せられ、少將武富邦鼎氏大湊要港部司令官に、同寺垣猪三氏舞鶴水雷團長に、同北古賀竹一郎氏舞鶴海軍工廠長に同大久保保喜造氏横須賀水雷團長に、同中村靜嘉氏佐世保水雷團長に、同成田勝郎氏海軍省出仕に、同野元綱明氏第二艦隊司令官に、同伊地知季珍氏吳海軍工廠長に轉補せられ、中山長明、鍋木誠、松本有信、上原仲次郎氏等諸將官は就れも待命仰付けられ、獨逸大使館附少將八代六郎氏は歸朝を命ぜらる。次て二十六日伊集院第二艦隊司令官は第一艦隊司令官に、海軍教育本部長兼海軍將官會議員出羽中將は第二艦隊司令官に、有馬第一艦隊司令官は出羽中將の後任に、井上侍從武官は海軍將官會議員に轉補せられ。超えて八月二日練習艦隊は横須賀に歸航せしが、天皇陛下並に東宮殿下には四日御慰問のため各武官を横須賀に御差遣あらせ給ふ。同七日海軍中將男爵日高壯之丞氏海軍大將に任ぜられ、二十八日少將小倉銀一郎、山田彦八、島村速雄、加藤友三郎の四氏は海軍中將に、大佐加藤定吉、山下源太郎、小泉傑太郎、土屋保、名和又八郎、村上格一、川島金次郎、江頭安太郎、井手麟六、毛利一兵衛、和田賢助、男爵西紳六郎、高木助一、今泉利義諸氏は海軍少將に、機關大佐永嶺謙光、横山正恭、山崎鶴之助、下條於菟丸諸氏は海軍機關少將に、軍醫大監太田彌太郎氏は海軍々醫總監に就れも陞任せしが、是と同時に

將官始め艦長其他の大更迭行はれぬ。十月十八日には米國大西洋艦隊は旗艦コネクチカット以下十六隻、スベリー提督指揮の下に軸相啣みて東京灣に入りぬ。我海軍も亦た伊集院第一艦隊司令官の下に、第一、第二の兩艦隊を以て之を迎へ、官民の歡待は殆んど狂せん計りなりしが、該艦隊は一週間碇泊の後二十五日遂に辭して東京灣を去りたり。先是米國艦隊の入港に際し、我海軍は東郷大將統監の下に十月中旬より十一月中旬に至る約一ヶ月の間に於て、戦後始めて施行せらるゝ大演習を舉行しぬ。該大演習は二期に分たれ、參加艦隊は殆んど我海軍の全部を擧げて、演習部隊を編成せしが、其一部たる第一、第二兩艦隊は前述せる如く米國大西洋艦隊の接伴艦隊として横濱沖に碇泊するととなりたるを以て、爾餘の艦艇にて第一期演習は開始せられしも、是は單に各種の訓練、戰術的諸動作を修熟する目的にて、與、佐世保及馬關方面に於て行動するに過ぎざりしが、十月下旬米艦隊の横濱を解纜して、第一、第二兩艦隊の接伴艦隊の任務を解除せらるゝに及び、攻撃軍たる第一艦隊は佐世保に、國防軍たる第二艦隊は吳に急航し、此處に第二期の演習に入りぬ。十一月二日第一艦隊は出て、奄美大島を根據地と定め、第二艦隊は次て佐世保を根據地として吳に第三艦隊を止め、四日に至りて先づ攻防兩軍の根據地全く形成す。斯くて攻防の戰策は鼎

立せる三艦隊の各幹部に於て決定せられ、六日頃より各艦隊は運動を開始し、第一艦隊は薩摩南方を警戒し、第二艦隊は五島附近を、第三艦隊は専ら豊後水道附近を偵察せり。而も各艦隊共に敵影を認むる能はず、即ち第二艦隊の全部は七日正午佐世保を抜錨し、軸錨相啣みて晝間は徐行し夜陰を利用して敵の哨線を脱し、吳なる第三艦隊と合して其勢力を大にし、以て敵の主力と雄雄を一舉に決せんとせり、然るに攻撃軍亦能く之を察知し、能ふ限り敵の行動を妨げ、箇々の勢力を各別に撃破せんとして南海の偵察須臾も怠らず、されど優勢なる國防軍の水雷艇隊は常に彼我の中間を隔て、夜間の襲撃到底其利を見ず、剩へ風浪稍高くして接觸を保つ能はず遂に第二艦隊は八日午前敵の視線を脱して其目的地なる有明灣に向ひ行進中、同日午後十時大隅東方の海上に於て第三艦隊の來航するに會して遂に豫定の目的を達し、新に縱陣を作りて回轉し、攻撃軍を邀撃するの方陣に出て、附近海面を迂回すると數時、偶々攻撃軍が第二艦隊を逸するを知りて大島方面に出て、慕然北進し來るに會し、九日午前一時彼我の先頭陣五千米突の近距離に接近するに至りて始めて砲火を開き交戦約五十分、互に逆航回轉して各其主戦隊に會する頃、天漸く明け、兩軍各陣形を更むるや、兩軍の檣頭高く戰鬪旗飄へされ、午前五時距離八千米突にして終に砲火を交へ、離合

三回、折柄昇る朝暾の下、帝國艦艇の全力を網羅せる日隅の東海上、海若狂ひ水神呼ぶの修羅場演出せられたるが、交戦二時間にして演習は遂に中止せられ、艦隊の全部は一旦分離して其編制區分に別れ、吳に入港して居ると三日、特別任務に當れるものは神戸舞子及明石沖に急航し、其他は悉皆大阪築港外より南方堺沖に至りて碇泊し、十五日午前九時拔錨神戸の觀艦式場に向ひ、同日正午各豫定の位置に投錨せり。先是陸軍大演習を御統監あらせ給ひし、大元帥陛下には奈良行在所御發登舞子に行幸し給ひ、十七日觀艦式を舉行する豫定ありしも、風浪の爲め一日延期し、十八日神戸に行幸、御召艦淺間に御座乗、參列の各艦艇を御親閱在らせ給ひ、終つて各艦隊司令官以下各艦長を淺間に召させて、左の勅語を下し賜ひぬ。

朕鑒ニ親シク海軍ヲ閱シテヨリ既ニ三星霜ヲ經タリ今演習ノ經過ヲ聞キ又艦隊ヲ閱スルニ更ニ進歩ノ跡アルヲ見ル是レ汝等ガ平素ノ勤勉ニ依ル處朕甚ダ之ヲ憐ブ汝等益々奮勵シテ一意本分ヲ盡サンコトヲ期セヨ  
 次て諸將士に宴を賜ひ、午後二時還幸仰出され、舞子有栖川宮御別邸に入らせ給ひぬ。翌十九日、大元帥陛下には舞子御發登靜岡に御泊の上、二十日を以て東京に還幸あらせられ給ひぬ。

斯くて大演習終了後、佐官以下の大異動行はれしが、其後十二月一日新に海軍豫備艦隊條例發布せられ、其結果新設されたる豫備艦隊の編制を擧ぐれば、横須賀鎮守府豫備艦隊には相模、朝日(旗艦)、周防、八雲、浪速、高千穂、橋立、滿洲、鎮遠、鈴谷、武藏、松江の諸艦、吳鎮守府豫備艦隊には筑波(旗艦)、石見、常盤、春日、嚴島、千代田、大和、龍田、姉川の諸艦、舞鶴鎮守府豫備艦隊には丹後、鹿島(旗艦)、日進、對馬、見島、千歳、金剛、比叡、千早の諸艦、佐世保鎮守府豫備艦隊には敷島、三笠(旗艦)、須磨、笠置、沖島、秋津洲、和泉、葛城の諸艦是れに屬するとなりぬ。次て十二月十日豫備艦隊司令官の任命あり、海軍少將野元綱明氏吳豫備艦隊司令官に、同八代六郎氏横須賀豫備艦隊司令官に、同井手麟六氏佐世保豫備艦隊司令官に、同高木助一氏舞鶴豫備艦隊司令官に任せられしが、同時に機關大佐佐藤龜太郎氏海軍機關少將に、主計大監志佐勝氏主計總監に、造船大監小幡文三郎、近藤基樹、小山吉助の三氏造船總監に、造兵大監李家政太氏は造兵總監に昇進し、尙ほ將官以下多數の艦長更迭せられたりき。同十八日に於て四月末馬公碇泊中爆沈したる松島艦の爆沈原因發表されしが、爆沈したる三十二珊火藥庫内に搭載し居りたる褐色火藥は、學理上並に實驗上自發するものにあらざるを以て、同庫爆發の原因は同砲裝藥の自發に

あらずして、他動的發作即ち火災なりと認むるの外なし」と云ふにありて、尙ほ其火災は故意又は發狂者の放火其他の所爲と疑ふ可き餘地なく且つ他室内より發火したる形跡を認むる能はざるが故に結局三十二珊火藥庫内の火災に起因するものと認定すと云ふにありき、尙本年度に於て軍艦扶桑、島海、摩耶其他水雷艇數隻艦籍より除却されしが、更に最上(通報艦)、磯波(驅逐艦)等の新勢力加へられぬ。

## 第五章 經濟

### 一 沈衰せる事業界

日露戰役後、澎湃として勃興したる新事業界の機運は、明治四十一年に入りて一大頓挫を生ずるに至りぬ。實に四十一年に於ける事業界は、新事業勃興に對する一大反動時代なるが如し。想ふに事業の濫發に對する反動は、四十年下半年より既に其の兆候を呈し、識者によりて夙に經濟社會の前途を憂懼するの聲は號呼せられ、幾多の警告は與へられたりと雖も、それは概ね馬耳東風と聽き流され、奔放せる大勢の趨向は如何ともする能はずして、當時偶々没落の悲運に遭遇するものありて、事實の訓誡を與ふるものあるも、他方に於ける新計畫、新擴張等は容易に減退せずして、其の結果四十年に於

て新事業に投じたる資本總額は七億三千四百七十七萬餘圓に達し、戦後に於ける新事業費通計十八億二千八百二十九萬餘圓の巨額を算するに至りぬ。斯かる無謀なる新計畫は到底事業界に波瀾を起さずして止む可けんや。四十一年に入りて俄然其の反動を惹起し、新會社の没落は諸所に於て踵を接し、會社の解散或は事業休止は頻々として行はれぬ。斯くて事業界の沈衰は殆んど其の極に達したるの觀を呈せり。是れ畢竟事業濫發の反動に相違なきも、亦た歐米各國に於ける市場動亂の影響を受けたるに起因し、殊に對清對米貿易の不況、南清に於けるポイントの如きは、我が事業界に一大痛撃を加へたるもの、如し。斯く沈淪の悲境に陥りし事業界は、僅かに一億二千七百二十六萬二千圓の資本を新事業に投じたるに過ぎず。而して此中新設七千二百十二萬三千圓、擴張五千五百十三萬九千圓なりとす。若し是れを彼の三十九年の十億餘萬圓、四十年の七億餘萬圓に比載せば、如何に急激なる減退をなしたるかを知るに足る可し、斯かる沈衰の裡にありて、殊に注意を惹起すべきものは、東洋拓殖株式會社の創設されたる一事是れ也。該會社は八月二十六日を以て公布せられたる「東洋拓殖株式會社法」に基づき、創設せられしものにして、九月十六日政府は伯爵正親町實正氏を創立委員長に任命し、貴衆兩院議員、實業家、官吏等の中より委員を選びて

韓國政府の任命したる委員と會合協議せしめしが、同委員等は同月二十一日及二十四日の創立委員總會に於て定款其他の事項を決議しぬ。當時伊藤韓國統監は歸朝中なりしを以て、二十四日の桂首相官邸の拓殖委員招待會に列し、一場の演説を試みぬ。先づ統監は會社の設立は東洋協會々頭桂侯の發起なるより説き出し、會社の事業の永遠に涉る事、其事業の成否は日韓兩國の民心に影響を及ぼす所以を陳じて、更に韓國側委員に告げて曰く。

本會社は如何なる方法に由て韓國の農事改良に便益を興ふるやと云ふに、第一は資本の融通にして、第二は多年研究の結果に基く知識經驗の應用也、而して其日韓兩國人に及ぼす利益は全く共同的にして、彼に重く之に輕きが如きとある可からず、實際の事務に當る人々は深く此點に注意を要す、自分は從來韓國の財政經濟を安固にし、各般の事業を徐々に進歩せしめて所謂韓國財政經濟の獨立を期せんと欲する者也。財政經濟の獨立とは國庫の收支其宜を得て、國債の利息の如きも健全に之を支拂ひ、人民亦必要の經費を支辨して、猶貯蓄を爲すの餘裕あるが如き狀態を指して云ふに外ならず、今回拓殖會社創立に當りては、諸君も充分に研究して自國の利益を失はざる様注意せざるべからず此邊の事に就ては自分の多言を要せず、既に諸君に於て充

分攻究せられ居る事とは信ずれども、爲念茲に言及す、更に進んで觀察するに、韓國の財力を發達せしめて之を増加するは、即ち韓國の財政經濟を安固にする所以也、例へば日本人の韓國内地に入つて事業を經營するに當りては、納税の義務は即ち韓國政府に對し之を有し、決して日本政府に對して有する者にあらず、隨て日本人の韓國に入る者多きを加ふれば韓國の歳入は益々増加する事となる可し、恰も歐米人の日本に於て事業を企つるが如し、彼等は自由自在に如何なる業務を爲すも可なれども、其所得に對する納税は日本政府に對して負擔せざる可からず、之と均しく韓國に於ける日本人も決して日本政府に對して納税を爲すにあらず、一に韓國政府に對して之を爲すものなれば、此點は諸君に於て誤解せざらんとを希望す、日本人の韓國に居住するもの多きに至つては、之が爲に韓國は多大の利益を得て、其歳入は増加し、政府各般の事業も隨て伸張するを得可し、深く諸君の熟慮を望む云々

猶統監は、日本の韓國を保護するは第一國防にあるとは勿論なるも、亦韓國の人民を救ふと、其内治を完全ならしめ、地方經濟を發達せしめて、其財政を獨立せしむる事等も、當然日本の負擔にして、日本政府の廟議此に決定せる處也、而して之を爲すは殖産興業の發達に依らざる可からず、是れ拓殖

會社の創立を要したる所以にして、決して韓國一部人士の抱ける拓殖會社によりて日本人が韓國の土地を奪ふと云ふが如き疑念は、誤解の最も甚だしきものなるを陳辯し、事業の性質より速成に逸やるを戒しめ、漸を以て實効を擧げんとを希望せられぬ。

十一月一日より十日に至る間に於て、株式は募集せられたるが、其方法は資本金一千萬圓を二十萬株に分ち、韓國政府は田五千七百町歩、畑五千七百町歩を投資し、其價格三百萬圓に相當する六萬株を引受けたるを以て、此外尙一千株を控除したる十三萬九千株を日韓兩國の一般公衆より募集するととなりしが、其結果應募總數實に四百六十六萬六千六百七十七株、即ち募集株に對して約三十三倍の盛況を呈するに至りぬ。斯くて二十八日に至り、陸軍中將男爵宇佐川一正氏は東洋拓殖株式會社總裁を、吉原三郎氏同副總裁を仰付けられ、同時に監事、理事、監理官等の任命あり、猶韓國側に於ても閔泳綺氏副總裁を仰付けられたるを以て、同日東京商業會議所に於て開かれたる創立總會に於て、正親町創立委員長は創立事務の引繼を了し、此處に宇佐川總裁の演説ありて、資本金一千萬圓の大會社は、日韓兩國密接關係を親交にし、韓國開發の大使命を負ふて産れ出でぬ。是れ實に沈衰を累ねたる四十一年の事業界に一異彩を放てるもの乎。



### 二 活気なき金融界

暗澹たる中に僅かに小康を得て迎へたる新春の金融市場は依然として活気なく、銀行業者は警戒に怠らずして、商工業は秋風落葉の悲境に沈吟しぬ。而して半恐慌的なりし銀行界の波動は尙ほ絶えずして、其の波紋は順次に新春の各地銀行に及び、先づ關西地方に於て動搖の端を開きぬ。即ち一月四日奈良に於ける八木銀行本支店(一週間の預金取附を始めとして、大垣共立銀行各支店(一月八日より一週間)、大阪五十八銀行平野支店(一月廿二日より三日間)福井縣大和田銀行支店(二月二日三日)、藤原十八銀行支店(二月四日より三日間)三重縣河曲銀行(二月十三日より四日間)、浪速銀行堺支店(二月十八日より四日間)、加島銀行岡山支店(二月十八日より三日間)、廣島商業銀行(同上)、大阪貯蓄銀行堺支店(二月廿日より三日間)、大井銀行(四月廿五日より六日間)、横濱戶部銀行(五月六日より四日間)、村瀬銀行支店(五月廿九日より四日間)、關戶銀行(六月六日より三日間)、鹿兒島貯蓄銀行(六月廿五日より二日間)等は孰れも預金取附の災厄に遭遇し、尙ほ八王子第七十八銀行(二月三日より)、葛飾銀行(同十七日より)、千代田銀行、同貯蓄銀行(同十九日より)、京都四十九銀行(三月十一日より)、神戸貯蓄銀行(同上)、宮城屋銀行(同

十二日より)、足立銀行(同五日より)、千住銀行(同六日より)東京農商銀行(同上)、田無銀行(同十二日より)、東盛銀行(同十八日より)、神奈川銀行(同上)、貯蓄銀行(四月二十四日より)、田沼銀行(同廿八日より)、大森銀行(同廿九日より)横濱野毛貯蓄銀行(五月四日より)、北海道貯蓄銀行(同五日より)、伊勢銀行(同二十日より)、水野銀行(同廿一日より)、攝河銀行(六月廿六日より)等は臨時休業の止むなきに陥りぬ。而して其原因は外國貿易の不振より物資の固定したるに由るもの、如し、獨り銀行界の動搖に止まらず、前半期に於ては、金物商、洋反物商、洋紙商、縮緬商、皮革商、綿絲商等の破綻せるもの續出し、綿絲紡績業者は、夜業を休止するの協約を取結ぶに至りたり。是等幾多の波瀾は銀行業者をして益々閉鎖主義を固執するに至らしめ、金融の切迫は其の極に達し、斯くて財界の前途を悲觀するもの輩出して、所謂財界救済の聲は揚げられぬ。彼の東京の重なる銀行家より成る總會の如き、三月十八日松田藏相、水町次官、勝田理財局長等を三井集會所に請待し、金融市場の緩和を計る第一策として、第一回國庫債券償還の議を諮りしが、是に至りて大阪市始め各地の銀行家實業家等一致して政府に迫りたるを以て、政府も遂に第一回國庫債券償還の法を發布し、四月三十日二千萬圓の償還を實行せしも、同時に五分利付國庫債券整

理公債を發行し、實際の利率を高率としたるを以て、振替を希望するもの多く出て、資金放散の効果と奏せざりしも、第二次第三次の償還せらるゝに及びて、金融界は大に緩和せられたるが如し。尙ほ前半期に於ける動搖は銀行預金の轉じて郵便貯金、大藏省證券に振替へらるゝ趨勢を喚起し、爲めに各銀行は預金利率を引上げ預金の吸収に腐心したりしが、後半期に入るに及び、事業界は幾多痛撃を受けたる結果、事業の中止、繰延をなすもの續出し、此處に資金の需要減退せしかば、金融市場は稍々消極的に小康を保つを得たりき。此間西園寺内閣は瓦解して桂侯新内閣を組織すに及び、國債割引償還法を捨て、抽籤償還法を定め、又銀行家及實業家等の意見を容れて、財政の整理案を發表し、事業の繰延、公債募集の廢棄、毎年五千萬圓以上の國債償還等の策を採りたるを以て、能く人心を收斂するを得、亦た財界の前途に光明の存するが如き感を與へぬ。斯くて人心漸く平穩に歸し、金融界も愈々靜穩を保ちき。七八月以降東西市場の金利は順次に低落し、海外に於ける公債價格も亦騰貴の形勢を示しぬ。斯くて這般の趨勢は、内に在りては東洋拓殖の株式募集に際して、約三十三倍の應募額を算するの盛況を呈し、滿鐵社債、興業銀行社債其他の外債募集に孰れも成功し、按外なる好景氣を以て迎へられぬ、斯くて下半期の金融市場は至極無事平穩の裡に經過したりと

雖も、畢竟這般の現象たる、國債償還、民業の縮少と云ふが如き、人爲的結果に外ならずして、消極的に緩和せられたるに過ぎざるが故に、餘りに喜ぶ可き現象にあらずと云ふ可し。

### 三 株式界の大波瀾

狂熱時代後の悲觀相場も、既に其極度に達したるを以て、四十一年の株式市場は必らずや其の反動現はれて、市況は恢復するに至る可しとの希望を以て迎へられたりしが、事實は却つて豫想と背馳し、新春平穩なりし市場も、忽ちにして小波瀾大波瀾の踵を接するものあるに至れり。始め一月に於ける相場は差したる變動なくして經過せしが、二月中旬より小銀行破綻の報傳へられし以來、銀行の警戒となり、一方には生絲の輸出減退し、此處に再び經濟界悲觀説出て、其の結果諸株忽ち低落を來し、商勢不振の状態を現出するに至り、斯くて三月下旬に至るまで、殆んど一直線に相場は下降し、四月に於ては國債償還の事ありて幾分好況を呈す可しと豫期されしも、高利なる借換公債發行の爲めに頓挫し、爾來却つて暴落の變調を呈し、其の五月に入るや、遂に恐慌相場を示すに至れり、當時銀行並に内外商人の破綻の報頻々として傳へられ、市況は一層險惡の風潮に襲はれて、此處に株式史上

忘る可からざる大暴落の極に達しぬ。斯く極端なる暴落の結果は、是れ再轉して恢復期に向ふの端となりたるもの、如し、即ち五月中旬より財界救済の聲湧出し、諸株も是を最低として稍々上向きの氣勢を示したりき。六月に於ける市況は漸次順境に向ふもの、如く、七月初め西園寺内閣の轉覆に亞いて桂内閣の組織さるゝや、新政府は九月十日財政整理の方針を發表したりしが、其の結果として海外市場に於ける本邦公債騰貴となり、買収鐵道株又高騰し、同時に米作豊饒の見込も確實となりしかば、市況は活氣を呈するに至りぬ、十月に入りてバルカン問題の報と共に本邦公債下落の事傳はりて、一時頓挫の傾向を惹起せしも、該問題に平和的解決の曙光を認むるに及び、又米艦隊の來航ありて市場稍浮き立ちぬ。十一月の市況は幾分の高低ありしも、大勢は低落に傾きたり、其後清國の兇變に接して市場動搖したりしと雖も、兇變の真相明白となるに及びて忽ち鎮靜せり、十二月に入り、日米協約の發表、滿鐵社債成立等の事ありて、相場は漸次上騰するの氣勢を示し、中旬に及びて聊か變調する如く見えしが、何等動搖なくして納會を告げたり。

#### 四 外國貿易の減退

日露戰役後大々的躍進をなしたる我が外國貿易は、明治四

三十九年 四二三、七五四、〇〇〇 四一八、七八四、〇〇〇  
 三十八年 三三三、七三八、〇〇〇 四八九、〇三七、〇〇〇  
 輸出入に於ては三十九年に四百餘萬圓の輸出超過を示したるの外、孰れも輸入超過の一方に偏したるが、そは我國に於ける戰後事業界の勃興に起因し、十七億の新起業計畫の結果は、勢ひ海外より物資の輸入を促進したるに外ならざる也。而して四十年に於て九億二千餘萬圓に躍進したる貿易が、突然八億千餘萬圓に減退したる所以を考究するに、這般貿易上の衰微は獨り我國のみに止まらずして、歐米各國を通じての一般現象なるが如し、特に我國は日露戰役に際して、十七億餘の國債を内外市場に募集したるが、是等は何れも民間市場に放散せられ、悉ひて戰後新事業の勃興となり、需要の増進となりたる結果、四十年に於ける海外貿易の一大躍進を來したりと雖も、是を以て直ちに根底ある健全の發達をなしたりと云ふを得ざる可し、されば其の反動の生ずるは亦た免がれざる現象にして、四十一年の貿易界の不振は、尙ほ幾多の原因附帶し居る可しと雖も、其の根本の原因は想ふに戰後の反動に外ならざる可し。故に若し歐米の市場にして恢復し、又我が經濟界にして平常の状態に復するに至れば、今回の一頓挫の如き寸毫も憂懼するに足らざる可し、然るに統計の示す處によりて直ちに貿易界の前途を悲觀するが如きは、輕躁短

十一年に及びて、輸出入とも非常なる減退を來し、其總額は八億一千二百四十八萬三千餘圓にして、輸出總額三億七千六百七十九萬六千餘圓、輸入總額四億三千五百六十八萬七千餘圓を示し、即ち五千八百八十九萬一千餘圓の輸入超過を呈するに至り。實に四十一年の外國貿易は近年稀れなる不振の状態に陥りたる結果として、最近數年間に於ける貿易の總額と比較し、多大の減退を來したるもの、如し、今左に比較對照せんか。

年次	輸出	輸入
四十一年	八二二、四八三、〇〇〇	九二四、七〇八、〇〇〇
四十年	八四二、五三八、〇〇〇	八二二、七七六、〇〇〇
三十九年	四三〇、五一六、〇〇〇	四九四、一九二、〇〇〇
三十八年	三三三、七三八、〇〇〇	四八九、〇三七、〇〇〇

戰後外國貿易界の趨勢は、逐年増加の一方に傾きつゝありしにも不拘、四十一年の貿易が俄然減少して、過去數年に比し、尙ほ且つ如上の最低額を示せるが如き、兎に角貿易界の一變態たるを疑はず、而して是を輸出入の内譯に就て見るに左の如し。

見と云はざるを得ざる也。吾人は唯だ海外貿易を回顧するに當りて、遺憾の念に耐へざるものは、彼の辰九事件より惹いて起りたる南清地方に於ける日貨排斥の事なりとす。我が海外貿易の立脚地は、將來清國の各市場ならざる可からず、然るによし一時的のものなりと雖も、彼等に誤解を抱かしめて累を貿易の上にも及ぼさしむるが如きは、大に憤しきざる可からざる也、況して南清地方の商民等にして今尙ほ惡感を抱するものあるに於てをや、朝野官民共に意を盡す所なかる可からず。

#### 五 大博覽會問題

既に明治四十年に於て總裁以下の任命ありたる日本大博覽會は、其後順次準備に著手し、四十一年六月六日花房義質子以下官吏、貴衆兩院議員、實業家百三名を大博覽會評議員に任命し、同月十七日第一回の評議員會を農商務省會議室に開き、松岡副總裁は開會の挨拶と共に大博覽會の計畫に就いて陳述して曰く。

内國勸業博覽會は明治十年の布告により、五年毎に開催すべきものにして、昨四十年は恰も其六回の開期に當れり、然るに日露戰爭中到底其準備を爲すの暇なかりしを以て、三十八年中に之を延期するとし、平和克復するや即ち三

十九年中に於て政府は調査委員を設け、其時機及範圍を考究せしめ、遂に内國博覽會を擴張して外國の贊同を促し、之を日本大博覽會と稱し、四十五年東京に於て開催するとし、之を全國に公布し又歐米各國に通告して其贊同を求めたり、而して一面には博覽會官制を定め、總裁以下夫々官員を任命して順次事務の準備に着手せり、時期、場所、範圍及金額並に東京市の直接負擔額等も夫々調査を了し、次て博覽會規則、出品部類の目錄等の草案も略々成り、評議員の任命ありて本日如く重要なる事項の考究審議の事を託するを得るの運に至れり、博覽會の名稱は一なるも、其主要目的は必ずしも同じからず、或は紀念の爲めにするものと祝祭の爲にするものとあり、我大博覽會は勸業を主要の目的とす、戰後國家經濟上産業の振化鼓舞は甚だ緊急にして國民の元氣も亦横溢して進取政行の勢實に欣ぶ可し。是を以て開催の期は一日も迅速なるを要すれども、奈何せん事各國に涉り事情破格の早急を許さざるを以て、十分酌量の上之を四十五年に決定せり。

本博覽會は第一國內各生産者相互に裨益を爲すは言を俟たず、第二汎く各國人に向て我生産物の未だ多く外國人に知られざるものを廣告紹介し、第三各國の製造物品を一場に集め、國民の多數者をして坐ら觀覽して知識を啓發し、嗜

好を惹起せしめ且つ國民をして多くの外國人に接觸し互に平和を樂しましむるの實を擧ぐるにあり、而して結局内外國通商貿易を倍々發達せしむるとは疑を容れざる也。

今回の博覽會は如上の旨趣に出づるものなれば、敢て雄大壯觀を衒ふが如きは固より期する所に非ず、然れども各地共進會の如く零碎の物品を雜然排列するが如きは不可也、唯質實簡潔を本として而して産業上に裨益するとの多きを勉めんとす、此點に於ては或は外國人をして一種特色あるものなりと首肯せしむるを望むもの也、今回議案となす所の博覽會規則及出品部類等は皆如上の旨趣に従ひて之を立案せり、此規則類未定中は何人も其の目的方向を定め難し、故に此規則は實に博覽會の活動する一大基礎也、之が決定の上は速に之を内外に告知し、各管理者又は出品者をして準備に着手するを得せしめんと欲す、評議員各位善く討論審議を盡して其完全を期せんことを望む。

右終りて金子會長議長席に着き、大博覽會規則案及出品部類目錄を議題に附せしが、委員附託となりて散會し、更に十九日開會議事を續行して可決しぬ、爾後着々進行を圖りて和田事務總長以下各府縣を巡回して其趣旨を陳述し、出品獎勵を勉めしが、七月四日財政問題のために西園寺内閣瓦解し、桂内閣の組織さるるに際し、新内閣は財政整理の結果として入

月廿五日の閣議に於て大博覽會の延期を確定しぬ、是に於て其開設と最密接の利害關係を有する東京市は、大浦農相に反對意見を開陳せしむ効なく、超えて三十一日大浦農相は在京中の大博覽會評議員を招集し、延期の理由を演説せしが、要は國家財政に大整理を加へ經濟の調和を計る上に於て、延期は免かれざる所、且つ當初豫期せし經費にては事業を進行せしむる能はず、尙ほ海陸連絡其他交通上の施設等に多額の經費を要するも、刻下財政の事情は到底之を許さざるを以て、如かず明治五十年即ち今上陛下御即位五十年を以て萬國的大博覽會を開催せんにはと謂ふに在り、評議員中反對意見續出したるしも不得要領にて閉會し、遂に九月二日に至り政府は勅令第二百七號を以て大博覽會延期を決定公布するに至れり、則ち公文に曰く。

明治四十年勅令第二百二號中「明治四十五年」を「明治五十年」に改む。

同時に政府は延期理由を公示したるが、會て大浦農相の評議員會に演説する所と異ならざりき。斯く延期に決定したるより、會長金子堅太郎子、事務總長和田彦次郎氏は同日辭表を提出したりしが、和田事務總長は留任に決し、金子會長は即日大博覽會々長を免ぜられぬ。斯く大博覽會延期の事公表せられてより、東京市東京府を始め實業界に於ても大非難の聲

絶叫せられたるが、歳月の経過と共に鎮靜したるが如し。

### 六 農銀の資金問題

地方に於ける農業の發達に連れて、資金の需要増大し行くに不拘、農業資金は固定的のものなるが故に、其の特殊金融機關たる農工銀行に於て供給しつゝ來りたるが、四十一年に於ては殊に其資金に缺乏を來したるを以て、六月四日開催せられたる全國農工銀行大會に於て、資金充實問題は提出せられ、左の決議を爲すに至れり。即ち、

- 一、郵便貯金の一部を割き、専ら農工銀行の爲めに資金の融通を圖る事。
- 二、資本金を倍加し、政府は其三分一を出資する事。
- 三、縣金庫取扱の件。
- 四、第二十六回勸業債券百五十萬圓の中、各農工銀行募集取扱額の半額を其行に對し、特に一年間融通する事。
- 五、郵便貯金融通に對し、勸業銀行は特別に農工銀行に低利の貸附を爲す事。

而して是等決議事項を實行せしむる爲め、實行委員七名を選びて政府と交渉を開始したるが、其の結果、第一大藏當局者は只漠然資金を融通する能はざれば、大體現今並に本年下半期間に於て貸附請求額の確實なりと認め得る金額より現在所

有し若くは下半年間に回収す可き資金と預金とを差引きたる  
 残額を當局者に申告せば、之に對し相當の金額を融通すべし  
 との旨達せられたるを以て、各行は六月二十日附にて右の報  
 告を委員の許に届出づるとに決し、二乃至五は孰れも要領を  
 得ずして、大會は委員を選任して散會しぬ。其後委員等は各  
 行よりの報告を取纏め、大藏省に提出したるが、孰れも誘大  
 に豫想額を見積りし結果、總額六百萬圓に達したるも、大藏  
 省は嚴密に調査を遂げ、且つ内務省と打合をなしたる上、愈  
 々七月三十一日大藏大臣の名を以て二百五十萬圓貸附許可の  
 指令書は發せられぬ。而して是を東京外二十三行に分配した  
 るが、其金額は福島十三萬圓、兵庫の十二萬三千圓、大阪  
 の十萬等を最高として山形の二萬六千圓の如き最低なるが如  
 し、而して大藏省の條件としては、各行は此資金貸附に際し、  
 先づ個人にして可成小口なる需要者に貸與し、次に耕地整理  
 費、次に公共團體と云ふ順を以て貸附くると、此資金が年二  
 度宛勸銀に償還せらるゝ時は、其都度其額だけ勸業債券を償  
 却すると、期限は當然勸業債券の期限なる十箇年となすと等  
 なりと云ふ。

### 七 交通界概観

明治四十一年の交通界に於て特記す可きものは、實に臺灣

鐵道院の設置なる可きか。臺灣の我

版圖に歸せし當時、即ち明治二十八年にありては臺灣鐵道も  
 僅かに基隆より新竹に至る 六十三哩の鐵道を有したるに過  
 ぎざりしが、翌二十九年十月臺灣鐵道株式會社の發起ありて  
 政府の補助を得て鐵道事業を經營する計劃なりしも、當時經  
 濟界不振の結果、株式募集をなす能はずして、會社は三十年  
 十月に至り解散に決せしが、其後臺灣總督府は鐵道官設の議  
 を決し、第十三議會に提出して其協賛を經、爾後基隆、新竹  
 間に於ける既設線路六十三哩餘を改良し、新設新竹打狗間に  
 百七十九哩餘の鐵路を敷設せんと欲し、南北兩端より工事に  
 着手し、北線は三叉河、南線は葫蘆墩迄開通せしむ、其間工  
 事至難にして容易に竣工せず、一事輕便鐵道によりて連絡を  
 取り來りしが、四月二十日日本線愈々竣工し、全線二百四十七  
 哩の開通を見るに至りぬ。斯くて十月二十四日臺中に於て縱  
 貫鐵道開通式を舉行し、閣院宮殿下には御台臨在せられ、令  
 旨を下し給ひぬ。又た鐵道院の設置は、鐵道會計の獨立問題  
 に起因し、十二月五日愈々鐵道院官制の發布となりたるもの  
 なるが、其結果從來の組織に變更を加へられ、全國鐵道を區  
 分して五箇所に管理局を置き、以て全線を管理することとなれ  
 り。而して即日逓信大臣後藤新平男は鐵道院總裁の兼任を命  
 ぜられ、同時に鐵道院幹部職員は任命せられたり。即ち平井

晴二郎氏は鐵道院副總裁に任じ運輸部長を、山の内一次氏は  
 總務部長を、大道良太氏は總裁秘書を、野村龍太郎氏は建設  
 部長を、國師民嘉氏は主理部長を、山口準之助氏は鐵道調査  
 所長を、長谷川謹介氏は東部鐵道管理局長を、古川阪次郎氏  
 は中部鐵道管理局長を、岩崎彦松氏は西部鐵道管理局長を、  
 植村俊平氏は九州鐵道管理局長を、野村彌三郎氏は北海道鐵  
 道管理局長を命ぜられぬ。斯くて後藤總裁は平井副總裁以  
 下高等官に對し、訓示して曰く。「全國鐵道統一以來既に十  
 有五ヶ月、國有の實着々進歩を進め來れるも、未だ遺憾とす  
 る處尠からず、是に於て明年度より鐵道會計を全然獨立せし  
 め、從來の如く一般會計の爲に其擴張又は改良を阻止せらる  
 ると云ふからしめ、次いで鐵道應を改めたる鐵道院官制を實施  
 す、是れ過去一年有半の實験に依り、鐵道經營に一大改革の  
 第一日となす、諸君は従前に倍するの誠實を以て事に當り、  
 鐵道國有の實績を擧げられんとを望む」と。吾人は國有後の  
 鐵道に對する非難の聲を排して、國有の効果を擧げられんと  
 を望むや切也。

舊臘より引續きなる京都市の電車市有問題も、新春勿々論  
 議を逞しうしたるが、結局主務官廳の認可する處とならずし  
 て、遂に中止の已むを得ざるに至れり。其結果尾崎市長以下市  
 助役の辭職となりて、一時電車市有問題は落着したりしも、

其後尾崎行雄氏の京都市長に再選せらるゝに至り、亦もや電  
 車賃上げ問題は提起せられぬ。そは東鐵重役等は下半年配  
 當の四分に過ぎず、斯くては到底從來の賃率にては保持し能  
 はずと云ふを名として、更に一錢の値上と乗換毎に一錢を徴收  
 するとの許可を出願し、東京市會は喧嘩の中に一錢の値上げ  
 即ち五錢均一制を許可するを議決したるより、値上問題は  
 大なる物議を醸せしが、歳末に際して何等決する處なくして  
 喧々囂々の裡に過ぎぬ。

海運界は終歲不振の状態に沈淪したるもの、如し。日本郵  
 船の如きも、常に繋留船の絶えざるを見、内外航路共に載貨  
 の減少を嘆じて止まざりき。獨り日本郵船のみならず、東洋  
 汽船、大阪商船等孰れも同様の嘆を發せざるはなかりき、其  
 の原因は戰後年毎に増加せる船舶數の多大なるに拘はらず、  
 米國を始め歐洲經濟市場不振の結果は、貨物の停滯、旅客の  
 減少を來したるに外ならざるが如し。殊に南滿に於ける日貨  
 排斥及び我國船舶に對し同盟して貨物の積載をなさざるが如  
 き事起りて、爲めに東洋近海航路は打撃を與へられたるや疑  
 ふ可からず。斯く各方面に亘りて海運界は不振萎靡の状態に  
 陥りしより、四十年末一時廣航したる日本郵船の自營に係  
 る大阪漢口及大阪安東縣、神戸、浦鹽の各航路は、引續き勝航  
 を持續し、又香港檳榔谷線の如き、三十九年開始以來激烈なる

競争を續行し來りしも、年初に於て相手たる北日耳曼ロイド會社と妥協するに至れり。尙ほ九月に於ては會社の業務收縮の結果大濶法行はれ、支店出張所等の廢止せるもの出てき。大阪商船も亦た業務の縮少を劃したりき。東洋汽船の如き南米航路を廢止したるを見たりき。斯く一般に不振の中にありしかども、大船の建造計畫は各會社により順次に進捗せられ、三島丸、平野丸の如き四月中進水し、義勇艦隊の櫻丸も亦た竣工したりき。東洋汽船の天洋丸は艦裝了りて愈々六月を以て第一回の米國航路に上るに至りぬ。實に新造大船の建造は海運業の不振と逆比例をなしたるもの、如し。尙ほ本年に於て定期航路繼續の命令を受領したる會社は、日本郵船、大阪商船其他にして、即ち三月末日を以て定期命令契約期の満了したる日本郵船會社濠洲線定期航路に對し、逡信省は更に四十年四月一日より四十六年三月三十一日に至る五ヶ年間の繼續命令を發し、其條件及使用船舶は、同社船舶日光丸(五五三八噸)、熊野丸(五〇七六噸)、八幡丸(三八一六噸)の三隻を以て毎四週一回以上、一年期間四十三回以上、横濱、メルボルン間の航海に従事し、往復とも神戸、長崎、香港、マニラ、サトステッド島、タウンズビル、ブリスベン、シドニーに寄港すべしと云ふにあり、右命令繼續と共に、同省は釜山、元山、城津、境城、清津及雄臺の六港(受命者大阪原田十次郎期間は四十一年四月一日より四十二年三月三十一日に至る一ヶ年)、木浦、群山、仁川、鎮南浦及安東縣の五港(受命者大阪商船會社期間同様一ヶ年)の三寄港補助繼續命令書を夫々交附したりき。

### 八 農作界

農作界は一般に好況を呈し、米作は八月二十六日の第一回豫想額は、五千三百五十三萬六千四百二十二石にして、是を前年に比すれば九分一厘、平年作に比すれば一割七分九厘の増收を示せしが、其後天候不順となり冷氣急に加はりしを以て、第二回豫想即ち九月二十三日(秋分)の調査には、稍々減少を來し、五千二百三十一萬五千六百三十六石と報ぜられしが、尙ほ是を前年に比し六分六厘、平年作よりは一割五分二厘の増收を呈したるも、實收は亦々五千八百八十九萬七千二百三十三石に減少せり。麥作は農商務省に於て調査せし處によれば、實收高二千五百五十二萬三千九百四十三石にして、是を前年と比較して三分の減收となりたりと雖も、平年作に對しては、約一割の増收なりとす。春蠶は米國大統領選舉期に當りたるを以て、多少手控を見る可しと豫測されしも、事實は却つて盛況を呈し、今農商務省の調査によるに、春蠶の掃立枚數は二百四十四萬八千四百二十五枚にして、前年に比し四千六百六十四枚即ち一厘七毛餘の増加となりしが、四月下旬より五月中旬に至り東海道及關東地方に桑樹の凍害ありて、蠶兒を排斥するものを生じ、且つ生育不良のものありし等の原因の爲め、收繭豫想額は二百四十五萬六千六百六十九石を算し、前年に比して八萬四千八百七十九石即ち三分八厘弱の減少をなしたるが如し。

## 第六章 文學

明治四十一年の文壇は、いづれの方面に於ても、新らしく生命ある文藝が、その建設の基礎を確立し得た年であつて、同時に我が國の文學が嚴密なる意味に於ける革新の實を初めて擧げ得た最も光榮ある年である。一步を進めて云へば、わが國の文藝が初めて文藝根本の眞義に觸れ得た年である。過去四十年の明治文學は、皮相に於ては、わが國舊來の文學に比して新しき面目を示しては居たが、併し嚴密に洞察する時は、その根本精神に於て矢張り舊套を脱しなかつた。舊き酒を新しい甕に容れて喜んで居た感がある。徒らに外形の新を以て、自ら欺き他を欺いて居るのである。古き礎に新らしき家を建てやうとして居たのである。此の誤れる事を、根底から自覺し來つたのが、最近兩三年に於けるわが文壇の新らしい大勢であつて、此に於て初めて眞の意識ある文藝の基礎が定まつたのである。

去る三十九年の後半期から、漸く文壇一部の問題となり來つた自然主義の潮流は、翌四十年に於て文壇の中心問題となり、終に昨年に至つて其の最も確實なる効果を實顯するに至つた。その經過を顧れば、わが國從來の文藝が如何に文藝の

眞義に遠ざかつて居たか、新しき自覺が如何に深刻に痛切にその根底の弱所に突き入つたか、而して此の新らしき自覺とそれに伴ふ新らしき努力とによつて展開せられたる文藝の眞意義の如何に尊敬なるものであるか、分る。世には此の新興自然主義の文藝を以て、或狭小なる流派、一時的流行の好奇的主張の如く見做す者が多いが、自然主義の眞使命はそのやうな薄弱狭小なものでは決してない。否、文藝全體、廣くしては文明全體が、最も痛切に最も深刻に經驗すべき、根本的自覺——これに新興自然主義の眞意義が存するのである。此の點に於て、吾人は最近兩三年のわが文壇を以て、根本的自覺の文藝と云ひたい。而して此の根本的自覺と、それより來る疑惑と動亂と而して革新とを痛切に經驗して、初めてわが國の文學が文學そのもの、眞意義に觸れたものと觀るのである。

さて前にも述べた如く去る三十九年の頃から、漸く文壇の問題となり來つた自然主義の潮流は、正しく舊來のわが文藝の根本的の誤謬を自覺して、根底から其の束縛を脱し、生命ある新境地に進み入らうとした新人の活動に外ならぬ。總て自然主義運動が、その當初に於ては、あらゆる方面に於ける舊套打破といふ反抗運動を以て起り來つた事も決して偶然ではない。新らしき家を築くには、古き家を倒さねばならぬ、而

して古き基礎をも壊さねばならぬ。三十九年から四十年へかけての自然主義運動は、主として此の舊套打破と云ふ方面に向つて、全力を注いだ。當時自然主義が多く世の誤解を招く所となつたのも、要するに此の熱烈なる反抗的態度は其等のあらゆる誤解、あらゆる反抗に堪へて、終に全く舊思想、舊文藝の套習を破壊し盡したのである。かくの如くして、舊々凡てを一掃し盡したる新らしき素地の上に、着々として新文藝の基礎を据え初めたのが昨四十年の文壇である。前年及び前々年の文壇の怒號的であり、反抗的であり、破壊的であり、随てやゝもすれば極端的であつたのに比して、昨四十年の文壇が考察的であり、靜觀的であり、建設的であり、随て靜肅であつたのは、即ち以上の理由が存するからである。先づ之れを

◎評論壇

について觀れば、前に述べた経過は、最も好く窺知する事が出来る。即ち昨四十年の評論壇は、前年即ち四十年のそれに比して、その賑かさの度を減じて来た。怒號者流が少なくなつた。が、その代り何れも眞面目で、考察的で、堅實であつた。賛否何れに於ても一時の好奇的紛説は漸次に消滅し、眞に價値ある人々のみが残つて、堅實な研究論議のみが確存

して、歩一歩文藝の根本問題に進み入つた。かく自然主義論者が、その初めに於けるが如き、破壊的奮闘的態度から、一步をこの靜肅なる考察的建設的な態度に踏み入つたのを觀てその餘りに穩健化し軟化するに早かつた事を批難する者もあるが、それは單に自然主義論者の方ばかりを見て、その反對側の情勢を察せぬ片眼者流の言である。新興自然主義論者の當初に於ける反抗的破壊的態度は、決して自然主義の全體ではない。自然主義は決して徒らに反抗と徒らに破壊するのではない。反抗と云ひ破壊と云ふ以上、必ず其の對象がなくてはならぬ。隨てその對象の強弱如何によつて反抗破壊の態度も定まるわけである。新興自然主義論者の態度が案外に早く穩健化したと視るのは、焉ぞ知らん其の反對象たる舊文藝の基礎が案外に弱く、案外に早く破れたからである。又一方に於て、自然主義論者の主張が、相一致しないのに對する批難もあるが、これは自然主義そのものすら、舊套的の主義主張と同じく固定した同一のプリンシプルによつて成立して居る

如く解するからである。自然主義の主張がその態度——全體としての態度なり、根本精神なりに根底的の一致を有して居て、而も複雑多岐なる差別相を以て發現する所にこそ生命はあれ、同一の綱領を以て之れが統一を求むるが如きは、却て自然主義そのもの、斥くる所である。要するに如何なる批難が

あつても、昨年の論壇に於ける自然主義派の態度は、飽くまでも堅實に、飽くまでも建設的であつたのに、その特色を示して居るので、これあつたが爲めに新文藝の基礎が愈々抜くべからず、揺がすべからざるものとなつたのである。前年即ち四十年に於ける自然主義論の多くが、排技巧、形式打破、幻滅、無解決排論理等の消極的、反動的若くは破壊的態度を取つたが、昨四十年に於ては、それ等の反抗、破壊を経た後の反省、考察が問題の上にも、態度の上にも著しく表れた。

技巧を排し、形式を排し、論理を排し、夢幻を排して、赤裸々なる現實生活の真相に觸れ來つて、そこに痛切なる反省と考察とに進み入つた——それが昨年の論壇に現れた自然主義論者の態度であつた。かくして終に藝術對人生の根本問題にまで進み入つて、究め盡さうとする努力を示した。こゝに至つては、最早自然主義論もその絶頂に辿りついた感がある。隨てその舞臺の中心は一先づ創作家の努力に讓るの外はない。此の掃ひ清められた地盤の上に、如何なる新境地を開展し來るか、偏にわが創作界將來の努力如何に存するので、論壇に於ける新興思潮の結果は既に花々しく勝利の冠を戴いたものと云つてよい。

最後に昨年の論壇に於ける最も力ある活動を示した人を舉

げて見ると、自然主義派の側にあつては、島村抱月、長谷川天溪、岩野池鳴の諸氏が最も代表的である。島村抱月氏が「早稲田文學」に於て發表した「文藝上の自然主義」(一月號)「自然主義の價値如何」(五月號)「藝術と實生活の界に横たる一線」(九月號)の三論文は、藝術上の自然主義に確實な理論的根柢を與へたものとして最も代表的であるし、長谷川天溪氏が「自然主義」と題する一書に纏めた論文は、氏がいかに自然主義論者として思想界のあらゆる方面に向つて痛烈なる論戰を試みたか、窺ひ知る事が出来る。兎に角以上二氏の態度が新興自然主義に對する最も堅實なるものであつて、隨て其のもたらした効果は最も大なるものであつた。更に岩野池鳴氏について見るに、氏は前二氏に比して考察に綿密ならぬ所があり、理路の明徹を缺いた所はあつたが、その代り勇猛無假借の態度に於ては、最もよく新興思想の活力を體現したかの觀があつた。氏の論は「新自然主義」と題する一卷に收められて居る。氏の主張する表象的自然主義の理路にはなほ幾多の矛盾はあつたが、併し斷片的に表白せられた氏の藝術觀乃至人生觀には、驚くべき新心境が見えた。氏も亦最も功勞多き革新者の一人として推奨すべき論者である。以上の外自然主義的立脚地から人生又は藝術を論じて、新興思潮を助けた人には片上天弥生田長江氏等があつたし、異なる立場から新興

自然主義を論評して最も力あつた人には田中喜一、後藤宙外、樋口龍峽氏等があつた。田中樋口二氏の論は「明星」に掲げられた「自然主義論」を以て代表とし、後藤氏の論は「非自然主義」と題する一書に纏められて居る。が、要するに大勢は終に自然主義の勝利に歸して、時代精神の根底に浸み込んだ思潮の流は、如何なるものを以てしても動かすべからざる力となつて實現しつゝあるは争ふべからざる事實となつた。自然主義を以て藝術上の主義と限るか、又は之れを廣く實生活上に及ぼすべきかは、論者によつて主張を異にして居るが、併し事實に於て自然主義の影響が如何に廣く、如何に深く時代を動かして居るかは、心を秘めて現今の青年の思潮を検する者の眼に瞭然たる所で、實生活に對する眞率にして虚偽をゆるさぬ態度、凡てが内省的批判的な態度をそれ等の新らしき時代思潮の傾向は、明らかに新人の新生活を將來に開展せしむるものである。吾人は此の方面に、最も有力なる自然主義の効果を認むるのである。

以上の如く文藝を中心として起つた自然主義の潮流が、浴々乎として時代を動搖せしめつゝある間に、最も直接に人生を救ふると稱する倫理學者、社會批評家、乃至教育學者は何を爲しつゝあるかと云ふに、吾人はその餘りに夢みつゝある事の永きに驚かざるを得ぬ。たゞ此の間にあつて、金子筑水、

### ◎小説壇

に就いて觀るに、矢張り前年の後を受けて、最も視聽を集めたのは此の方面であつた。當初から新興思潮の問題の中心となつて居たのは多く小説の方面であつたので、隨てその効果の最も有力に最も具體的に現れたのも此の方面である。新潮の勃興に對して、舊來の作家の力はいかに弱かつた。論議の上にはさまざまの反駁攻撃が加へられたにも拘らず、事實に於ては、新興思潮の勢力は、その勃興と共に見る／＼文壇の情勢を一變してしまつた。新興思潮に反抗する、若しくは之れを了解し得ぬ舊來の作家は悉く文壇の中心を追はれて、斯壇の中心は全く氣鋭なる新人の手に歸した。が、序論にも述べた如く、新潮の勃興も、その初めに於ては、舊根底を破壊するに力を注ぐ所から、その主張者の態度にも自然反抗的の分子多く、隨て自己の主張のものにも内省を缺く點多く、動もすれば皮相的になり易い傾があつたが、一旦自覺したる上に、その自覺に伴ふ疑惑と動亂とを愈深く經驗するにつれて、眞に意義ある新文藝の根底を確立するに至つた。されば前年に於ては、題材など多く皮相的特長に新味を求めて、その態度の上にもとかく理論をのたために煩はされ勝ちであつた自然派小説も、四十一年に入つては、眞面目に自己

遠藤隆吉、福來友吉等の諸氏が、現實生活を根底とする生命ある研究考察を公にしつゝあるは、最も多とすべきもので、將來此等の諸氏によつて、力ある革新が學界に見らるべきを刮目して待つべき外はない。なほ新進の學者としては白松南山氏等がある。此等の諸氏の主張に於ける現實的傾向が如何に文藝を中心とせる思潮と結合し行くかは、近き將來に於て最も興味ある問題となるであらう。

以上の外昨年の評論壇で記して置かねばならぬ事は、雜誌新聞に毎月の作物を批評する風の盛になつた事、隨て印象的若しくは自己の好惡を唯一の標準とする風の作物批評の盛になつた事である。之れは論者間にも屢々問題となつた事でもあり、事實に於てそのもたらす結果には、どうしても善惡二面の併せ存する所は争はれぬ事であるが、併しかくの如き傾向に、權威ある評家の認識せられると共に、いつかは消滅すべきものは消滅するのであるから、左程に憂ふべき事ではなからう。それに從來の型に囚はれた批評を破る上に、少なからぬ力となる事は認むべきであらう。此の方面に最も有力なる根拠を据えて、少なからず論壇を動かした評家は徳田秋江氏で、氏の「讀賣」日曜附録に連載した「文壇無駄話」は、いづれにせよ新らしく生れた所謂印象批評の代表と見做すべきものであつた。次に

の要求を内察して、自己と作品との間に分厘の隙をもゆるさぬ底の嚴肅なる態度を確持するに至つた。つまり主義と自己との間の缺陷を除去して、主義即自己の境地に進み入つたのである。是に至つて初めて新興自然主義の潮流は、眞に生命ある文藝の根底を成すに至つた。而してその初め多く自然派の皮相的特色に對して種々なる批難攻撃を試みた者も、いつしか口を噤んで大勢の趣く所に頭を屈するに至つたのである。此の點から云ふ時は、自然派の作品の眞の發現は、昨四十年を以て始めとすべきである。作品は最早主義の問題ではなく、自己生命の問題によつて、批判せらるゝに至つたのである、自己生命と作品との關係如何によつては、容赦なく母外へ放擲せられるやうになり、眞劍の氣合を以てなくては、斯界の人たる能はぬやうになつたのである。

さて昨四十一年の小説壇に於て、最も多く視聽を集めた作家はと云ふと、島崎藤村、田山花袋、正宗白鳥、徳田秋聲、小栗風葉、眞山青果の六氏を第一に推さねばならぬ。就中藤村氏の「春」と花袋氏の「生」とは、昨一年に於ける最も偉大な作品と稱せられて居る。「春」は四月以後の朝日新聞に連載せられ、十月一巻に纏めて公にせられたもので、單なる平面描寫と異つて、或一種の氣分——氣分に包まれた人生を書いた印象的作風を以て特色として居る。之れに對すると花袋氏

の「生」は、平面描寫を特色とした所謂普通自然主義の作品である。歐洲に於ける自然主義の歴史に觀るが如き、二派の併立が以上の二作によつて、殆んど時を同じくしてわが文壇に色鮮やかに現れたのは、誠に意味ある現象である。以上「春」の外藤村氏には「壁」「收穫」の二短篇があつて、いづれも其の根本の特色は「春」と相通じたものであつたが、それが短篇であるだけに特色の表れ方が著しかつたので、少なからず讀書界を動かし、花袋氏も「生」の外に數多き短篇を公にし、集として「花袋集」村の人等が出版せられたが、いづれにも通じた氏の特色は矢張り「生」によつて代表せられた平面描寫と云ふ點にあつた。唯一篇一月の「早稻田文學」に發表した「一兵卒」と題する作は、内面描寫と云ふ點で大に注目と惹起したが、成程心理的經過を内面的に描いたと云ふ點に於ては、氏の多くの作品と特色を異にして居るが、併しそれを描く態度の上から見れば、矢張り平面的觀察と云ふ氏の特色の中心と相通する。要するに氏は専ら平面描寫を特色とする普通自然主義の代表作家として將來その發展の上に多大の興味を寄せしめるのである。以上二氏に次いで鮮やかな特色を發揮したのは正宗白鳥氏の短篇である。氏の作は十月發行の「何處へ」に收められた「何處へ」以下十二篇と外に「明日」「二家族」等がある。氏が發揮し來つた特色は、人格的と云ふ點にある。

氏の人格が作の上に明らかに刻まれて居る點にある。新らしき氏の人生觀——一步を積極的に進むればライフの革命ともなるべき新らしき生命に充ちた人生觀が描かれたる人生にエムペディヤされて居る點にある。而して此點に於て氏は最も深く最も強く時代の青年を動かして居る。白鳥氏が此の特色と相通じた所のあるは徳田秋聲氏である。氏の昨年中の作は多く「秋聲集」に收めてある。氏には猶「多數者」「新世帯」等の長篇の作もあつたが、氏の特色は短篇の方に多く出て居る。氏の昨年中の短篇では「老婆」「北國産」「診察」「出産」等が重なる作で、それ等の諸作によつて氏は著しく重視せらるゝに至つた。氏の作が白鳥氏の作と相通する特色を持つて居ると云ふのは、氏の描く人生が何れも、氏の内的經驗と合致したもので、いづれも生活の苦痛に壓迫された弱者の生活である一事である。が、氏はそれ等の人生を描くに凡て消極的である、たゞ描くだけである。白鳥氏には更に一段の自覺と積極的の革命的の反抗とがあるが、秋聲氏にはそれがよい。此點は白鳥氏が一步進んだ時代に入つて居る點である。その代り秋聲氏の作のシンミリとハートに沁みて來るやうな所は白鳥氏にはない。更に白鳥氏と相並んで新らしい時代の讀者を集めた作家には、眞山青果氏がある。氏の昨年中の作は十二月に出た「奔流」に收めてある。集中でも「家鴨飼」「猫屋」の

如きは、昨年の短篇中傑作に數へらるべきもので、いづれも氏の特色を最もよく發揮した作である。氏の特色とする所は、どちらかと云へば花袋氏等同一系統に屬すべき普通自然主義の平面描寫にある。が、たゞ他人の摸し難き力のある、鋭い、サク／＼した筆致と、常にハートを以て眞實に生活に觸れて居ると云ふ點とに、氏の犯され難い領域がある。平面描寫であるが、活々して居る、血の出さうな所がある。これが氏の獨特の長所である。次に氏や花袋氏等と矢張り同じ系統にあつて、平面描寫の純粹を見せて居るのは風葉氏である。氏は從來長篇により多くの特色を持って居たが、昨年は多く短篇に力を用ひて居た。「天才」「戀のめ」の二長篇も單行となつて公にされたが、作の時日は一昨年であるから、昨年には先づ長篇の作がなかつたものと見てよい。氏の昨年中の短篇は「風葉集」に收められた諸作と外に「世間師」等がある。氏の特色は無心湛然たる人生觀照の態度と、描寫の技巧の圓熟とにあるが、その代り動もすれば、その純粹平面描寫の爲めに内容の個性的特色を缺くの弊に陥る傾があつたが、その圓満なる平面描寫の技巧は超然として他を抜いた所があつた。

以上の外昨年中に著しき活動を示した作家には、水野葉舟、永井荷風、小山内薫の三氏があつた。葉舟氏は細微な清新な女性の心理描寫に、其の他の犯し難き特色を認められ、「まみよ」等の諸短篇に於て多數の讀者を得た。なほ氏は小説の外に小品文の作が非常に多く、此の方面に得難き才能を發揮した。氏の小品文は十二月「響」と題する一卷となつて出版せられ、新情緒派の散文詩として、獨特の地歩を得た。因に昨年に於て小説とも詩ともつかぬ一種の小散文が小品文と稱する名目の下に、多くの作家によつて試作せらるゝに至つた事は、そが將來の發展如何によりては、輕視すべからざる現象である。次に小山内薫氏は數に於ては、短篇作家中恐らく第一に位すべき程の活動を見せた。氏の短篇の多くは八月發行の「窓」に收められて居るが、多くはウィットに過ぎる傾があつて愛讀せられるが、深く強く印象を與へる風の作はなかつた。永井荷風氏は永くアメリカ及びフランスに遊んで昨年歸朝し、先づアメリカ滞在の作を集めた「アメリカ物語」を出し、ついでフランス滞在中の諸作を公にしたが、いづれも清新な觀察と、デリケートな情緒又は感覺とによつて、今迄のわが文壇には得られなかつた新情緒派的作風を示し、將來最も有望なる作家の一人と目された。右の外吉江孤雁、秋田雨雀、中村星湖、上司小劍、窪田空穂、三島箱川、岡本鱈華、徳田秋江等の諸氏も多くの好短篇を出したが、此等の諸氏はいづれも其の活躍の頂點を將來に期すべき人々であるから、此處に改めて云ふまい。小栗琴子、岡本田治子、大塚楠緒子、岡



田八千代等の諸女作家もそれ／＼努力を示した。

以上は主として自然派の作家について云ふたのであるが、他の系統に属する作家では、小杉天外、夏目漱石、高濱虚子、小川未明等の諸氏を除いては、これと云ふ程の活動を示した人がない。漱石氏は『三四郎』を朝日新聞に公にした外作なく。天外氏は二三の短篇を公にしたが、何れも失敗の作と稱せられ、現代の實業家をモデルとした長篇『長者星』を讀賣新聞に連載して、本来の實主義的特色を示して居る。虚子氏は國民新聞に長篇としての處女作『俳諧師』を公にして、寫生文の域を脱して、一新境に進み入つた事を示し、なほ數篇の短篇で尙美派的特色を益々明らかにした。未明氏は『北國の冬』『煙突』等の諸短篇の外、『麗日』と題する長篇を東京毎日新聞に公にして、着々として獨特の地歩を確立し行く勢を示した。

次に昨年の小説界に創作の隆盛と相並んで、未曾有の盛大を示したのは、歐洲大陸の近代名作の翻譯である。單行として出版せられただけでも松本雲舟氏譯『何處に行く』(原作シエンキウツチ)クラウ・グデイス)相馬御風氏譯『その前夜』(原作ツルゲーネフ)オン・ジ・イーブ)長谷川二葉亭氏譯『血笑記』(アンドレ・エフ)及び『浮草』(ツルゲーネフ作)ルーディ(德田秋江氏譯)生ひ立ちの記』(トルストイ)戸張竹風泉

前々年來小説界を中心として、花々しき革新が行はれつゝあつた間に、依然として舊套の囚ふる所となつて、日一日と好尚の中心を遠ざかりつゝあつた詩壇が、突如として革新の火燃を揚げた一事は、昨四十一年の文壇に於ける最も目覚ましき現象である。二三年來岩野泡鳴氏等を先達として自然主義的表象主義と云ふ旗印の下に、わが詩歌の内容的革新が叫ばれ、それが片上天弦氏等の『詩歌の根本疑』、即ち内容の機微と詩歌の制約との矛盾問題となり、一方には又島村抱月氏の詩歌の用語としての口語論及び川路柳虹氏の口語體の詩の試作となり、兩々相混じて終に昨四十一年に至つて、相馬御風氏の制約の破壊及び口語使用論、それより進んで内容的自由詩の主張論となり、更に五月の『早稲田文學』誌上に於ける同氏の主張を具體化する『瘦犬』の試作及び三木露風氏の『暗い扉』の二篇となつて實現せられ、次に泡鳴氏及びR.L.O.、服部嘉香、蒲原有明等の諸氏の論戦となり、此の問題を中心として初めて詩歌の根本的革新が運動となつて現はるゝに至つた。御風氏の『早稲田文學』二、三、四の三箇月に亘つて掲げた『自ら欺ける詩界』『詩歌の根本的革新』等の諸論文、之れに對する泡鳴、嘉香、B.L.O.氏等の論議と、柳虹、泡鳴、露風、嘉香、御風等諸氏の散文詩及び自由詩の試作は、兎に角昨年に於ける詩歌革新の中心であつた。無論その發展は未だ

鏡花氏共譯『沈鐘』(ハップトマン)筑山正夫氏譯『長恨』(トルストイ)クレネツエルンナタ)瀬沼夏葉譯『チエホフ傑作集』吉江孤雁氏譯『ツルゲーネフ短篇集』内田魯庵氏譯『復活』(トルストイ)昇曙夢氏譯『白夜集』等を初めとして其數多く、その他毎月の雜誌に發表された短篇の翻譯は無慮二百を以て數ふべき盛況を呈した。而も其等の忠實なる翻譯が何れも從來に比して數倍の讀者を有するに至つた事、就中ロシアを第一として歐洲大陸近代の作品の多かつた事等の事實は、如何に新興自然主義の勃興が人心を開拓するに力あつたかを示すもので、なほ加ふるに此等の深刻なる現實生活本位の文藝の翻譯が如何にわが精神界を改新しつゝあるかは大に注目すべき問題であらう。之れを要するに昨一年に於てわが文壇が、著しく眞面目の度を加へ來つた事は何人にも認め得らるゝ所て、小説も從來の如く遊戯視されなくなつた事も顯然たる事實である。強めて云へば、初めて眞の文藝がわが國に出て來たかの觀がある。たゞかゝる中にも悲しむべきは國木田獨歩、川上眉山二氏の訃である。獨歩氏は六月二十三日茅ヶ崎南湖院に逝き、眉山氏は同月十五日牛込天神町の自宅で自殺した。

◎詩壇

將來の事に屬するから、その價值如何は論ずべきでないが、新人の努力は行く所まで行かねば止まぬであらう。而も昨年だけでも、既に詩界の半ばは其の傾向を示すに至つたのであるから、近き將來に於て何等かの確實なる効果の得らるべきは疑ふべからざる事實である。以上の外昨年中に著しい活動を示した詩人は、蒲原有明、兒玉花外、平木白星、河井醉茗、前田林外、北原白秋、加藤介春、人見東明、福田夕暎の諸氏で、海田流菫氏は至つて作が少なかつた。詩集には有明氏の『有明集』泡鳴氏の『闇の盃盤』御風氏の『御風詩集』等て、吉野臥城氏は『明治詩集』を編纂して公にした。その他上田敏析、竹藜峯、内藤水程、茅野蕭々及び岩野泡鳴等の諸氏によつて、エルレイン、エレンデア、デニメル、メタリンク、イエツ、コツペ、ホイットマン等の作が譯出されて、少なからず新詩界に益を與へた事も忘れてはならぬ。なほ櫻井天壇氏の『獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義』と題する論文は新興詩歌革新問題に向つて、少なからぬ參考となつた。以上述べた外に與謝野寛氏の經營に係る雜誌『明星』及び河井醉茗氏主幹の雜誌『詩人』の廢刊するに至つた事は詩界に非常な損失である事を記して置かねばならぬ。次に戯曲の方面について述べなくてはならないが、これは坪内逍

進氏の新曲を集めた『金毛狐』、真山青果氏の『レゼンドラ』、『生れざりしならば』及び森鷗外氏の最近の歐洲に於ける脚本の翻譯四五の外、これと云つて注目すべき作もなかつたから、別に云ふべき程の事も無い。上來述べ來つた如く小説壇から進んで詩壇に入つて、盛に革新の實が擧げられつゝあるのに、獨り戯曲の方面のみが、此の衰狀を呈して居るのは誠に悲しむべき事で、將來此の方面にも新人の新努力を注がれん事は衷心から希望する所である。

最後に記して置くべき事は、文藝作品取締問題が、昨年に至つて著しく激度を加へた事である。昨年中に風俗壞亂の名の下に發賣を禁止され、又は發行を停止された書籍及び雜誌の重なるものには、生田榮山作『文藝俱樂部』、所載の『都會』、小栗風葉氏作『戀ざめ』、草野柴二氏譯『モリエール全集』、飯田旗軒譯『ラザレ』等を始めとして其の數はなかく、少なくなかつた。昨年に至つて諸新聞が競うて文藝界の記事を載すやうになつたのを見ても察せられる如く、文藝と社會との接觸が、新文藝の勃興と共に著しく密になつて來たのは事實で、隨て文藝對社會の問題が當局者の間に嚴密に處理せられるやうになるのも當然の事であるが、併し徒に皮相なる社會的又は法律的立脚地から、文藝作品に制裁を加へると云ふ事は、嚴密なる討究を要すべき問題である。文藝對法律の問題が起

るのは當然である。而して此の文藝取締問題の方策として、長々川天溪氏等を初めとして、文藝院設立問題が提議せられるに至つた。が、別に具體的の解決もなくして昨年は暮れたのであるが、これはどうして何等かの方法で近き將來に於て解決せられねばならぬ重大な宿題の一つである。

### 第七章 教學

昨一年間に於ける我が教學界の狀勢は、これを昨年乃至前々年のそれに比して未だ著したる變化發展を示して居らぬ。願ふに彼の三十七八年の嚆矢が我が人文の發達に取つて如何に深大な因縁的勢力をなして居るかは、殆ど吾人が思議豫想の上に出で、居る。その結果影響のはたらき及ぶところ、廣さに於いて所謂物質的及び精神的文明の全幅に亘れるは言ふまでもなく、深さに於いてまた實に國民的品性乃至民族性そのもの中心生命にまでも觸れ到つて居る。大體に於いて三十九年以來の我が精神的文明を會得せんとするには、是非とも日露戰爭のこの深さの方面に於ける結果影響を念頭にしておかざることを忘れてはならぬ。

新日本創業半世紀間の歴史は、疑ひもなく歐西乃至世界文明に對する一箇有力なる適者の歴史であつた。併しながら、

國は、凱歌を奏し來たる過去半世紀間の新日本史は、乃至更らに進んで建國三千年來の日本歴史そのものは、果たして我が民族が行く末ともに歐西乃至世界文明に對する一箇有力なる適者たるべきことを豫言し得てあらうか。少なくとも現在我が一部國民の抱負し、また一般國民の等しく抱負せんと欲する如く、我が民族が將來世界文明の霸王たり、若しくは師素たり得べきことを保證して餘りあるであらうか。固とより斯くの如きは、文字通りの意味に於いては問題たるべき資格に於いては缺けて居る。何人もこれにむかつて正當に答へ得る筈はなく、またまぢめに答へんと欲する者もなからう。既往の事實に徴せられる我が民族の力量如何、その答案の上に成り立つ我が民族將來の運命如何、吾人の間はんんと欲するところは斯くの如き過去及び未來に屬する事實上の判斷ではない。既往は、吾人の判斷如何に拘はらず既に往いて如何ともしがたい將來將た全知全能ならぬ人知人力のみの決定し得るを必しがたい。たゞ、これまで、どうあつたにもせよ、またこの先きどう成り行くであらうにもせよ、現在の我が國民には現在の我が國民としてものが將來の運命に對する要求がある、否、なくてはならぬ。即ち現在の我が國民には現在の我が國民としての國民的抱負、國民的理想がなくしてはならぬ。吾人の間はんんと欲するところは即ちこの國民的抱

負、國民的理想の健全如何である。現在の我が國民は、果たして、どの自覺、どの自覺、どの自己批評を経たる國民的抱負、國民的理想に生きてゐるかといふ事である。若し我が國民にして我れと我が將來を呪阻せんと欲せば已む、苟くもこれを祝福せんと欲する以上、現在の我が國民的抱負、國民的理想には尙ほ甚だしく自覺、自己批評の不足せる憾みはないか。過去半世紀間に於ける新日本の創業史、更らに進んで建國三千年來の日本歴史そのものは、いかに、我が民族が世にも頼母しき性能を有することを證示してゐる。しかも、さばかり心強き過去の成績なるにも拘はらず、即ちその民族的性能のあらゆる頼母しき歴史的證を以てして、尙ほ且つ我が國民はその前程に全く新たな一大試練を差し控えて居らぬか。從來の我が國民が未だ曾て通過せず、しかもこれを通過せざる限り到底廿世紀世界文明の未済試驗者、やがて落伍者たるを免れざる底の重大なる一試練を差し控えて居らぬか。而して現在の我が國民的抱負、國民的理想はその自覺、この自己批評を没却した上に成り立つて居る淺はかな抱負、理想ではないか。頼むべからざる歴史的保證を頼んで當然覺醒すべき對將來の不安を覺醒せず居るのが即ち現在の國民的抱負、國民的理想ではないか。言ふまでもなく吾人はこゝに國民的抱負、國民的理想といふことを抽象的な觀念思想

としての意味に使つて居るのではない。吾人の所謂國民的抱負、國民的理想は、これを言ひ換へれば國民的要求、國民的生活に外ならぬ。いかなる場合に於いても要求ならぬ抱負はなく、生活ならぬ理想はない。抱負や理想は要求や生活以外乃至以上のものにてあらぬことは言を俟たぬ。但だ所  
 需要求や生活はその本來の面目に於いて動的な、發展的なものであると同時に、その内容が幾多の因子の複雑なる體統的關係から成り立つて居る。斯くして思想先づ往いて實行これに隨ふといふのが個人の場合に於けると等しく社會の場合に於いてもその要求や生活の行はれる大體の方式である。ところが社會の場合に在つて所謂實行方面を代表する因子は言ふまでもなく政法經濟乃至普通道德等の文明現象であらう。また所謂思想方面を代表する因子は言ふまでもなく文藝哲學乃至宗教等の文明現象であらう。これを精神的文明と謂ふべくんばこれは實際的の文明とも謂はれよう。而して所謂精神的文明は所謂實際的の文明に對してその先覺者たり總がてその嚮導者たる位置にある。この意味に於いて一國の所謂精神的文明はその國の國民的抱負、國民的理想を代表して、その國の國民的要求、國民的生活を訓化し、教導すべき位置にある。所謂教學界は即ち所謂文藝界と共に所謂精神的文明の全野を兩分して、他が實る感情本位の大體を占領せるに對し、寧ろ理

智本位の大體域に根據して、この訓化教導の任を全うすべき最要衝に當たつて居る。蓋し個人の場合に在つて、感情は理智に先立ち、而して理智はまた意志實行に先だつてはたらくを常とする如く、社會の場合に在つても、感情を本領とする文藝方面は理智を本領とする教學方面に先立ち、而して理智を本領とする教學方面はまた意志實行を本領とする實際的の文明方面に先だつてはたらくを常とする。すなはち文藝方面は急進的にして社會進歩の先鋒をつとめ、教學方面は漸進的にしてその中軍をつとめ、而して實際的の文明方面に保守的にしてその殿軍をつとめを常とする。斯くして新人生觀、新道德、新宗教、新文明等、即ち凡そ新生活の第一聲は先づ文藝方面よりして叫び出でらるゝが古來の常例である。但だ併しながら、この場合に於いても時の先後は必ずしも直ちに價値の優劣を意味するものではないことは言ふまでもない。却つて緩急の差は難がて醇駁の差に外ならず、先後の差は難がて單複の差に外ならぬとも謂ひ得られる、少なくとも斯く謂ひ得られる場合は罕れでない。即ち教學方面の第二聲は文藝方面の第一聲よりも、而してまた實際的の文明方面の第三聲は教學方面の第二聲よりも、一層醇粹にして一層複雜なるところにその第一聲ならず、第二聲ならずの積極的意義をもつて居る要するに社會的の各機能の間に在するこれらの差は、多くは

その分業的關係の當然の結果に外ならぬのであるから、ものが先聲者たるの故を以て偏へて後聲者たる他を貶するわけには行かず、またものが駁雜單純ならざるの故を以て偏へて先聲者たる他を貶するわけにも行かぬ。まづめに相警醒し、相批評し行く内に各自の發達は期待せられ、やがて社會といふ全體統の發達も期待せられる。たゞ最も警めねばならぬ事は、先聲者たるものが偏へて新に倣して駁雜單純の弊に墮するを自覺せざること、及び後聲者たる者が偏へて他が駁雜單純の弊を認めて、その先聲者たる所以の積極的方面を評價せず、頑迷固陋の弊に墮するを自覺せざることである。而して昨一年間の我が精神的文明を回顧するに當つて、吾人はこの遺憾の頗る切なるを覺ゆる。

昨一年間に於ける我が精神的文明の最も顯著なる現象は何であつたかを問はば、言ふまでもなく文藝方面に於ける所謂自然主義的運動乃至傾向であつたと答へねばならぬ。然らばその中の所謂教學界分内の最顯著なる現象は何であつたかといふに、取りも直さず文藝方面に於ける所謂自然主義的運動に對する批評であつたと謂はねばならぬ。而してその批評なるものが、殆どすべて吾人が前節に叙べた所謂後聲者の聲を脱せざるものであつた。所謂自然主義を主張する個々の人々の個々の言説乃至作品がどうあらうにも拘はらず、兎も

角も所謂自然主義的傾向が我が最近の文藝上に於ける一箇顯著なる事實現象であつたことは否されぬ。而してその顯著なる事實現象なるものが兎も角も我が新代文藝家の腹藏なき興味要求に淵源由來したものであつたことも否されぬ。尤づこれだけの事實をなるとも諒として、さて所謂自然主義を本氣に、まづめに主張する個々の人々の個々の言説乃至作品を觀味せんか、大抵の人なら大體に於いて兎も角もそこに一種親切なる氣分の横たはれるに氣付くであらう。而して之れ品の質の大小高卑深淺厚薄精粗醇駁等の詮義をば姑らく措いて、兎も角もその氣分なるものが少なくとも我が國の文藝史上に於いては未だ曾て提供せられざりし底の一種の新味を帯べることに氣付くであらう。この氣分は何であらうか。所謂自然派文藝乃至所謂自然主義的傾向を批評せんとするに當つて、最も忽がせにすべからざる一事はこの氣分を正當に理解することであらう。而して所謂自然主義主張自身が如何やうに意識して居らうにも拘はらず、吾人はこの一種新生の氣分を以て、感じ、心もち乃至氣分を尊重せんとする態度乃至覺悟の顯現なりと謂ふに躊躇せぬ。而して感じ、心持乃至氣分を尊重せんとする態度は、これを主觀的に言へば充分なる意味に於ける自重自尊の態度であつて、これを客觀的に言へば最も合理的なる生活様式である。感じ、心もち乃至

氣分を尊重せんとするにも優つて完全なる態度があらうか。感じ、心もち乃至氣分を尊重せんとするにも優つて、自覚ある生活があらうか。生き甲斐ある生活を生くる唯一の途は、感じ、心もち乃至氣分を尊重するの一途に盡きてゐる。世に氣分を犠牲にして購ふべき價値はなく、氣分の爲めに犠牲に供せざるべからざる價値もない。氣分の承認を外にして眞を説き、美を説き、善を説き、福を説き、徳を説き、義務を説き、愛を説き、道を説く如きは眞に徒爲である。一切の實行は氣分の承認を俟つて存在し、一切の價値は氣分の承認を俟つて成立する。徹底的に氣分に生活する者にして、始めて遺憾なき生活を生活する者と謂へる。偉大なる事業、偉大なる人格は、能く氣分を尊重することによつてのみ成就せられる。而して、吾人の見るところを以てすれば、我が民族の最大痼疾は、氣分を尊重するの覺悟に缺けて居ることである。氣分を尊重するの價値を解せざることである。遠くは建國以來、近くは新日本創業以來の異彩ある歴史を以てして、我が民族が未だ偉大深強なる國民的品性乃至文明の實現的努力を経験して居らぬのも、眞に氣分を尊重するの價値を解せざるに職由して居るとも謂へる。しかし、既往はどうにもあれ、吾人は今やこの痼疾を自覺して、民族性上の根本情調に一大變革を施さねばならぬ時期に到達してゐる。性情教育、即ち氣分

感化の效力最も著しきかるべき文藝の上に、假令今のところ尙ほ極めて未熟不完全なるにもせよ、兎も角もこの自覺の動き來たれることは、頗る張膽明目すべき事象であつて、苟くも世道人心に志ある我が現在の教學方面の人士の如き、この機運を明察して、これをして健全なる發達を遂げしめるよう努力せねばならぬ。然るに昨一年間に於いて、文藝上の新氣運に對する我が教學方面の多數者の態度は、頗る不親切不聰明であつたといふ批難を免れない。併しながら、所謂自然主義的傾向に對する態度如何の如きは、吾人のこゝに關せんとする要事でない。昨一年間の我が教學界を回顧して、吾人の先づ最も感慨思量多く覺ゆる一事は、我が教學方面の多數者が、いかに無自覺無生命の状態にある事である。所謂自然主義的傾向に對する態度如何の如きは、眞に吾人が便宜のために取り出でたる事例上の一端に過ぎない。しかも、窮乏は、しばしばまた少數先覺者が義憤に燃えて喚起するの時である。昨一年間に於ける我が教學界は、多數者の無自覺無生命が殆どその極度に達せんとして居ることを示して居る。この意味に於いて我が教學界もいよいよ革新的の必要に迫まつて來たことを消極的に自白してゐる。而してこれを外にしては昨一年間に於ける我が教學界に就いて吾人は特に史述するに

値ひするほどの事實を見出だし得ない。若し夫れ少數の人士の夙くすでに覺醒の途に上ほらんとする者がないては、ないが、而してそれら少數者の態度には眞に識者の刮目を要すべきものがないではないが、更らに而して『個人主義の盛衰』(太陽九月號)『現實生活の興味』(早稲田文學三月號)『生活の情味』(中央公論七月號)『三個の疑惑』(同上十月號)『西洋近世思潮』等に窺はれる金子筑水氏、『ソクラテスの使命』(倫理講演集六月號)『家族主義に對する疑問』(中央公論九月號)『獨立自治の氣象』(教育學界二月號)『平民生活』(同上六月號)等に窺はれる藤井健治郎氏、『基督教の起源』その他に窺はれる波多野精一氏、『理想の意義』(青年評論八月號)其他に窺はれる田中喜一氏、『本能を利用せよ』(東亞の光六月號)『暗示の話』(同上九月號)其他に窺はれる福來友吉氏、『社會情調と教育』『發言と表情』及び『東洋倫理學建設の必要』(倫理講演集七月號)その他に窺はれる遠藤隆吉氏、『懷疑思潮に就て』(教育學界六月號)『個性主義に就て』(倫理講演集五月號)『主知的の日本人』(同上二月號)等に窺はれる朝永三三郎氏、『倫理學者の態度を疑ふ』(倫理講演集一月號)其他に窺はれる北澤定吉氏、『何ぞ進みて自ら取らざる』(倫理講演集八月號)その他に窺はれる高島平三郎氏、『不可思議力のみなもと』(早稲田文學八月號)『氣分を尊重するの說』(同上十一月號)等に窺はれる

白松南山氏、『現代弊風の矯正』(新小説九月號)その他に窺はれる谷本富氏、尙ほこの上にも算へられぬではないことは言ふまでもなけれど、中んづく例へばこれらの人々の態度の或部分の如き、即ちまたその中に算入せらるべきものであるが、しかもそれらは要するに未だ教學界所屬の個人的活動現象たるにとどまつて居つて、教學界其もの事實勢力とまではなつて居らぬ。但だ併しながら、たとひ教學界そのもの、事實勢力とまではなつて居らぬにしても、即ち氣運、傾向乃至運動とまではなつて居らぬにしても、而してまた例へば上に擧げたやうな人々だけに就いて言ふも、吾人の間に種類及び品等の容易ならぬ差別はあるとしても、尙ほ且つ吾人の所謂「少數者の態度の或部分」の間には、ちのづから一種通有の特徴が尋ねられる。それは何であるかといふに、明らかにこれを言ひ表はすことは容易でないが、謂はゞ充分なる意味に於ける主情主義的、個人主義的、人格主義的、經驗理想主義的、現實的、具體的思想乃至興味の發達と概稱するも大過ない。而して大體に於いて人生の解釋に正當に歩を進めんとする態度たるを失はないが、尙ほ最も飽きたらず思はるゝ一事は、極めて少數の人士を外にしては、この態度が自我の情意生活そのもの、實行生活そのもの、最根柢にまで深か入りするに至つて居らぬことである。未だ多分に理智思想乃至單なる感

情の範圍にとどまらず居つて、自我そのもの、中心生命を動かすにまで至つて居らず、隨つて研究にもあれ主張にもあれ、生命の充實したものと成つて居らぬことである。蓋し、吾人の見るところを以てすれば、我が教養界は、一たび根本的に刷新改造せらるべき必要がある。即ち眞の意味に於ける宗教的洗滌を受ける必要がある。而して昨今すてにその必要の時運に迫りつゝある。顧みて昨一年間の教養界を回顧して吾人は覺醒的點光の閃々として闇を射來たるものあるを散見すると同時に、その多くは尙ほ反照的たるにとどまり、眞に自發的なるもの極めて乏々たるを感ぜざるを得ない。

これを前にしては哲學雜誌六月號に於ける有賀長雄氏の「日本國民の精神上の疑問」、これを後にしては「倫理講演集」九月號に於ける横井時雄氏の「我國德育の前途」等を代表的發聲として儒教復活論が下半期教養界に於ける一つの顯著なる新現象であつたこと否されぬ。併しながらこれは所謂自然主義的傾向を中心とする急進的風潮に對する一つの反動的現象たる以上何ほどの積極的意義をも發せざるものであつて、現代の眞要求を會得せざる單純なる懷古的興味の發顯に過ぎなかつた。横井氏の主張の出た同じ誌上に併せて發表せられたる下西倫理會員諸氏の「右に對する意見」が進んで賛成加擔するにあらず、また進んで反對拒斥するにもあらず

子筑水氏の「プラグマティズムの要旨及び批評」(早稲田文學十一月號)の如きは中にも有力なる紹介であつたが、一般には未だプラグマティズムなるもの、眞相眞價が極めて不完全にしが了解せられてゐないらしい。蓋し、プラグマティズム主張者自身がどういふ様に意識して居るかをば姑らく指して、兎も角もプラグマティズムなるものが思想界の興味を喚起する一つの新運動と成り來たれる所以の中心動力はどこにあるかといふに、少なくともその一つは、プラグマティズムの主張者自體が一種の時代的新價值乃至新生命を深く強く感得して居るといふところに存することは疑はれない。謂はば徹底的なる主情主義、主觀主義乃至個人主義の自覺である。而してこれは英のシラー氏に於いて特に著しい。この一事を看のがす限りプラグマティズムの眞相眞價は完全に了解せらるべきものでない。これを偏へに實際主義、實用主義乃至主行主義に過ぎぬものと見て、容易に儒教乃至日本思想との觀念を説く如きは、膚淺の見たるを免れない。然るにプラグマティズムに對する昨一年間に於ける我が教養界の多數者の評價は、未だこの膚淺の見を出てなかつた。教育界に於ける個性本位的乃至特殊的教育主義が漸く勢ひをもつて來たのも、また昨一年間の我が教養界に於ける顯著なる現象の一つであつた。是れ將た我が文藝界に於ける所謂自然主義、また彼の

ぬ、謂はば親切なる批評的態度を執つてゐるのは、すてに我が教養界の大體の態度を代表し得たものとも見られる。蓋し、吾人の見るところを以てすれば、儒教の價值は主としてその人生觀の穩健着實なるところに存する。而してこの穩健着實なる人生觀を味ひ、この穩健着實なる氣分に觸れることは、現代の我が國民のみならず何れの時代の何れの國民に取つても、望まじき一個の修養道たるを失はぬ。但た我が現代の眞要求より言へば穩健着實なる品性の涵養も必要には相違ないが、しかし何よりも必要なのは、深く強き品性の涵養ではなにか。吾人はこの意味に於いて前年の「太陽五月號」にあらはれし長谷川天溪氏の「反基督教的的精神」に理智以外言説以上一種尊敬すべき價值生命の發揮せられたるを徳とすると同時に「基督教の起源」に於ける波多野精一氏の原始基督教の熱誠なる紹介を徳とする。一種の新生命を感得して、そのために他何のものをも犠牲にして辭せざりし原始基督教宣傳者の狂熱的確信の態度は、その内容に立ち入つての批評をば姑らく措き、兎も角もその主觀の承認せる絕對價值に殉ぜし無限確信の態度そのものに於いて、原始儒教よりも我が現代の眞要求に取つて遙かに深切有力なる教訓者たる資格を有する。プラグマティズムの呼び聲の高まつて來たのも、昨一年間の我が教養界に於ける顯著なる現象の一つであつて、全

哲學上のプラグマティズム等を緩急醇駁の差別こそあれ、詮ずるに同一氣運が教育界に發顯し來たれるものに外ならぬとも見られる。而して當年谷本富氏の「新教育學」系統的的教育學等に於ける主張が、またこの氣運を助成するに與かつて力ありしことは疑はれない。及び主意的心理學に根據せるライ、モイマン氏の所謂實驗教育學が昨年の我が教育界に於いて目醒ましき勢ひを以て紹介せられたのも、昨一年の我教養界に於ける顯著なる一現象であつて、而してこの現象もまた教養界全般上の新氣運の一發現に外ならぬと見られる。若し夫れ牧野文相によつて提出せられたりし發音本位の假名遣改定案が大體に於いて我が教育界に於ける識者の熱心助成せんとせしところなりしにも拘はらず、小松原氏が替はつて文相となるに及び、忽ちにして撤回せられたりしは、その事實上の利害得喪はどうあらうにもせよ、昨年の我が教育界に於ける一失脚として特記せねばならぬ。轉じて昨一年間に於ける我が基督教界及び佛敎界の狀態の如きに至つては、音も香もなく消を行かんとする者の狀態であつたといふの外、取り出して史述すべき何事もなかつた。殊に基督教界の如き、前年の舊國青年大會なるものが、内的、精神的現象ならぬ外的、社會的現象たるに過ぎざりしことを遺憾なく實證した。たゞ前年のから騒ぎ、附け景氣に比照し來たつて落莫空虚の感は

殊に深い。最後に、吾人は、多数新代國民の心事の昨年に於ける代表的發聲として、木山熊次郎氏の「求めたり、されど與へられず」(倫理講演集五月號)を閉却するわけには行かぬ。生活問題を中心として物質的並びに精神的に幾多の人生問題に煩悶苦惱しつゝあるは、最近時我が新代人の間に於ける著しい現象である。木山氏の右の一文は取りも直さずこれを赤裸々に告白せるものであつた。而して、高島平三郎氏の「何ぞ進みて自ら取らざる」(倫理講演集八月號)は、實にこれに對する舊代人乃至道學者流の態度を極めて大膽に代表したものであつた。而かも一道の眞率請實の氣が深く強く讀者の肺腑を動かし來たるものあるは、所謂舊代人乃至所謂道學者流の態度を超越して、逆しまに新代人の本城を奪はんとせる者であつた。昨年の教學界に於ける一大文字として特記せねばならぬ。而して同じ傾向に對する新代人の態度を最もまぢめに、本氣に代表せるものとして吾人は先づ擧げに掲げし金子筑水氏の「現實生活の興味」その他を推さねばならぬ。これを要するに、昨一年間に於ける我が教學界は、未だ多事ならず、而かも是れより將に多事ならんとする機運がこの各方面に稍々として動きかけて來たといふ状態にあつた。

### 附記

一、明治四十一年史は、社會の方面に亘つて記述する積であつたが、紙數の少いために、或部分は、省略せねばならぬと成つた。

一、殊に遺憾とするのは、美術界の現象を記載する餘地の無いとある。昨年の美術界は、特に稱すべきほどの活動も爲さなかつた。文部省展覽會開設の時に、玉成會派と正派同志會とが、暗闘を試み、其の結果、玉成會派は特別に展覽會を開き、公設會場には出品しなかつた、と言ふやうの事實もあるが、それは詰らぬ衝突で、寧ろ歴史に貽さぬ方が宜しいかも知れぬ。併し洋書や彫刻の方面には、新しい空氣が出てゐた。其れ等の點は、他日更めて詳述するにしよう。

一、文藝と教育との方面には、記すべき事實がまだ多い。されど大勢を傳ふるが主であるために、些細の出來事は多く省略して、これ等は他日更めて追加するにしよう。

一、本編は數人の記者が分擔して起草したのであるから、文體は一致して居らぬ。併し互に衝突なきやうに、調和を計つたから、相互の連絡關係を見るには何等の障りも無い。



## 新進名家投票募集

本誌は最新案にして最も公平と信ずる左の方法に依りて本邦新進の理想的代表的人物を各方面より一名宛二十五人の選定投票を洽く江湖に募る



### 投票すべき項目

- (1) 總理大臣適任者一名
- (2) 韓國統監適任者一名
- (3) 參謀總長適任者一名
- (4) 聯合艦隊司令長官適任者一名
- (5) 外務大臣適任者一名
- (6) 内務大臣適任者一名
- (7) 大藏大臣適任者一名
- (8) 文部大臣適任者一名
- (9) 鐵道院總裁適任者一名
- (10) 民間經濟界の重鎮一名
- (11) 政黨首領適任者一名
- (12) 學術界の泰斗四名(醫、理、工、哲各方面より一名づつ)
- (13) 文藝界の泰斗四名(創作、評論、美術、音楽各方面より一名づつ)
- (14) 宗教界の泰斗三名(神、佛、耶各方面より一名づつ)
- (15) 理想的新聞雜誌記者一名
- (16) 梨園の泰斗一名
- (17) 未來の横綱一名

◎投票の規則

- (1) 投票は本誌より始まり四月十日を以て締切とす。
- (2) 投票用紙は本誌巻末に特定せるものに限る。用紙は本誌より四月號まで(定期増刊二回を含む)毎號各冊の巻尾に附す。投票者は此れに記入し切斷して送らるべし。
- (3) 投票は郵送と否とを問はず必ず封書とし「太陽投票掛」と記入すべし。但し投票者の住所姓名及び投票時日は必ず記入せらるべし。又字體は總て明瞭なるべし。

◎投票の結果

- (1) 投票點數は每號之れを發表し最後の結果は五月一日發行の本誌上に發表す。
- (2) 當選せる廿五名家に對しては來六月十五日發刊の「博文館創業紀念號」の全紙を獻けて之れを表彰す。
- (3) 右「紀念號」には當選名家の平生、風采、意見、作品等を掲げて沿く江湖に紹介す。
- (4) 當選廿五名家には左の紀念品を贈呈す。

金製頌徳盃

(5) 本誌は更に投票適中者五十名に圖書切符

總額五百圓

を分配す。即ち最後の投票結果と符合したる投票者を第一等とし金五十圓券を呈す(但し皆當者なき場合は最も多く適中

六人(十五圓券)第四等十五人(十圓券)第五等三十人(五圓券)に區分す。但し適中者規定數に超過する場合は投票到着順を以て規定の數を選び、其の以下は次の等級に送るものとす。

◎投票者への參考

新進名家の投票は現在既に適任の地位に在りて活動せらるる名流を除き、各方面の活動舞臺に於いて朝野の別なく、代表的また理想的名家を選ば、如何と言ふ趣旨に本づく。去れど餘りに漠然たるが故に、左に投票者への參考として數項を掲ぐ。但し投票者の之れに據ると據らざるは自由也。

- (1) 總理大臣適任者としては左の諸氏の如し。  
山本權兵衛君 ▲寺内正毅君 ▲後藤新平君 ▲清浦奎吾君 ▲大石正巳君 ▲原敬君 ▲其他
- (2) 韓國統監としては左の諸氏の如し。  
桂太郎君 ▲長谷川好道君 ▲徳川家達君 ▲高島綱之助君 ▲渡邊國武君 ▲其他 統監としては伊藤公の外は何人も皆な新進と謂ひ得べし。
- (3) 參謀總長としては左の諸氏の如し。  
福島安正君 ▲宇佐川一正君 ▲上原勇作君 ▲井口省吾君 ▲松石安治君 ▲松川敏胤君 ▲柴五郎君 ▲其他
- (4) 聯合艦隊司令長官としては左の諸氏の如し。  
上村彦之丞君 ▲島村速雄君 ▲三須宗太郎君 ▲出羽重遠君 ▲坂本俊篤君 ▲八代六郎君 ▲加藤友三郎君 ▲其他

(5) 外務大臣適任者には左の諸氏の如し。

- 都筑馨六君 ▲内田康哉君 ▲伊集院彦吉君 ▲山座圓次郎君 ▲鳩山和夫君 ▲高平小五郎君 ▲珍田捨己君 ▲本野一郎君 ▲栗野慎一郎君 ▲其他
- (6) 内務大臣としては左の諸氏の如し。  
金子堅太郎君 ▲大浦兼武君 ▲松平正直君 ▲床次竹次郎君 ▲古賀康造君 ▲關清英君 ▲其他
- (7) 大藏大臣としては左の諸氏の如し。  
目賀田種太郎君 ▲若槻禮次郎君 ▲高橋是清君 ▲三島彌太郎君 ▲森本駿君 ▲武富時敏君 ▲其他
- (8) 文部大臣としては左の諸氏の如し。  
島田三郎君 ▲岡田良平君 ▲上田萬年君 ▲澤柳政太郎君 ▲高田早苗君 ▲鎌田榮吉君 ▲竹越與三郎君 ▲其他
- (9) 鐵道院總裁としては左の諸氏の如し。  
平井晴二郎君 ▲長谷川謹介君 ▲大屋權平君 ▲片岡直温君 ▲仙石貢君 ▲牛場卓藏君 ▲古市公威君 ▲其他
- (10) 民間經濟界の重鎮としては左の諸氏の如し。更に具體的に言へば洗滌男の承繼者たるべき名士は誰れぞ。  
添田壽一君 ▲中野武營君 ▲園田孝吉君 ▲莊田平五郎君 ▲益田孝吉君 ▲其他
- (11) 政黨首領側に立つべき人は例へば左の如し。  
伊東已代治君 ▲犬養毅君 ▲長谷場純孝君 ▲元田肇君 ▲加藤高明君 ▲尾崎行雄君 ▲其他
- (12) 學術界の泰斗とは、現に帝國學士院會員たる大家を除き近き將來に於いて、

醫學界。理學界の泰斗たるべき名家の意也、各方面より哲學界。工學界一名宛即ち四名を掲げよ。

- (13) 假りに藝術院なる者設立せられ、創作界、評論界、美術界及び音楽界より理想的人物を會員に推選するとせば誰人なりや。此の方面には既に第一流の大家たる地位に在る人を除く。また各方面必ず一名づゝならざるも可なり。
  - (14) 神、佛、耶三教各方面より、將來の宗教界に活動すべき人々は誰れなりや。例へば左の如し。  
大谷光瑞君 ▲釋宗演君 ▲海老名正君 ▲本多磨一君 ▲千家尊福君 ▲其他
  - (15) 理想的新聞雜誌記者とは説明を要する迄もなく、社會の木鐸たるべき名家の也。
  - (16) 人格技能共に俊秀なる新進俳優は誰れぞ。假りに帝國座建設せられたりとして、其の座頭たるべき適任者は誰れぞ新舊兩派の別なく讀者の希望する人を挙げよ。
  - (17) 未來の綱綱たる力量人格共に優たれる候補者は誰ぞ。
- 一、以上列記せる名流は固より投票者の參考として掲載したるもののみ。但し博文館會員に關する投票は無効とす。館員以外に選定せむとを望む。
- 一、吾人の列記せし活動舞臺に在りて現に手腕を奮ひつゝある名家、及び會つて其の方面に立ちし名家を除きて、新しく人選せむとを望む。
- 一、一切の情實を示け、官制的或は習慣的に定められし進級の順序を顧みず、朝野の別なく、次期の社會を造るべき理想的人物を讀者諸君の選定に問ひと欲するは本誌の意旨也。

# 新進名家投票第二回發表

(1) 總理大臣適任者一名(二月十五日迄に到着したる分)  
(但得點五百票未滿の者は略す)

三六八七 山本權兵衛君 一九二四 渡邊國武君  
三四一五 大石正巳君 一八五六 長谷揚純孝君  
三三三三 後藤新平君 一七七二 伊東巳代治君  
三二五二 寺内正毅君 一三二七 平田東助君  
二八三七 原敬君 七九三 曾根荒助君  
二四〇二 德川家達君 五五九 末松謙澄君  
三三九八 清浦奎吾君 五二二 大浦兼武君

(2) 韓國統監適任者一名(同上)

四九三一 桂太郎君 二一三四 寺内正毅君  
四二六〇 長谷川好道君 一八八一 末松謙澄君  
二七〇三 曾根荒助君 一八二七 山本權兵衛君  
二四四〇 渡邊國武君 一六八二 高島柳之助君  
二二五八 後藤新平君 二二九六 德川家達君

(3) 參謀總長適任者一名(同上)

五二六六 福島安正君 二四四九 川村景明君  
五〇三三 上原勇作君 二一六七 寺内正毅君  
四三三七 宇佐川一正君 一九三〇 松石安治君  
三二七八 松川敏胤君 七七六 井口春吾君  
三九九五 長岡外史君 五九二 乃木希典君  
二九三一 榮田五郎君 五三九 長谷川好道君  
二五二六 森合豐三郎君 五一 大島久直君

(4) 聯合艦隊司令長官適任者一名(同上)

五九〇〇 島村速雄君 一五八三 八代六郎君  
五八六九 上村彦之丞君 一四九六 三須繁太郎君  
三六〇七 伊集院五郎君 九四五 桑山久八君  
三二一六 田羽重遠君 八八六 坂本俊篤君  
一九〇五 加藤友三郎君 八二七 坂本俊篤君

(5) 外務大臣適任者一名(同上)

四二五二 山座圓次郎君 一六四三 戸水寛人君  
三八五六 都筑馨六君 二七一 橋山和夫君  
三五二九 高平小五郎君 九三七 木野一郎君  
三四九二 伊集院彦吉君 九一五 大石正巳君  
三一九三 栗野慎一郎君 七三九 井上勝之助君  
三〇一六 内田康哉君 五二一 竹越典三郎君  
二九三七 珍田裕巳君 五〇九 倉知敏吉君  
二二五八 加藤高明君

(6) 内務大臣適任者一名(同上)

三四五三 大浦象武君 一九三三 末松謙澄君  
三三九三 金子堅太郎君 一七二四 尾崎行雄君  
三三四五 床次竹次郎君 一五六七 河野廣行君  
三三三二 島田三郎君 一二三六 濱田清三郎君  
二八七六 古賀康達君 七七八 藤井英三郎君  
二七三五 關清英君 七二九 一木喜徳郎君

(10) 民間經濟界の重鎮一名(同上)

三八三〇 添田壽一君 一二四七 若尾謙一君  
三六六〇 中野武管君 九五三 藤田三三君  
三三六〇 益田孝君 八八六 村井吉兵衛君  
三二七六 岡田孝吉君 八二九 安田善次郎君  
二八六三 莊田平五郎君 六三〇 山本謙吉君  
二二〇四 高橋是清君 五九六 岩下清周君  
一六三九 住友吉左衛門君 五六八 早川千吉郎君  
一三七八 豊川真平君 五四二 大倉喜八郎君  
一一五七 國塚磨君 五三九 朝吹英二君

(11) 政黨領袖適任者一名(同上)

三四八九 大石正巳君 一九三八 河野廣中君  
三三六二 大浦兼武君 一六五五 渡邊國武君  
三三〇八 長谷揚純孝君 一五七〇 桂太助君  
二八七五 後藤新平君 一三七六 高島柳之助君  
二七九二 伊東巳代治君 一三五四 元田健吉君  
二六八八 大塚養毅君 六二九 鳩山和夫君  
二六五九 加藤高明君 五五六 戸水寛人君  
二五三一 尾崎重行君 五三〇 松田正久君  
二二五七 原敬君

(12) 學術界の泰斗四名(同上)

一八三五 桑木嚴翼君 一五八九 入澤達吉君  
一八二二 金杉英五郎君 一四六〇 木村敬吉君  
一七七六 中村達太郎君 一四五七 下瀬雅九君  
一七六五 姉崎正治君 一三三九 田中正平君  
一六三八 三好學君 一三二五 伊東忠大君  
一五九二 丘淺次郎君 一二五六 森三吉君

(7) 大藏大臣適任者一名(同上)

三八九一 目賀田種太郎君 二五七六 三島圓太郎君  
三七四二 若槻禮次郎君 一九八三 水町葵六君  
三三三六 田尻和次郎君 一六二〇 曾根荒助君  
三一九七 武富時敏君 九四七 坂谷芳郎君  
二九八五 高橋是清君 四五二 田健治郎君  
二七三四 澤田謙一君

(8) 文部大臣適任者一名(同上)

三三〇九 島田三郎君 一二四六 辻新次君  
三二七一 澤柳政太郎君 一一八三 山川健次郎君  
二八九七 新渡戸稻造君 一一五九 江原宗六君  
二五三八 岡田真平君 九三七 尾崎行雄君  
二五二七 高田早苗君 九二一 都筑馨六君  
二二八六 竹越典三郎君 六三四 演義新君  
三二五九 上田萬年君 五九六 木下長君  
二二一三 菊池大鏡君 五六八 木下長君  
一六三三 鎌田榮吉君 五三三 千頭清次君  
一三九五 井上哲次郎君 五一八 伊澤修二君

(9) 鐵道院總裁適任者一名(同上)

三七七〇 平井晴二郎君 二五六九 片岡直温君  
三六九五 古市公威君 一九四二 牛場卓藏君  
三一六八 仙石真君 一六六五 大屋權平君  
三〇五四 中村嘉公君 八五六 中橋徳五郎君  
二九一六 長谷川隆介君 八三七 大浦兼武君  
二七三五 山之内次君 六九四 高橋是清君



紙用票投家名進新												
(12) 四の學 界 名 斗 界 留學 留學 留學 留學	(11) 領政の首 一名	(10) 民間の首 一名	(9) 鐵道院 一名	(8) 文部大臣 一名	(7) 大蔵大臣 一名	(6) 内務大臣 一名	(5) 外務大臣 一名	(4) 聯合總隊 司令官一名	(3) 警視總監 一名	(2) 樞密院 議長一名	(1) 總理大臣 一名	
時日投票	住所姓名	(17) 未來の橋 調一名	(16) 梨園の泰斗 一名	(15) 理想的新聞 記者一名	(14) 宗教界 の泰斗 三名	(13) 文藝界 の泰斗 四名						月 日 午 時投票

三八 三〇八 五八 九二六	(14) 宗教界の泰斗三名(同上)	九三 四四 四七 九七 九三 七九 九八 七九 七九 九〇 一七 五二	(13) 文藝界の泰斗四名(同上)	七七八八 九九九九 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
千天 黑千 住家 宗尊 武福 弘主 君君 君君 君君 君君	江崎安東 正島 和幸 島坪 大幸 中夏	田田 村村 内内 町町 田田 村村 目目	中三 岡岡 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三	好村山 島 島 島 島 島 島 島 島 島 島 島
四六 一三 八四 九二 三九 六五	五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五	五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五	五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五	五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五 五五
兩大 釋大 餘谷 宗光 文光 演瑞 鐘演 雲君 君君 君君 君君	長竹 後下 北松 總小 上山 真和 獨寺 大三 田小 小	谷 川 内藤 村村 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎 崎崎	河崎 近山 中佐 立福 寛美 富富 富富 富富 富富 富富 富富 富富	藤崎 村村 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤 藤藤

二二三三 三三八九 三二四六 三三六二 三三九四 三三七一 三三六一	(17) 未來の橋調一名	三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三	(16) 梨園の泰斗一名(同上)	三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三 三三	(15) 理想的新聞記者一名(同上)	五二 五三 五三 五三 五三 五三 五三 五三 五三 五三 五三 五三
國太 風小 駒錦 見刀 常ヶ 山山 君君 君君 君君 君君	尾市川 中市 川井 田川 川井 田川 川井 田川 川井 田川 川井 田川	大竹 新朝 黒島 島島 島島 島島 島島 島島 島島 島島 島島 島島	信那 道泉 六郎 郎郎 郎郎 郎郎 郎郎 郎郎 郎郎 郎郎 郎郎 郎郎	山崎 石志 江福 田秋 大杉 村中 川石 藤山 田山 町山 町山	山崎 石志 江福 田秋 大杉 村中 川石 藤山 田山 町山 町山	川崎 風花 岩山 君君 君君 君君 君君

### 告 豫 號 次

- ◎ 田中宮相
- ◎ 實利と空想
- ◎ 三税廢止論の精神
- ◎ 風教と史傳
- ◎ 名士の議院觀
  - 長島鷲太郎◎加藤恒忠◎福本日南◎
  - 松村恒一郎◎鶴澤聰明諸代議士
- ◎ 世界無比の憲法
  - 子爵金子堅太郎
- ◎ 大隈伯座談
- ◎ をんを
- ◎ 銅山王
- ◎ 怪力亂心
- ◎ 文士の見たる政治家
  - 鳴雪◎秋骨◎水蔭◎天外◎秋聲◎春葉◎柳浪◎秋江諸氏
- ◎ 西問島事情
  - 村田 懋磨
- ◎ 名士の米國觀
  - 安孫子久太郎◎安部磯雄◎村井保固
- ◎ 鳳生◎正義人道生其他

行發日一回一月毎

價 定 額 太

三冊(三ヶ月)	八拾七錢	九	九拾六錢
六冊(半年)	壹圓六拾五錢	拾八	壹圓八拾三錢
主費(一ヶ年)	壹圓貳拾錢	拾六	壹圓五拾六錢
●年刊十二冊	○臨時増刊年數價額不同		

▲廣告料及其等級の位置ノ切日等は御照會次第詳細に御報可致候

### 規 略 文 注 御

●本館の圖書雜誌は前金にて御注文の外一切送本せず御注文の番名編數冊數御住所姓名は文字明瞭に御認めあれ御送金は郵便爲替にて振込局は東京本局御取宛名は必ず一割増の事●一時に五圓以上御注文の方へは「博文館々友證」を呈し後向五ヶ年間何品にても正價の一割引にて差上げ●御注文に關する審狀宛名は「博文館小賣係」の御注意あれ未納不足税は請取不申候間御發信の際

製 復 許 不

明治四十二年二月廿日  
發行所 東京市日本橋區博文館  
印刷所 飯田三  
發行所 東京市日本橋區博文館  
印刷所 飯田三  
發行所 東京市日本橋區博文館  
印刷所 飯田三



# 告 豫 號 次

- ◎田中宮相 山路 愛山
- ◎實利と空想 姉崎 正治
- ◎三稅廢止論の精神 島田 三郎
- ◎風教と史傳 山口正一郎
- ◎名士の議院觀 長島鷲太郎◎加藤恒忠◎福本日南◎  
松村恒一郎◎鷗澤聰明諸代議士
- ◎世界無比の憲法 子爵金子堅太郎
- ◎大隈伯座談 江森 泰吉
- ◎をんな 草野 柴二
- ◎銅山王 佐野 天聲
- ◎怪力亂心 巖谷 小波
- ◎文士の見たる政治家 鳴雪◎秋骨◎水蔭◎天外◎秋聲◎春  
葉◎柳浪◎秋江諸氏
- ◎西間島事情 村田 懋麿
- ◎名士の米國觀 安孫子久太郎◎安部磯雄◎村井保固
- ◎鳳生◎正義人道生其他

# 類 書 學 文

- 大町文 ●桂月 雜木林 全一冊洋裝袖珍 石版表紙紙頭美本 紙數三〇六頁 價廿八錢 郵稅六錢
- 學士著 ○大絃 小絃 全一冊洋裝袖珍 紙數四一〇頁 價三拾錢 郵稅六錢
- 齋藤綠 ●みだれ箱 全一冊洋裝袖珍 紙數三七〇頁 價廿八錢 郵稅四錢
- 齋藤綠 ○あられ酒 全一冊洋裝袖珍 紙數四六一頁 價廿五錢 郵稅六錢
- 石井研 ●雅三俗四 全一冊洋裝袖珍 紙數一九三頁 價拾五錢 郵稅四錢
- 國府犀 ○龍吹鶴語 全一冊洋裝袖珍 紙數二五八頁 價拾五錢 郵稅四錢
- 東君著 ○龍吹鶴語 全一冊洋裝袖珍 紙數二五八頁 價拾五錢 郵稅四錢
- 高山樗 ●文藝評論 全一冊洋裝袖珍 紙數三四四頁 價三拾錢 郵稅六錢
- 牛君著 ●文藝評論 全一冊洋裝袖珍 紙數三四四頁 價三拾錢 郵稅六錢



(後付の二)

## 製 複 許 不

發行所 東京市日本橋區本町三丁目博文館  
印刷所 飯田三  
印刷人 飯田三

局本  
四十二百六千二●市三●用  
番八千用創

## 規 略 文 注 御

●本館の圖書雜誌は前金にて御注文の外一切送本せず●御注文の書名編數冊數御住所姓名は文字明瞭に御認めあれ●御送金は郵便爲替にて振込局は「東京本局」受取宛名は「東京日本橋區本町三丁目博文館」●郵券代用は必ず「御増の事」を呈し●五冊以上御注文の方は「博文館」を呈し●後向五ヶ年間何品にても正價の一割引にて差上げ●御注文に關する書狀宛は「博文館」小賣係の御注意あれ●郵便物未納不足税は請取不申候間御注意の

▲廣告料及其等級の位置切日等は御照會次第詳細に御報可致候

行發日一回一月每

價 定 陽 太

冊 數	前 金	郵 稅	計
三冊(三ヶ月)	八拾七錢	九	九拾六錢
六冊(半々年)	壹圓六拾五錢	拾八	壹圓八拾三錢
主冊(一ヶ年)	壹圓貳拾錢	拾六	壹圓四拾六錢
●年刊十二冊	○臨時刊年數同價格不同		

明治四十二年二月廿日發行  
18.12.27  
圖書館

編輯共君策信藤齋士學文君治正崎姊士博學

界の光明に接してより猛然として身を妙法の宣傳に委し、三世の預言者としてその短き一代を終れり、その時々の論議、不朽の逸作、收めて此全集五冊の中にあり、日本文明の將來と人生の光明とに焦慮する人士はこの中に一條の大天火を見ん……

第三卷全集

釋迦  
○福音○佛陀の誕生○宮中の生活○三苦○佛陀の決心○佛陀の出家○車匿及佛陀の道○成道○佛陀の布教

第四卷全集

平相國  
○平家與隆の由來○清盛の前半生○一門の榮華○重盛論○源氏の勃興○入道の最後○清盛論△附○平家雜感○清盛與相考

第五卷全集

菅公傳  
○序論○菅原氏の傳統及少時○菅公の性格○政治の宗棒○菅公の年表○大菅公の公議の後に書す

第一期 倫理、問題、研究

人生終に奈何○厭世論○老子の哲學○人生の價值及び厭世主義外に

第二期 國家主義の時代

日本主義○日本主義と哲學○國民的哲學○自殺論外に廿六日

第一期 雜篇

歷史と人種○成敗と正義○社會問題○私立學校を論じて當局者の注意を喚ぶ外に八十一日

第二期 雜篇

美的生活を論ず○日蓮上人とは如何なる人ぞ○日蓮と基督○吾が好む文章外に八日

瀧口入道(歴史小説)  
◎感想——吾妹の墓△戀情論△故郷論△夢中論△今様三首△敬盛忠度小説△准平郎の悲哀△傷心錄△思ひ出の紙外十二項

雜篇——島津山紀行△序詞△夏季の學生△海の文藝△瀧見海日記△消息——仙臺より國元黃父へ△病院より姉崎博士へ△大磯より笹岡福風氏へ△其池消息百餘通

外篇——倫理教科書(社會總論、皇室に對する本務)△世界文明史(文明とは何ぞや、羅馬帝國と基督敎)△論理學△近世哲學

著者墳墓の圖の原稿を編入  
全編七冊(版七) 正價壹圓五拾錢  
小包送料拾五錢

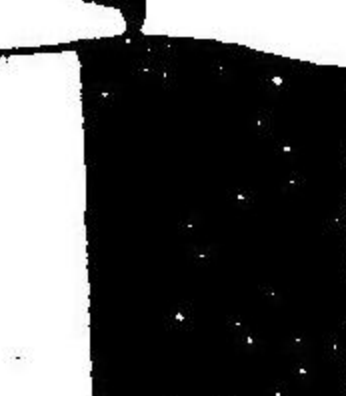
裝幀大判 全編九冊(版九) 正價壹圓五拾錢  
小包送料貳拾錢

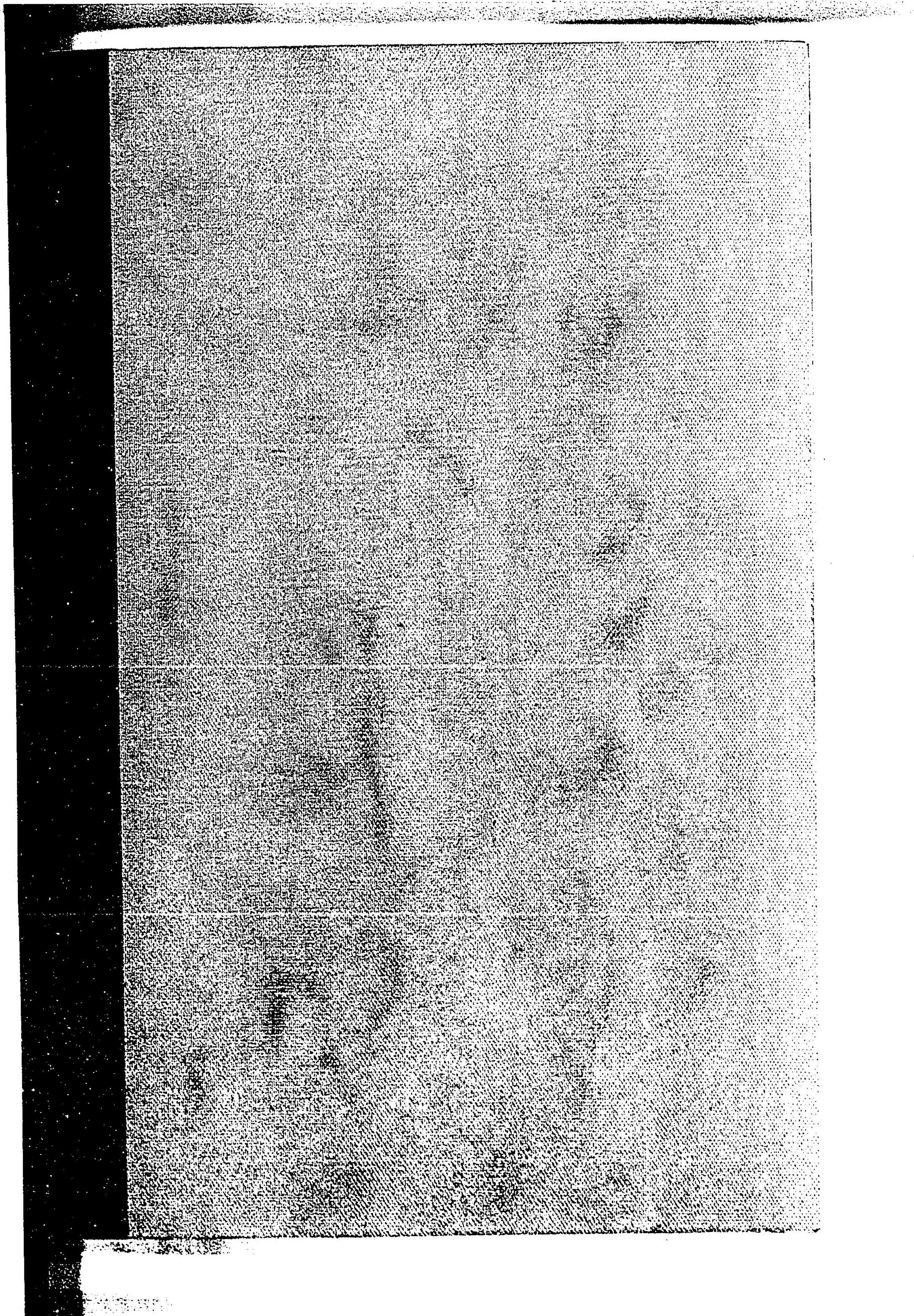
編本紙七冊(版) 小包送料拾五錢

此書乃... 卷之... 目錄... 第一... 第二... 第三... 第四... 第五... 第六... 第七... 第八... 第九... 第十... 第十一... 第十二... 第十三... 第十四... 第十五... 第十六... 第十七... 第十八... 第十九... 第二十... 第二十一... 第二十二... 第二十三... 第二十四... 第二十五... 第二十六... 第二十七... 第二十八... 第二十九... 第三十... 第三十一... 第三十二... 第三十三... 第三十四... 第三十五... 第三十六... 第三十七... 第三十八... 第三十九... 第四十... 第四十一... 第四十二... 第四十三... 第四十四... 第四十五... 第四十六... 第四十七... 第四十八... 第四十九... 第五十... 第五十一... 第五十二... 第五十三... 第五十四... 第五十五... 第五十六... 第五十七... 第五十八... 第五十九... 第六十... 第六十一... 第六十二... 第六十三... 第六十四... 第六十五... 第六十六... 第六十七... 第六十八... 第六十九... 第七十... 第七十一... 第七十二... 第七十三... 第七十四... 第七十五... 第七十六... 第七十七... 第七十八... 第七十九... 第八十... 第八十一... 第八十二... 第八十三... 第八十四... 第八十五... 第八十六... 第八十七... 第八十八... 第八十九... 第九十... 第九十一... 第九十二... 第九十三... 第九十四... 第九十五... 第九十六... 第九十七... 第九十八... 第九十九... 第一百...

目錄

...





特70

540

205316-000-4

特70-540

文艺史

博文館

M42

EDV-0486

